
とある科学の生物兵器

洗剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の生物兵器

【Nコード】

N1041S

【作者名】

洗剤

【あらすじ】

アレックス・マーサー。彼はマンハッタンで起きた細菌テロの三週間の後、仕事を終わらせようとした。しかし、それは叶わず、学園都市の誘いを受けることになった。

プロローグ（前書き）

捏造、憶測、Prototypeのネタバレ、とある系をあまり知らない作者含みます。

友人とのチャットから始まったノリです。投げはしませんが、オリジナルの方を優先し、三人称の練習のつもりで5、6話から更新が亀やナメクジになると思います。

プロローグ

学園都市。それは日本の東京西部に位置する、完全に独立した教育研究機関である。東京を含む、四つの県に跨がる円形の都市であり、その総面積は東京都の三分の一に相当する。

さらに、総人口の約二百三十万人の八割が学生ということや、根本は教育、研究機関の集合体という特殊さまである。研究機関の集合体ということからか、都市の内外では数十年の技術格差が存在する。

そして、侵入は極めて困難。都市は高さ五m厚さ三mの外壁に囲まれ、内外を結ぶ交通網も、厳重な審査を有する専用ゲートと空路以外遮断されている。

仮に入れたとしても都市内は人工衛星や、監視カメラなどによって監視されており、治安維持組織に発覚されるのは時間の問題である。

侵入は困難だ。なら、招き入れてもらえばいい。

学園都市第七学区に存在するドアも窓もないビル。その内部の巨大なビーカーの正面に、一人の無表情な外国人男性がいた。灰色のフードの付いた服の上に、黒い長袖のジャケットにジーパンという彼の母国アメリカなら何ら違和感のない服装だ。しかし、このビーカーの部屋にはひどく不釣り合いがあった。

「分かった。ここで俺は……学生として暮らせばいいんだな？」

フードの男が不服そうに、だが仕方なさそうに言った。

『ああ、特例の留学生ということだ。警備員や研究者が希望のよう

だが、部外者にやらせるわけにもいかない。学生として暮らし、学園都市に害なすものを有事の際に排除してくれ。対象はこちらが指定する。これで追われなくなるなら安い条件だろう。』

その声は、男の目の前にある巨大なビーカーの内部に、逆さまに浮いている緑の手術服を着た人間が言った。その容姿は形容しがたく、男にも女にも、子どもにも老人にも、聖人にも囚人にも見える。

「……………本当にこれだけか？」

男は信じれないといった様子だ。

『君……………いや、アレックスはあのテロを起こし、仕事を終わらせられない。あの三週間の間に、数百万の罪もない人間が死んだ。一人の死では足りない、十字架を背負いながら生き続けるのが罰だ。しかし……………本心としては、君の行動が気になるんだ。それとも……………年齢か？君なら外見を誤魔化すのは容易いだろう。』

ビーカーの男の言葉は諭すようだが、感情はまったく伺えない。この言葉が詭弁かどうかは、この男にしか分からないだろう。

その言葉を聞き、男は深く考え込んだ。辺りに、しばらくビーカーからの機械音だけが響いた後、

「……………読めないやつだ。それと、アレックスでいい」

そういうと、アレックスとビーカーに背を向けて歩き出した。

赤い液体で満たされた巨大なビーカーの中に浮かんだ人間が、口

角をグニャリと吊り上げていた。

プロローグ（後書き）

目指せ、3、4ページ（携帯）
アンチスキル
警備員や風紀委員は警備員や、
風紀委員のほづがいいですか？
ジャッジメント

七月十五日（前書き）

無理やり一日を押し込んだ。

上条さんの口調が分からない……アレックスさんは言わずもがな。

七月十五日

七月十五日

相変わらず、厚着のアレックスは荷物を運んでいた。荷物といつても、他人のを運んでいる訳ではない。学生寮に引越である。しかし、服も体の一部であるアレックスに荷物は必要なく、段ボールを二つ抱えるのみである。

八回建ての、ボロいワンルームマンション。しかし、トイレ、風呂、台所があるということからそこまで悪くもない。管理人の男性によると、七階の部屋が当てられたらしい。

アレックスは機械的に段ボールの角でエレベーターのボタンを押すと、故障しているのか反応がない。アレックスは仕方なく階段を上るが、目的地は七階のため、二段ずつ上ってもなかなか着かない。そして、やっとのことで七階に着き、ドアを開けようとするも……ガチャガチャと金属がぶつかる音がするだけで開かない。

「……くそつたれ」

この短時間での不連続きに苛立ちを覚えた。そして、見られると色々と面倒になるので、周りに人の目が無いことを確認すると

小石を蹴るような蹴り方で、ドアを蹴り飛ばした。

ドアは耳を押さえたくなるような轟音を立てながひしゃげると、壁に繋ぎ止めていた金具の限界を越えるような速さで開いた。

「うおっ！何ですか!？」

すると、ドアの向こう、通路から青年の声が聞こえた。通路に出てみると、人当たりのよさそうな顔をした、ツンツン頭の学生服の青年が、持っていたのであろう財布から小銭をばらまいたまま突っ

立っていた。

「え？」

そして、アレックスの容姿が約百七十八センチという高校生にしては高い身長、無表情、厚着にパーカー。そして、日本人離れた青い瞳と茶色い髪。更には、外国人ということに二段構えで驚いた様子で、音に驚いた体勢のまま固まっていた。

「悪い」

そう言うと、アレックスは段ボールを置き小銭を拾い始めた。それを見て我に帰ったのか、青年も落ちた小銭を拾い始めた。最初、アレックスは放置しようかと思っただが、隣人という可能性もあることから拾うのを手伝うことにした。

「あー、留学生さんでせうか？」

青年は戸惑いがちに、話しかけた。

「ああ」

アレックスは興味もないので、適当に返した。

「日本語……じょうずですね」

「どうも」

果たして、一方がゴロしか投げてこない言葉のキャッチボールを会話と言うのか。

アレックスはあの事件の後、仕事を、自分を終わらせようとした。しかし、ワクチンを取りに戻るも何一つ無く、その上かなりまずいことが起こった。

自分の顔を知って事件を生き延びた兵士によって生存を確認された事により、建物だけとはいえ国連本部を含むマンハッタン島を壊滅に追いやったテロ実行犯として再び追われることとなった。

そして、そのアレックスを捜査関係者の抹殺という手段を用い、ピーカーの人間は学園都市に招き入れた。

それがスムーズに行われたのは、事態を重く見た捜査関係者が内密に、慎重に事を進めていたのが幸いした。これにより、アレックスが生存していることを知るのはピーカーの人間と、その他の一部のみになった。

しかし、元恋人を始めとした裏切りにより、他人との関わりを持つとうとは思わなくなってしまった。そして、自分が死ぬ手段も無くなると同時に「死にたいなら、なぜ自信の記憶からでもあのワクチンを作ろうとしない。本当は死にたくないのではないか？」そう考え始めた。

「……すごい力ですね」

青年は、ドアのかなりへこんだ部分を眺めながら呟いた。

下の方なので目に入りにくいだが、パツと見ただけで靴の跡がくつきりと分かる。

「まあな」

アレックスは肉体の硬度、質量を操れる上に、遺伝子情報を元にした擬態もできる。正確には、ウィルスができるのだが。今のアレックスは、ちょうど高校生くらいの年齢の時のアレックス・

マーサーになっている。

アレックス・マーサーが自分ではないと気付いたことにより、取り込んだ人間の一人として、アレックス・マーサーを見れるようになった。しかしそれでも、アレックス・マーサーは自分であり、元恋人などの裏切りは他人事には思えなかった。

「これで終わりだな」

アレックスは視界に小銭が無いので拾い終えたと判断し、立ち上がると再び段ボール箱を抱える。そして青年が立ち上がった瞬間、

「ええ、そうみた」

プラスチック製の定規を折ったような音がした。その音は、立ち上がる際に半歩引いた青年の、右の足の靴の裏が源らしい。

「まさか……!？」

青年は慌てた様子で右足を上げると

「不幸だあああああああ!!」

圧死したキャッシュカードが姿を覗かせた。

アレックスは突然叫んだ青年を、煩く感じながらも少し同情するのであった。

「え!？」

更に、青年の視界に自分の腕時計が目に入ると、これまた奇妙な声を出した。

「遅刻だあああああああ！！」

青年はキャッシュカードの破片を集め、それをポケットに押し込むと、アレックスに目もくれずにかなりの速さで階段を駆け降りて行った。

寮というのは、基本的に一つの学校が所有している。そして、先ほどの青年によると遅刻だそうだ。しかし、アレックスはビーカーの人間からの仕事をすれば良いわけで、遅刻なんていうのはどうでもいいと考えている。無論、走れば間に合うが、何十キロもの速度を出しながらマラソンをするその姿を見られれば、能力者だらけの都市とはいえどもアウトだ。それに、アレックスの全力疾走は安定させるために質量を上げる故か、一歩ごとにコンクリートが割れる。しかし、それは自転車のバランスを取るように無意識なので、どうしようもない。

慌てるどころか、急ぎもしないアレックスは自室のドアの前に行くと、管理人から受け取った鍵でドアを開けた。フロアリング張りの、住むだけなら何も問題の無いワンルーム。家財も特にいらぬアレックスにとって、これで十分満足だった。

フロアリングの上に適当に段ボールを置くと、そこから制服を引っ張り出す。そして、一度衣服を体内に取り込んでから着替える。それに平行して、段ボールから教科書類を鞆に詰め込む。

通学方法は電車が禁止。そして、この高校が推奨するスクールバスというのもあるが、料金がバカ高い上にこの時間帯には当たり前だが走っていない。

アレックスは制服は体格に合っているとは思いつつも、デザインからの窮屈さを感じた。しかし、どうしようもないので、そのままビーカーの人間の部下から貰った地図を頼りに、高校へ向かった。

『なんの変哲もない』という言葉がここまで似合う学校をアレックスは見たことがなかった。余りにも平凡すぎて、個性がない。余りにも平凡というのも、学園都市でしか見られないのではないのだろうか？

一部の地図記号が理解できずに困ったが、日本語の会話と同様にマンハッタンで取り込んだ日系人の記憶を頼りに読むことによつてなんとかたどり着くことができた。

校門は閉じていたが、アレックスは何食わぬ顔で開けて入り、その際に生徒指導部主任である無差別ゴリラ級に遭遇した。しかし、道に迷ったともっともらしい言い訳をし、なんとか納得させた。

その際に、アレックスは感染者かと疑って視覚強化で調べてしまつたが、後に体格通りのかなりの古武術の使い手と聞き、その疑いは深くなると共に、これからアレックスが感じる学園都市の日常生活においての異常さの第一号である。

「これからあなたの担任を務める、月詠小萌です。

困ったことがあれば、何でも相談すると良いのですよーっ！」

職員室に入ったアレックスの目の前に、小学生にしか見えない先生がいた。ドアを開けると目の前に彼女は居たのだが、二人の四十センチもの身長差がアレックスを危うく小萌に衝突させそうになつた。

「アレックス・マーサーだ、よろしく頼む。日本語はまだ完全に使えないが、そういう部分は割合してくれ」

敬語などの使い分けは、取り込んだ人物からは取得できなかった。

その為、その旨を一般的な言い方にし、アレックスは伝える。

「分かったのです。でも、今でも十分上手ですよー」

小萌は出席簿などの入ったカゴを持って言う。

「ささっ、早く教室にいくのです。みんな待っているのですよ」

そう言うと、アレックスにとってはそれほどでもないが、かなりの急ぎ足で職員室を出た。そして、アレックスはその遠足に行くように受かっている背中を、保護者のように追いかけた。

「ここですよ」

ある教室、一年七組と書かれた教室の前で小萌は立ち止まった。その教室からは、やけにうるさい声が授業が始まっているにも関わらずによく聞こえた。その割に、隣の教室は、まるで元気を吸い取られたかのように静かだ。

「では、前置きをするので待つのですよ」

小萌はそう言うと、教室へと入った。

アレックスは悩んでいた。ビーカーの人間の目的は何か。なぜ、主導権がグリーンから自分に移り、更に危険な存在になったにも関わらず、学園都市という約二百三十万もの巨大都市に自分を招き入れられたのか。学生として、なぜ暮らさせるのか。

もし自分がテロの実行犯と発覚すれば、本部の移された国連によって学園都市は責任を問われるどころか、正義が大好きな国が手動となつての戦争だ。幸いにも、ビーカーの人間は自分に自動回復のレベル3という肩書きを与えた。容姿は知られていないということ

もあり、発覚は難しいだろう。

アレックスは、本来はレベル3どころか、細胞が残っていればそれが分裂を繰り返し、再生することも可能だ。それ処か、記憶した遺伝情報を元に擬態をし、脳を吸収すれば記憶や経験を自分のものにすることも可能。

その他のハイスペックぶりを挙げるなら時速七十二キロほど走ったり、本人も原理は不明だが滑空や空中ダッシュを行うなどの機動力。戦車の主砲を十発程度受けても、戦闘の続行が可能な防御力。同上の戦車を百メートルは投げられる腕力。などを兼ね備えている。

アレックスは、単身で戦争をできると言われても、なんら不思議が無いのだ。

最もその過剰なハイスペックさと利己的な面から、敵対した相手は殺されることが前提になるが。

「アレックスちゃん、どうしました？」

アレックスは肘をつつかれたのでそちらを見ると、ドアから半身を出した小萌がいた。

「何でもない、ちょっととした考え事だ」

『ちゃん』という響きにむず痒さを感じながらも、アレックスは思考を切り替える。

「大丈夫ですよ！みんないい子ばかりですから」

その様子を、不安を感じていると思ったのか、小萌は励ますように言った。

「大丈夫だ」

アレックスは、小萌の純粋な思いやりが、とても新鮮に感じた。

「では、自己紹介をお願いするのです」

そして、小萌はアレックスの肘をつかむと教室に引っ張り込んだ。

常時無表情のアレックスを見て、ざわざわと話し出す生徒たち。

その内容は、言語についてであれ、奇妙な時期の留学生の理由についてであれ、様々な話題が上がっていた。

「はい、静かにするのです」

小萌が手を叩きながら言うと、思いのほか静かになった。そして、小萌はそれを満足そうな顔を、アレックスに向けてきた。恐らくは、自己紹介しろということなのだろう。その意図を汲み取ったアレックスは口を開いた。

「アレックス・マーサーだ。よろしく」

そう言うと、アレックスは小萌に自分の席を聞き、期待に満ちた目をする生徒を放置し、さっさと座ってしまった。アレックスの記憶に転校や、転校生が来たことのある人物はいるだろう。しかし、個人を選んで記憶を覗くという、手間をかけてまですることではないと、アレックスは判断した。

「……………え？なんや、終わり？」

青い髪にピアスの男子生徒が、いち早く追い付いた。

「そりゃないぜい！」

それに続いてサングラスをかけた金髪を逆立たせた男子生徒も追い付き、抗議かどうかが口調のせいで曖昧なことを言った。

アレックスも言われ続けるのは煩わしいので、打開策を打つことにした。

「なら、聞きたいことを質問してくれ。慣れてないんだ」

金髪の男子生徒の目が怪しく光ったのを、アレックスは捉えた。

「レベルはいくつなのかにゃー？」

「自動再生のレベル3だ」

レベル3、一般的に五段階に分けられる中のちょうど真ん中だ。しかし、この平凡すぎるこの学校には、ほとんどいないレベルである。

その為、それを聞いた生徒たちはザワザワと騒ぎ始めた。

「いつ開発したん？」

青い髪の生徒が、それにかき消されないような声で言った。

「三ヶ月前だ」

全てが変わった事件の起こった、九ヶ月前と言ってもよかった。しかし、アレックスは開発したにも関わらず、長期間学園都市の外にいた理由を聞かれるのを危惧した。

「三ヶ月でレベル3!？」

突如、青年の大きな声が教室に響いた。

アレックスは煩わしく感じながらもそちらに目をやると、寮にいたツンツン頭の生徒だった。

「お前は寮にいた……」

アレックスがつい呟いた言葉に、他の生徒たちが反応した。

「わいは友達やで……」

「………流石、一級フラグ建築士にやー」

「上条当麻！貴様は何を考えている!？」

上条当麻と呼ばれた生徒は、転校生のみによくフラグを立てたと勘違いされての罵声の総攻撃や、哀れみの目を向けられた。

「違う、そんなことは事実無根だ！そうですね！アレックスさん？」

「知るか。そもそも、フラグって何だ？」

アレックスは会話の流れから『フラグ』を和製英語だと判断し、返答を放棄。

「不幸だあああああああ！！」

上条当麻は、午前中に二度目の絶叫をすることになった。

時間は跳んで、昼休み。

様々な研究者や、軍人などから知識を得たアレックスにとって、あれからの平均的な高校程度（アレックス・マーサー比）の授業は、退屈しかなかったと述べておく。

しかし、アレックスは自分の質量保存の法則を初めとした様々な法則を無視していることを考えてしまい、物理の時間に大いに悩んだ。

昼休みといっても、アレックスは学園都市に入るまで人間を吸収することで養分を取っていた。その習慣からか昼食を持ってきても、買おうにも現在の所持金である奨学金は全て銀行である。しかし、通常の人間ではないので何週間かの絶食は可能だ。問題は、昼食を取らないのが回りからどう見られるかである。

アレックスはその対処として散策がてら校内をうろつき、すでに食べたと思わせることにしようとした。しかし、この平凡すぎる学校に散策などはあまり必要なかった。朝、職員室に迷わず行けたように、配置にも大体の予測がつくのである。その為、アレックスは教室に留まることになった。

「えっと、アレックスさん？」

「アレックスでいい」

アレックスが頼杖を付きながら座っていると、案の定、朝のツン

ツン頭の男子生徒、上条当麻に話しかけられた。それを、金髪と青い髪の生徒がツンツン頭の生徒の背後から見ている。

「飯は食わないのか」

「ああ、奨学金が銀行だからな。それに、何日か抜いても問題ない」
それを聞いた当麻は、少し驚いたような様子だ。

「おいおい、大丈夫なのか？学園都市って急に不良に追われたりするぞ？」

「問題ない」

当麻は力が出ないことを案じたのだろう。しかし、急に不良に追われたりするのには、当麻の性格が原因だ。それに、アレックスを追いかけたとしても、空間移動系能力者以外はすぐに撒かれる。or 行方不明だろう。もともと、裏路地に入った時点で、空間移動とは別のものでも姿を消すことになるだろうが。

「自己紹介したいからこっちに来てくれないか？」

当麻は後ろの金髪と青い髪の生徒を指差して言った。
することも得になく、脳内で記憶を見て回っていたので、アレックスは了承した。

「土御門元春だぜい、よろしくにゃー」

まず、金髪グラサンの長身の生徒が言った。

「わいは「青髪ピアスだにやー」……それでいいわ、よろしゅうたのんま！」

続いて青い髪の生徒が言った。

「俺は上条当麻。よろしくな」

そして、元春たちの会話から名前はアレックスも知っているが、当麻が改めて言った。

「上条当麻に土御門元春、青髪ピアスだな？よろしく」

アレックスは青髪ピアスに本名を名乗らせない元春に対して疑問を覚えたが、得に問題無さそうなので触れないでおいた。

「よおし！個人的な質問タイムや。まずはわいから、どこから来たん？」

「アメリカ」

アレックスは、質問のために呼ばれたのかと思ったが、暇潰しにはちょうどいいと思った。

「次は俺だぜい。好きな食べ物は何だにやー？」

「……………肉だな」

アレックスは、肉が好きというわけでもない。しかし、肉食ウィルスの塊である自分の生存には、野菜よりも向いていた。

「俺か。自動再生のレベル3ってどれくらいだ？」

アレックスはそれを聞き、どう答えるか迷った。レベル3と言うからには、そこそこの怪我を治せるのだろう。しかし、変に答えればボロが出る可能性がある。そのため、はぐらかすことにした。

「どれくらいかはうまく言えないが、私生活ならこれで足りる」

「便利なんだな」

三人の中に、アレックスの発言を怪しむ者はいなかった。

「よっしゃ、二回目の質問は………ズバリ、何フエチャ!？」

アレックスの思考は停止した。固まったアレックスをピアスは悩んでると判断したのか、このようなことを言い出した。

「何でもいいんやで、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセミロングボブ縦ロールストレートツイントールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュワーデスウェイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人眼鏡目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリリングショツト水着バカ水着人外幽霊獣耳娘まで色々あるさかい、なんでもいいんやで？」

まるで機械のように息継ぎをせず言いながらも、確かな情熱を

込めて言う。ピアスにアレックスはかなり引いた。

「黙れ青ピ！明らかに引いてるじゃねえか！」

当麻はアレックスを指差しながら、笑みを浮かべる。ピアスをガクガクと揺すった。

「気にしなくていいぞ、アレックス！」

上条がそう言いながら妙にキレのあるヘッドロックを青ピにかけた瞬間、予鈴が鳴った。

「次は移動やから、はよ離しい！」

ピアスは当麻の腕をタップしながら言った。

アレックスはそのまま碎いてしまえばいいと思いつつも、その言葉を発することはなかった。

「質問しきれなかったけど、仕方ないにゃー」

元春はそう言うと、当麻たちを放置して教室から出ていった。アレックスもそれに続くことにした。

その後は、当麻とピアスが次の授業に遅刻する以外は大した事もなく、アレックスは帰宅した。

本来なら銀行やコンビニで金を下ろす予定だったが、明日が土曜日と言うことと、精神的に疲れたので明日行くことにした。

七月十五日（後書き）

地の文の青ピの表記はピマスより青ピのほうがじっくりくるかな？

七月十六日（前書き）

アレックスのウィルスは細菌兵器だと思っけど、それが集まって生き物になったら生物兵器だと思っ。定義が分からない……………

七月十六日

朝、アレックスは起きると、固まった体をほぐすためにストレッチを始めた。

起きると言っても、通常の睡眠ではない。取り込んだ膨大な記憶の整理である。

年に直せば何百年、何千年という記憶があるアレックスは、それを必要か不必要か分けているのである。 unnecessaryな場合は、細胞ごと消すことになるが。

昨日、帰りのSHRで小萌が今日の事で何か言っていた気がしたが、学校が昼過ぎから休みということ以外は覚えていない。そしてアレックスがそろそろ行こうかと制服に着替えた矢先、チャイムが鳴った。

「おい、アレックスいるか？」

アレックスは当麻と分かったと、手の甲を肩に当て、背負うように鞆を持った。

「今行く」

靴は室内でも履いているので、そのままドアを開けた。

「アレックス、行こうぜ」

「早くしないと置いてくぜーい」

そこには当麻の他に、元春もいた。アレックスは約束した覚えもないのに二人がいたことに驚いたが、寮生活は意外に悪くないと思

った。それと同時に、自分の正体を知ったらどうなるのかという不安も覚え、自分からなっただらうと、心の中で失笑した。

「待ったか？」

「いや、カミちゃんのほうが遥かに遅かったにやー」

そう言いながら、元春はニヤついた顔で当麻を見た。

「いやいや、上条さんにも理由がありましたね」

当麻は何かにうんざりしたように言った。

その顔があまりにもやつれていたので、アレックスも元春も何も突っ込まなかった。

「さあ、今日は能力テストで半日だにやー！」

元春は、待ってましたとばかりに言った。アレックスはそれを聞いて、昨日のSHRはそれだったのかと納得した。

「よし、早く行くにやー！ピリは昼食おごりにやー」

元春はそう言うと、すさまじい勢いでエレベーターのドアを閉め、一人で降りてしまった。

「土御門！階段か、エレベーターを待つか……」

「当麻、先行くぞ」

当麻は急ぐ辺り元春の提案に乗り気なようなので、アレックスは

当麻におごってもらうことにした。

現在、一文無しのアレックスである。

「え？先つて、階段か？」

「いや、っと早いな」

アレックスは手すりを越えると、七階から飛び降りた。

「アレックス！？」

頭上から当麻の困惑する声を聞きながら、アレックスは着地した。コンクリートに多少ヒビが入るが、仕方ないと、それで済ますアレックス。

これくらいなら自動再生で済むだろうと、レベル3にハイレベルな再生を期待していた。ウイルスに感染してから何十階から飛び降りることも日常茶飯事だったため、多少感覚が麻痺しているようである。

「先行くぞ！」アレックスは呆然とする当麻に軽く手を振ると、短距離走の速さで走り始めた。残された当麻はというと、その背中が見えなくなるまで啞然としていた。

「指定された場所に、移動するのでーす！」

S H Rによる説明後、生徒はそれぞれの該当する能力の場所へ移動していた。廊下では教員や、手の空いている生徒が誘導をしている。

アレックスは自動再生の場所である、保健室へ元春と向かった。
た。

「カミヤんに聞いたんだぜーい！七階から飛び降りたのかにゃー？」

そして、元春はさつきからこれである。アレックスは教室で当麻に大丈夫が聞かれたが、なんとか自動再生で済ませられた。しかし、自動再生の能力者である元春はそうはいかなかった。

アレックスはレベル3でも無理ということに、元春に言われて気がつくと同時に、意外に自動再生の再生力は弱いのだと知らされた。

「ああ、飛び降りた。でも階ごとに止まったから、何も問題ない」

アレックスは苦し紛れの嘘をついた。しかし、そんな嘘が通じるわけもなく。

「コンクリートにヒビが入ってたから、言い訳は無駄にゃー。さあ、本当の能力か、レベルを言うにゃー」

とうとう、元春は探りを入れ始めた。その表情はどことなく真剣だ。

そして二人は保健室の前に着き、アレックスが前になるように列に並んだ。

アレックスは本当の事を言うわけにもいかず、かといって逃げることも、口封じをすることもできない。アレックスは悩みに悩んだが、言わない以外は思い付かなかった。

「悪い、これは絶対に言えない」

そう言った途端、元春の表情がすつと緩んだ。

「……仕方ないにゃー。青ピも言わないからにゃー」

アレックスは、探りまで入れて来た元春がここで引くのには不信感を感じた。そしてアレックスが話題を変えようと口を開くと。

「アレックス・マーサー君、早くしてほしいんだけど」

すると、さつきから呼んでいたのか飄々とした女子生徒が、待ちくたびれたといった様子でアレックスを保健室のドアを中から開けて呼んだ。

「順番だにゃー」

そして、元春がアレックスの背中を押した。アレックスはそれに従い、保健室の中へ入った。

「さて、アレックス君だね。この椅子に座って」

アレックスが中に入ると、向かい合うように置かれた椅子に先ほどの生徒が座っていた。

「ああ。テストは何をするんだ？」

アレックスは言われるままに椅子に座ると、は椅子の側には記録用の紙の置かれた机しかないことに疑問を感じた。本来なら使われそうな機材は、全てベッドの横に置かれていた。

「君はレベル3だけど？」

測ってもないのにレベルを言う彼女に、アレックスは疑問を感じた。

「……………どうやって測ったんだ？」

いたって普通の反応。誰でもしてもないテストの結果を言われれば、それに疑問を感じるだろう。

「あのね、アレックス・マーサーはレベル3って言われてるのよ」

日本語に疎いアレックスは、否定の接続詞かと思っただがどうやら違うようだ。

「……………誰に言われた？」

アレックスはビーカーの人間だろうと、大体の予想は付きながらも聞いた。

「統轄理事長」

その名前を聞いた瞬間、アレックスは安堵した。具体的には、この高校にもビーカーの人間の手の者が目の前にいる。

つまり、監視されている、という事だ。アレックスは監視されるのは嫌いだ、自分の事情を知っている相手が自分を放っておくわけがないと思っている。そして今、見つけたことによりアレックスは多少だが、動きやすくなった。

「そういうわけ。だから、君もちゃんとバレないようにして欲しいんだけど……………朝の事とかね」

「どうやら、お見通しのようだ。アレックスの動きやすくなったというのは気のせいかもしれない。」

「さて、そろそろ頃合いかな？もう出てもいいけど？」

アレックスは意外に早いと思いつつも、機材が優秀なのだろうと思ふことにした。

アレックスが出口と紙の貼られたドアに手をかけると、

「ああ、そうそう。今からここに行くように」

そう言いながら女子生徒は畳まれた地図を器用に投げてきた。アレックスがそれを開けると、銀行に赤く丸がしてあった。

「預金下ろすならそこ」

恐らく、関係者がいるのだとアレックスは判断した。

「分かった」

そして、今度こそアレックスはドアを開け、保健室を後にした。

その後元春に会うも、さっきの女子生徒にレベルを聞いたようでも納得いかなそうな表情をしていた。当麻はレベル3と聞いた途端、同じ能力である元春へ羨望の眼差しを向けた。どうやら、当麻の中で自動再生は飛び降りても大丈夫な、かなりの便利能力に認定されたらしい。

ちなみに、青ピは頑なに自分の結果を言おうとしなかった。

そして、アレックスは一度帰宅していつもの服に着替えた後、指定された銀行に来たが、シャッターが閉まっていた。仕方ないので帰ろうかと背を向けて道路を渡り切る。そこで、クレープ片手に追いかけてっこをしている奇妙な一団を発見したアレックスの耳が、何度となく聞いた激しい爆発音を捉えた。

「あ？」

アレックスが振り向くと、銀行はシャッターが破壊され、内部から黒煙が吹き出していた。

「いけませんわ、お姉様。学園都市の治安維持は、わたくしたち風紀委員の仕事。今度こそお行儀よくしてくださいね」

今度は少し後ろから、声色が多少老けた少女の声が聞こえた。そちらを向くと、ツインテールの少女の後ろには腰当たりの高さのある柵を挟んで女子生徒が三名おり、頭に花飾りを着けた生徒が無線らしきものをしている。

「何かあったのか？」

アレックスはツインテールの少女に聞いた。

「銀行強盗ですの、くれぐれも一般人のあなたの手出しは」

ツインテールの少女が警告している最中に、アレックスの背中に炎が直撃し、爆発。そのまま黒煙に包まれてしまった。

「なっ！？初春、頼みますの！」

そう言うと、ツインテールの少女は姿を消した。
仮にもシャッターを吹き飛ばした炎だ、まともに当たった人間が
無事ということはないだろう。

「っ！？はい！」

呆然としていた初春と呼ばれた少女が、焦りぎみに黒煙の中に入るため柵を乗り越えようとした。が、あり得ない光景が目飛び込んできた。

「いきなり何しやがる……！」

服に付いた多少の焦げを覗き、アレックスが黒煙から歩いて出てきたのである。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

初春は戸惑いながらも、アレックスに話しかけた。

「ああ、大丈夫だ。………で、あそこの三人が今のをやったんだよな？」

アレックスは青白い額に青筋を浮かべながら、ツインテールの少女が退治している三人　一人はすでに倒れているが、男に指を指した。

「え！？は、はい！」

青筋を浮かべたアレックスに気圧されながら、初春は答えた。

「よし……………殺す」

アレックスはそう言うと、三人のところへ走り出した。アレックスの立っていた場所には、半分になった、焼け焦げた預金通帳が残された。

「なんの音ですか？」

ツインテールの少女の目の前にいる髪を逆立たせた男が左手を胸の前に上げ、見せびらかすように炎を出した途端、初春たちのいた方向からコンクリートが砕ける音が迫ってくるのに気づく。ツインテールの少女がそちらに目をやると、明らかに人間を越えた速度でこちらへ走ってくるアレックスがいた。

「炎……………お前か！」

悪鬼のような表情のアレックスは髪を逆立たせた男の右側で止まった。アレックスは走った勢いのまま蹴りたかったが、それだと殺してしまうのでなんとか踏みとどまり……………左手で首を掴んで持ち上げた。

「ぐ、が……………！」

いきなり持ち上げられたため、何が起こったか分からない男だが、アレックスが自分を殺せることは理解した。しかし、幸いにもツインテールの少女が彼を救うことになった。

「まさか、殺すつもりですか？」

ツインテールの少女は、アレックスに太ももに付けた金属製のダーツの矢を向けながら言う。アレックスはそれぐらいの道具で何をするのかと思っただが、さすがに殺すつもりではないので口を開いた。

「殺すつもりはない、気絶だけだ」

アレックスはそう言いながら、男を掴む手を放す。放された男は荒い呼吸をしながら腹這いに倒れるも、その手に炎を出現させた。

「おい、何してんだ？」

アレックスはそれに気づき、男の目の前の地面を思いきり踏みつけた。アレックスは自身の質量は変えてないが、それでもコンクリートがクラッカーのように碎ける。

「……まあまあ、後はお任せくださいまし」

ツインテールの少女はそれを見て、一瞬どちらが悪役か分からなくなっただ。

アレックスが少女の言葉を聞いて少女へ顔を向けると、両手にダーツを何本も持っていた。

「それで何する気だ……？」

「ごうじますのよー！」

ツインテールの少女がそう言うと同時に彼女の手からダーツが次々と消え、腹這いに倒れた男の服とコンクリートを縫い付けた。

「テ、テレポーター!?!」

男が震える声で言った。しかし、この男もテレポーターと生物兵器に会うとは、同情されそうな不運である。

「抵抗するなら。次はこれを、体内にテレポートさせますわよ?」

「いや、その前に俺が踏む」

本当に同情してしまう不運である。

「動けなさそうだな。さあて、どうしてやるうか………………。なぜ、俺に炎を放った?」

悪魔のような笑みを浮かべながらアレックスは言った。誰だつて通帳が燃やされれば怒るだろう。

「あ、あれは、あいつが指示したんだ!」

「あいつ?」

アレックスは、ツインテールの少女が倒した、太った男の腕に足をのせた。

「そいつじゃない!もう一人の」

「離して!」

アレックスに、少女が叫ぶ声が聞こえた。そちらを見ると、男が叫んだであろう少女を蹴った瞬間だった。

「……………あいつか?」

アレックスはツインテールの少女が何か話しているが、それを気にせずに腹這いの男を睨みながら言った。

「……………はい」

「手、出させてもらおうよ」

男の返事と同時に、アレックスの背後、銀行の前辺りからまた別の少女の声がした。

「ツインテール。俺もやるからな。金の恨みは恐ろしい事を教え込んでやる」

アレックスはそう言うと、振り向いてショートカットの少女の所へ早足で向かった。

「何よあんた？邪魔しないで」

「邪魔にならないなら、いいだろ？」

アレックスはいきなり文句を言われたが、そんなのは気にならないとばかりに提案を押し付ける。

「……………勝手にすれば」

ショートカットの少女も、目の前でUターンをする車、その中の男が最優先で倒したいらしい。

ショートカットの少女がポケットをあさり、コインを出したのを見て、アレックスも何か投げることにした。周りには、シャ

ツターの破片、道路、バス。アレックスはバスでもぶつけたかったがやりすぎだと思い、足元の道路を砕いて拳ほどの塊を手にした。

「轢きに来るみたいだな」

「そうね」

五十メートルほどだろうか、そこであの男の車はエンジンを回しながらも止まっている。

そして、少女がコインををトスした途端、車は唸りを上げた。

車は全力で踏まれたアクセルに従い、その鉄の巨体をアレックスと少女に向けて進ませた。

そして、コインは再び少女の手に戻り、青い光を纏った親指で弾かれるのと共に、光の線になった。

線は轟音を纏いながら触れてもいないのに道路を削り、その破片や埃を舞い上がらせると、こちらへ向かってくる車の真下へと突き刺さった。その風圧で車は紙切れのように宙を舞い、少女の頭上を通りすぎた。

その瞬間、車は再び線に撃ち抜かれる。線といっても先程より速度は劣るが、人間の目には線として移っただろう。

そして、車は二人の背後の道路へとバンパーから突き刺さった。

コインを放った少女は、まだ気がすんでないというようにしかめっ面をしながら乱れた髪を払った。

コンクリートの塊を投げたアレックスは、相手に当たらないようにコンクリートを投げただけという不完全燃焼感が、しばらくは収まりそうになかった。

「……………帰るか」

しかし、アレックスはこの騒ぎでは確実に警備員が来るを考えて寮へと舵を取って走り出そうとした時、後ろから何かに肩を掴まれた。

「まさか、帰る気じゃないわよね」

それは、青い電気が時々弾ける、ショートカットの少女だった。

その後、アレックスはツインテールの少女にも捕まり、風紀委員の支部に連行された。そして、風紀委員であるツインテールの少女と、事務机を挟んで座っている。

「で、あなたは通帳を燃やされたのが頭に来て、先ほどの行為に及んだということですか？」

「そうだ」

実際、アレックスは銀行強盗ということ自体はどうでもよく、通帳を燃やされたことに腹を立てただけである。ロングヘアの少女が蹴られた時も、指示した奴を見つけた喜び以外に感情は動かなかった。

「確かに通帳を燃やされるのは頭に来るでしょうが……」

ツインテールの少女はそう言いながら事務机に置かれている、同僚の少女が拾った半分になった預金通帳に視線を移した。

極めて特殊なケースゆえに、ツインテールの少女も困惑しているようだ。

「出ました、白井さん。自動再生のレベル3で間違いありません」

初春と呼ばれていた少女が、アレックスの顔写真の入った紙を持ってきた。恐らく、パソコンからプリンターで出したのだろう。

「それはどこで調べたんだ？」

アレックスが怪しむように言うと、白井と呼ばれた少女はえらく驚いたようだ。

「書庫をご存じないので？説明するとすれば、能力者の凶鑑のようなものです」

要は、能力者は登録されているらしい。学園都市も管理はきちんとするようだ。

「風紀委員や アンチスキル 警備員は知っているというのに……………その様子では能力の名称も分類も、あまり知らないのではありませんの？」

「別にいいだろ……………」

追い込むような白井に、アレックスはうんざりしたように言った。

「ちゃんと、留学生として来たんだ。それに、もう夕方だ。帰らせてくれてもいいだろ？」

そう言うアレックスの視線には、オレンジ色に染まる空があった。

「ただいまー」

その時、眼鏡を掛けた、スタイルのいい女性が支部のドアを開けた。

「あれ？白井さん、この人は？」

その女性の視界にアレックスが入ったのか、白井に軽く尋ねた。

「不審者ですよ」

「おい」

頭を押さえて言う白井に、アレックスは多少の苛立ちを覚えた。

しかし、この夏場に長袖のパーカーに長ズボンのアレックスは充分に不審者である。

「喧嘩でもしてたの？」

「いいえ、先ほどの強盗事件に、ちよっかいを出しましたの」

白井がそう言った途端、眼鏡の女性がアレックスを睨んだ。

「強盗だなんて関係ない。あいつらが、俺の通帳を燃やしたんだ」

「通帳を……？銀行の中にいたの？」

アレックスの言葉を聞き、眼鏡の女性が疑問を抱いた。

「いいえ。外にいましたが、発火能力者の炎を直撃して、その拍子に燃えたようですの」

「直撃！？あなた大丈夫なの！？」

アレックスに変わり、眼鏡の女性に答えた白井の言葉を聞いた女性性は、ひどく驚いた。

「彼が言うには自動再生のレベル3だから、だそうですよ」

アレックスは、いつになれば帰れるかと思いつながら窓の外を見ていた。

「レベル3……？4の間違いじゃないの？」

「いいえ。それどころか、彼は道路にヒビを入れながら高速で走るわ、道路を踏み砕くわ、最終的にはその破片で車を撃ち抜く。要するに、自動再生ということ自体が怪しいんです」

アレックスは逃げた方がよさそうな予感がするも、ダーツをテレポートさせた彼女の近くに通帳があるためそうはいかない。

その上、アレックスの個人情報はずで知られている。怪力も見せてしまったため、テストで手を抜いているということかと思いかと、思い始めたが、自動再生は機械で基礎代謝などを測るようなので思い止まった。

「悪い、帰る」

最終的に、無理矢理でも帰るに決定された。

アレックスがそう言うと、白井は通帳に手を伸ばした。手を伸ばしたということは、触れずにテレポートさせるのは無理らしい。

アレックスは自信の筋肉をバネのように使い、白井が取る前に掠め取った。そして、そのまま机を踏み台に、出口へ走った。

「お姉様！」

アレックスの後ろから、白井が誰かを呼んだ。すると、ドアが開

き、車を吹き飛ばしたショートカットの少女が入ってきた。

「逃げてんじゃないわよ！」

その声と共に電撃が正面からアレックスに直撃し、その動きが止まった。銃弾程度なら避けれるアレックスも、さすがに雷は避けられない。

そして、力の抜けたアレックスが倒れようと前のめりになった瞬間、その右足が力強く前に進んだ。

「なっ!?!」

ショートカットの少女は驚愕した。炎を直撃してもなんともなかったアレックスの肉体の構造を警戒し、普通の人間を気絶させる時の二倍ほどの電撃を放って直撃させたのである。

それにも関わらず、アレックスの硬直は一瞬であった。普通なら、脳の電気信号が電流によって乱れる筈である。

「くそつたれ!!」

アレックスはそう言うと、向きをドアから窓に変えるとガラスを突き破って脱出した。

「追いかけますの?」

白井が眼鏡の女性に言うと、

「いいえ、彼の能力が何かは職務上は関係ないしね。彼、日本なら任意同行って知らなかったのかも。明日、反省文の用紙と、ガラスの請求書だけでも渡せばいいわ」

眼鏡の女性はそう言つと、塵取りと箒を持って窓に向かった。そして、思い出したように言った。

「　　そういえば、ここつて三階よね？」

彼女たちは、アレックスに対して大きな疑問を抱く。その頃には、ショートカットの少女の姿は無かった。

ちなみに、その風紀委員支部で、ほとんどの電化製品がお亡くなりになったのは言うまでもない。

七月十六日（後書き）

相変わらず口調やキャラは崩壊中。誰かに小説借りようかな、読んだことない……………

七月十七日（前書き）

オリジナルの方の筆はなかなか進まないにこちらはすらすら進む不思議。原作があるから？

七月十七日

朝、アレックスは煩わしい電子音に反応して目を開けた。その出所は、一度も使用したことのない固定電話だ。

「なんだよ……」

アレックスは固まった体をほぐしながら受話器に向かい、その煩い電子音を止めるために受話器を取った。

「Hello. This is Alex.」

アレックスは記憶の整理が途中ということもあり、さつさと相手を諦めさせて電話線を引き抜きたかったので英語で話した。日本人は語学力に自信がない、と聞いたことがあったからである。

「ふざけないで。アレックス、仕事よ」

しかし、聞き覚えのある声の主、やけに露出の多い服装の窓のないビルへの案内人は動じずに用件をアレックスに告げた。

「で、何をすればいい？」

アレックスは窓のないビルの内部にいた。そして、アレックスの前ではビーカーに入った人間がアレックスを見つめていた。

「君には第一 学区にある研究所を襲撃してほしい。詳しい場所は案内人に地図を渡してある。研究所についてだが、研究員が私の命

令を無視して非人道的な実験をしている。更には、その研究が警備員に感付かれそうだ。他の人手は別件で動いていてね、君の力を借りたい」

ビーカーの人間は、アレックスに拒否できるはずもないのに頼むように言った。

「襲撃？機材の破壊もか？」

「いや、それはこちらから何とでもできる。君の標的は研究員だ、一人も残さずにな」

アレックスは、ビーカーの人間がどことなく楽しんでいるように感じた。

「了解」

ビーカーの男に嫌悪感を覚えたアレックスは、さっさとその場を後にした。

「ここか」

ビルへの無愛想な案内人に地図をもらい、ついでに交通費も借りたアレックスは一階立ての小さな建物の前にいた。アレックスはやけに小さいと感じたが、地下でもあるのだろうと当たりを付けた。

「やっほ」

そして、そのまま正面玄関のドアを開けた。研究所という割に、中に研究者は見受けられない。

「何かご用ですか？」

アレックスが病院のような内部を見ていると、受付台らしき場所から白衣の男が話しかけてきた。そこにはその男以外に姿は見えない。襲撃は考えていないようだ。

「少しトイレを借りさせてくれるか？」

アレックスがそう言うと、その男は嫌そうな表情をした。

「こっちはです」

しかし、一応は受付なのか、アレックスを案内し始めた。

廊下を右へ曲がり、突き当たりまで行き、左へ曲がり、やっとトイレがあった。

「早くしてくださいね」

男はそう言うと、携帯を取り出した。

「ああ、そうするよ」

アレックスはその携帯が開かれる前に男の首を首を握りしめて首を折ると、トイレに引きずり込んで取り込んだ。

その記憶からは建物の見取り図、受付という退屈な時間のシフトの時刻、人体実験という楽しい時間に戻れる時刻、吐き気を催す研

究の内容、緊急時の対処法などが読み取れた。

「上出来だ」

アレックスは猟奇的な笑みを浮かべると、殲滅へと乗り出した。

男の記憶では、受付以外には地上にはいない。他の研究員は三階もある地下だ。そして、地下からの出入り口は受付のテーブルの向こうに一つ、建物の反対側の部屋に一つの合計二つ。その両方ともさすが学園都市というべきか、指紋認証と十五桁のパスワードに網膜認識だ。しかし、そのどれもが関係者を取り込んだアレックスには意味をなさない。

まず、アレックスは小さい方の入り口である受付の方を封じることにし、白衣の男に擬態してトイレを出た。

「これが」

受付カウンターの奥には小さな休憩所があり、そこには壁にぴったりくっついた自販機があった。

「さてと……」

アレックスは、迷うことなく自分から大人二、三人分の肉塊を分離させ、それで自販機の表面と壁を覆った。アレックスの腕が落ちるように肉塊に変わり、さらにそれが大人ほどの大きさになるのは、いささか気分が悪くなるだろう。

アレックスは自分の体積を無視した行動に、元科学者として思わずため息がこぼれた。

アレックスはすでに監視カメラは自分を捉えていると考え、もう片方の出入り口へと走った。

先ほどの自販機前での行動を見ていたようで、サプレッサーを付けた拳銃を所持している研究員が、出入り口である廊下に面したドアの直ぐ前にいた。そして、アレックスである白衣の男を確認するとすぐさま発砲してきた。アレックスはその弾道を見切りながら、右腕を変化させた。変化させた右腕は肩口からまるで黒い茨が絡まり、所々から肩口に向けて蔓を伸ばそうとしているようになり、その末端の手であるはずの部分からはアレックスの二の腕ほどの刃が四本生えていた。アレックスはそれを振りかぶると、研究員に迫った。

「うわ
」

研究員は何か叫ぼうとしたが、それを言い切る前に血を打ち水のように巻き散らしながらぶつ切りにされた。研究員切る瞬間、その刃はその喜びを表すように先ほどの二倍ほどに伸びたのを監視カメラは捉えていた。

「……拳銃が限度か？」

アレックスはそう言うどアをこじ開けて中に入ると、そこを先ほどの肉塊にウイルスを流し込んだものをそこに置いた。

ウイルスに感染した細胞は分裂し、数を増やす。再生力が凄まじく早いということは、増殖が凄まじく早いということだ。その肉塊はすぐに肥大化し、アレックスの意思にしたがって出入り口を完璧に塞いだ。

「誰か、助けてくれ！」

「死にたくなかったら黙って撃て!!」

二分もたたないうちに地下一階は殲滅され、アレックスは地下二階で殲滅を行っていた。

研究員もアサルトライフルくらいはもっているようで、アレックスに銃弾の雨を浴びせる。しかし、倒された研究員は吸収され、アレックスの血肉に変わる。アレックスへの攻撃は意味をなしていなかった。そして極めつけが、

「くそっ！何で開かない!？」

肉塊による他の階への通路の封鎖である。反対側が肉塊で埋まっているとも知らずがり付く研究員は、筋力を強化したアレックスの蹴りによって肉片に成り果てた。

アレックスはこの虐殺ともいえる行為を無感情に行っていた。研究員がアレックスへと引き金を数秒絞れば、その間にも研究員は数人肉片へと変わる。アレックスは時々、体内に机が刺さってアレックスの筋力でひしゃげたり、火炎がアレックスに直撃するなど超能力による攻撃を受けたが、そのどれもが弱く、動きを止めることにすら至らないかった。

「ま、待つ」

そして、アレックスはその階の最後の一人を肉片に変えた。

「……………狭いとやりにくいな」

マンハッタンで走り回っていたアレックスは、屋内ゆえの動きづらさを感じつつ、最後の階へ向かった。

アレックスが出入り口のドアを開けた瞬間、実験体であろう少年がアレックスへ見えない力の塊を放ち、アレックスを壁にめり込ませた。

「よくやった！」

研究員らしい高齢の男は汚い唾を吐き散らしながら言った。

「主任、退いてください」

その横から、若い研究員が筒を肩に担ぎながら割り込んだ。そして、その筒から凄まじい速さの飛翔体が飛び出すと、出入り口のアレックスへと突き進んだ。それは空中で種のように二つに割れると、その中からアレックスの手のひらほどの長さの鋼色の杭がいくつも飛び出した。そして、アレックスに突き刺さる直前に炸裂し、進行方向に破片をばら蒔いた。煙によってあまり見えないが、その一部を受けた出入り口はまるで機銃掃射を受けたかのように穴だらけになっていた。

「よおし！……お前、見てこい」

高齢の男はガッツポーズを取ると、少年に確認をするように言った。高齢の男の言葉に従って少年は出入り口へと向かい、そこを何度か能力で攻撃すると、手足をあらぬ方向に曲げながら、若い研究員に激突した。

「殺したと思ったか？」

嘩然とする高齢の男をよそに、出入り口から黒い鎧兜が廊下に金
属の音を響かせながらゆっくりと男へ近づき始めた。

「おおおおおおおおおお！」

状況を理解したのか、高齢の男は雄叫びを上げながら鎧兜へと拳
銃の引き金を引いた。

しかし、その拳銃から放たれた弾丸は、黒い鎧兜に当たるとおも
ちやのように弾かれる。そして、何発も撃つ間に、鎧兜は嘲笑うよ
うに距離を詰めていた。

「な……な………何なんだお前はあああ！？」

鎧兜が右手を振り抜くと、その叫びは断末魔になった。

その後アレックスは施設内の死体と放ったウィルスを吸収すると、
新たに脳内に増えた声を聞きながら研究所を後にした。その数分後
にやって来た警備員は血糊と一方的に放った銃を発見するが、監視
カメラの映像も研究機材のデータも消えており、迷宮入りとなった。

アレックスはかなり疲れた様子で銀行を後にした。その手にはアレ
ックスの生活資金の入った茶封筒が握られている。その後、アレ
ックスはピーカーの人間に報告を済ませ、一度寮に帰った。すると
なぜか案内人が元通りの通帳を持って、郵便受けに窓ガラスの請求
書と原稿用紙が入った自室にいたのである。その際に「なぜ私がこ
んなことを」と文句を言われ、「私はさっき言われて行ってきたの
に、私の方が早いのはどういうこと？」など「手間がかかったんだ
から今すぐ行く！ついでに交通費も返しなさい」とも言われたアレ

ツクスは、渋々と通帳と印鑑片手に銀行へと向かったのである。アレックスが言うことを聞いたのは、朝昼兼用の飯を食べた事で腹が膨れていたこともあっただろう。

現在、アレックスは迷っていた。迷うといっても道にはなく行動である。

銀行から茶封筒を持って出れば、誰だってそれが現金だと思う。そして、アレックスは先程から数メートル後ろをずっとつけてくる足音を聞き分けていた。アレックスが右に曲がれば同様に足音も、左に曲がれば同様に足音も。

そして、アレックスはこの足音の主をどう処分するかに迷っていた。裏路地に誘い込んで処分するか、裏路地に入ると同時にビルの上まで飛び上がるか。アレックスはしばし思考した結果、両方にした。

アレックスは自信の真横に裏路地への入り口が来た途端にそこへ転がり込み、足音の主が裏路地内を確認する前に飛び上がると、十二階立てのビルの上に軽々と飛び乗った。

足音の主はアレックスを追うように裏路地に入ったが、姿の見えないアレックスを探しに入り口から少し奥で立ち止まった。その背格好から、アレックスは足音の主が女と判断した。しかし、超能力というものがあるこの都市では性別に関係なく人を殺せる力を持っている。そのため、アレックスは容赦をする気はなかった。

アレックスはそんな足音の背後、入り口側に音もなく飛び降りると、後ろからその首にするりと封筒を掴んだままの右腕を回し、左腕でそれを補強した。胸が無防備になるが、アレックスにはやられる前に首をへし折る自信があった。そして、金を持って歩いてきた自分を尾行してきた相手を殺しても正当防衛という、アメリカな考えもあった。

「俺を狙ったか？だが、相手が悪かったな」

そして、アレックスがこのまま絞めて気絶させようとした時、足音の主が絞り出すように声を出した。

「う……めんなさい」

アレックスは、その声に聞き覚えがあった。もしやと思ったアレックスが足音の主の顔を見ると、思った通り、昨日のロングヘアの少女だった。アレックスは尾行の理由を再び考えると、この少女が昨日少年をかばって蹴られたのから正義感の強い、そして少なくとも戦闘向きの能力は無い少女と判断し、少女の拘束を解いた。すると、身長差からか多少首が吊られていたようで、佐天と呼ばれた少女はその場でうずくまって咳き込み出した。その姿に、さすがにアレックスもバツが悪く感じた。

「あー、大丈夫か？」

ただし、謝る理由は無いと考えているが。

「い、いえ」

しばらく咳き込むと落ち着いたようだが、明らかにアレックスに怯えている。裏路地でいきなり首を絞められれば、誰だってそうなるだろう。特に、その人物の怪力を知っているなら。

「何でつけてきた？」

アレックスは会話ができるのを確認すると、こうなった理由である尾行について尋ねた。

すると、アレックスが思ったよりも簡単に佐天と呼ばれていた少女は話した。

「歩いていたら銀行から出てくるのが見えたので……………昨日の事もありますし、色々知りたか」

「つまり？」

このままでは核心に行かないと感じたアレックスは、ドスの利いた声で割り込んだ。

「好奇心……………です……………」

そのせいか、佐天と呼ばれていた少女は今にも泣きそうだ。普通の人ならこれで泣いているだろう。そう考えれば、この少女は強いかもしれない。

「銀行から出たら尾行されれば、普通はどう考える？」

そして、容赦のないアレックスは止めと言わんばかりに問い詰めた。

「それは……………強盗か何かかと……………！」

少女はそこまで言うと、一気に顔を青ざめさせた。

「そういう事だ。分かっただら次か……………」

「風紀委員よ、彼女から離れなさい」

アレックスがそろそろ解放しようとした時、裏路地の入口から聞き覚えのある声があった。

「……………げ」

アレックスは思わず声が出た。何故なら、そこには風紀委員の腕章を付けた昨日のショートカットの少女がいた。そして何を誤解したのか、全身に青白い電気が威嚇のように走っている。

アレックスの行動は早かった。ショートカットの少女が右手をこちらに向ける前に、再びビルの上へと舞い戻る。少女を盾にするという選択肢もあったが、確実に誤解を深めるので瞬時に却下した。

「逃げるな、コラア！」

裏路地から角度的にアレックスが見えなくなると同時に、アレックスの真横を電撃が通りすぎた。そのままアレックスは、建物を曲芸のように飛び移りながら逃走した。そして、この少女の鬱憤はアレックスの友人である上条当麻に今夜向かう事となる。

その後、アレックスはスーパーのトイレで姿を変え、気晴らしの酒を買おうとするが売っておらず断念。仕方なく缶詰や、ミネラルウォーター、肉などを買うと寮に帰った。そのとき、時刻はすでに夕方だった。そして、記憶の整理でもしよとドアを開けた瞬間、アレックスが完全に忘れていた案内人がそこにいた。

「遅い。携帯も持ってないの？」

手に携帯の充電器を部屋のコンセントと繋いでいる案内人が言った。

「お前……………」

アレックスはその余りのたくましさにも凶々しさにも取れる行動に、呟くことしかできなかった。

「まず、携帯を買いなさい。連絡がここ以外に行かないなら緊急時に間に合わないわよ。その次に部屋を掃除して物を入れなさい」

まるで保護者のような案内人の台詞に、アレックスは頂垂れた。

ちなみに、アレックスの部屋は最初から置かれている家電などを除き、大したものはない。

「分かったから、飯食うから帰れ。ほらっ、交通費」

アレックスはいい加減に休みたいので、案内人に借りた交通費を返すとスーパールの袋から買ってきたものを冷蔵庫にしまい、交通費を投げ渡した。

そして、アレックスがミネラルウォーターを一気にあおっていると、案内人がアレックスに話しかけた。

「あなた、超能力は使える？」

真剣な様子で言う案内人に、アレックスはその言葉の答えを考えた。研究所で何人もの実験体を吸収したが、話によると学園都市の超能力は脳を色々といじるらしい。そうになると、アレックスの脳はウイルスによって変化しているため、使えるとは考えにくい。しかし、吸収したからには使えるかもしれない。

「ちょっと待て……………」

ミネラルウォーターを床に置くと、アレックスはそう言いながら自身の頭に手をやった。

アレックスは研究所で吸収した数が多すぎるため、一々吸収した人物の記憶や経験、人格、遺伝子情報を確認していなかった。そして今、アレックスは吸収した人物の確認を始めた。

研究している記憶、手術服を着た大人が子どもに話しかけている記憶、アレックスに叫びながら銃を撃つ記憶……アレックスを見えない力で吹き飛ばす記憶。その記憶をたどり、その人物の記憶、経験、人格、遺伝子情報などを全て掌握する。

「使えそう？」

頭から手を離れたアレックスは、ミネラルウォーターのペットボトルに手を向ける。そして、その人物が過去にやった事を遡り、同じことをする。

「お」

すると、ペットボトルが大きく吹き飛び、壁に当たった。幸いにもキャップは閉めていたため、中身が飛び散るようなことはなかった。

「……そう、使えるみたいね」

案内人はそう言うと、何やら考え始めた。

「分からないわね……いい時間だし、失礼するわ」

案内人はそう言うと、さっさとドアから出て行ってしまった。

「何だっ たんだ……………」

そこには、状況を理解していないアレックスが残された。

七月十七日（後書き）

はい、アレックスさんがチートへの一步を踏み出しました。まあ、レベル5のほとんどには正攻法で挑めば殺されますけどね。一方さ
んとかマジチート

七月十八日（前書き）

長かった……

七月十八日

日本の夏特有の蒸し暑い朝、アレックスは昨日吸収した人物の記憶を整理し、実践した結果をまとめていた。アレックスがまとめた結果はこうだ。

超能力は取り込んだものを複数同時にでも使える。しかし、超能力の演算を行っている間は、肉体の変形が困難。戦闘中だと演算をしながらの変形は無理だろう。そして最後に、同じ能力であればそれらの演算式を総合し、時間をかければ効果の高い演算式を組み変えられる。

普通に考えれば、一個人が演算式を総合するなど、自分だけの現実の差違もあってあり得ない。しかし、アレックスは吸収した人物の何もかもを奪うため、開発された脳の中身を丸ごと認識し、自分だけの現実をも奪い取る。つまり、一つの脳が複数の脳を内包していると考えてもいいだろう。そして、マンハッタンで吸収した人物の脳も開発は受けていないが、数を集めて開発を受けた脳に接続し、計算機の部品を集めて完成品にするようにして演算力を使用している。その計算機は、外付けの物と考えてもらえばいい。

「さて、学校か……」

アレックスには、ひどくやる気が無かった。高校の授業は復習にもならず、得た能力を時間割りにある『頭の開発』で鍛えようにも、誰にも言うわけにはいかない。まあ、研究者の記憶から『頭の開発』事態は、学校の時間割りに入れれないような強力な物が掃いて捨てるほど読み取れたが。

しかし、転校して二回目の登校をしないとすると、お節介焼きの我らが小萌教諭が家に押し掛けて来そうなので諦めた。アレックスは、生徒思いの教師のいる学校に自分を入れた、ピーカー野郎を思

い浮かべながら部屋のドアを開けた。

そして、半日の学校でも当麻が叫んだり、青髪が吹っ飛んだり、小萌が涙目になったり、隣のクラスの語尾が特徴的な教師にアレックスが絡まれたり、土御門が暴走したり、当麻が叫んだりしたが、大して変わったことも無かったので割合する。

学校終了後、携帯の契約を済ませたアレックスはカバンと財布を買いに街を彷徨っていた。既に様々な店に入ったがブランド物や地味か派手かの両極端しかなく、制服にもパーカー姿にも合いそうなのはなかなか見つからない。そして、ため息をつきながらも、何軒目かの店に足を踏み入れた。

「Oh……………」

そこそこ大きな店のためか、平日にも関わらず客でこった返している。

アレックスは思わず声を出したが、この大きさの（アメリカの感覚で）店に客が多いのが意外なのだろう。しかし、すぐに興味を無くしたのか相変わらぬ無表情のまま、アレックスは店の中を回り始めた。

緑茶のような緑のウェストポーチに紫の様々な柄が入った財布、やけにポケットが多い肩に掛けてポーチなど、アレックスが今までに目にしたことのない物もあった。

「ここもか……………」

アレックスが今までに回った店でも、この学園都市の外には無か

った物をよく見かけた。学園都市では様々な製品の試験もされているが、一般的なファッションの傾向から考えてあり得ない物も多々あるのは販売会社の会議不足だろう。

「本当にろくな物が無いな……」

学園都市で育つ学生のファッションセンスを心配しつつ、他の商品を見に行こうと商品棚から目線を上げた途端、あるものがアレックスの目に入った。

「お兄ちゃんこっちー！」

「はいはい、ちょっと待ってくださいね。上条さんは学校で疲れたのです」

そう言いながらも嫌そうな様子もなく、むしろ楽しそうに幼女に手を引かれる当麻だ。

アレックスは話しかけようかと思っただが、パントマイムの名人驚くほどピタリと止まった。取り込み中と判断したのもあるが、関わったら何かが起こる予感が商品棚に目線を戻したアレックスを襲った。しかし、当麻はアレックス限定に不幸をお裾分けしてくるようだ。その証拠に、当麻の視線はアレックスを捉えている。

「おーっす、アレックス。買い物か？」

「Oh, Suggester……」

小声で悪態をつくが、何とか危うくない表現に踏みとどまった。

「どうしたアレックス？」

「いや、何でもない。少し喉の調子がな」

聞き取れなかったのか当麻は問うが、アレックスははぐらかす。

「当麻、その子は妹か？」

アレックスは先ほどの『お兄ちゃん』という言葉から推測もしたが、日本人は親しい者同士では年が離れているとそう呼ぶこともあると思出し、直接本人に聞くことにした。

「いや、迷子になってたから案内してあげただけだ。まあ、妹は実家にいるけどな」

当麻は後頭部をポリポリと掻きながら言った。

「そうか、じゃ」

「お兄ちゃん、お洋服の所にいくんだよー」

何かを言おうとしたアレックスの言葉を遮り、少女は当麻のカッターシャツの裾を引っ張りつつ言った。

「分かってるって。よし、アレックスも来るか？」

「……………子ども服売り場にか？」

当麻の言葉に、アレックスは先程までのデザインのぶっ飛んだ物を見る目をした。その心境は容易に察することができるであろう。

「子ども服って言っても、ここは学園都市だぞ？財布くらいなら子ども用よりむしろ、普通のやつの方が多いよ」

学園都市。その一言に妙な説得力を感じたアレックスであった。

「……そうするか。まだまだ時間もあるしな」

アレックスは半日ほど先の、この店の閉店時間を思い出しつつ言った。

子ども服売り場に向かう途中、アレックスは奇妙な光景を目の当たりにしていた。

「ほんとと、かわいいなあ」

婦人服売り場にて、どちらかという子ども服と言える服を眺めているショートカットの電撃少女だ。アレックスは昨日の事もあり、隠れようと考えていると当麻が少女に歩みより始める。

アレックスはそれを好機と思い、そそくさと立ち去ろうとす
るが、

「お兄ちゃん、どうしたの？」

それを当麻が連れていた少女が不思議そうな顔をしながらアレックスの袖を掴む行為によって阻止された。

少女の手を振り払って立ち去ることは容易だ。しかし、擬態とはいえアレックス・マーサーであるアレックスは、まだ赤ん坊だった息子がいた事から少女というよりは、子どもに対して甘くなってしまうった。

「いや、何でもない。そうだな……当麻は来ると思っから先に行くか？」

「あ！常磐台のお姉ちゃんだ！」

しかし、少女はアレックスの提案を無視し、当麻の所へとアレックスを引っ張りながら歩み始める。

「おいおい……………」

アレックスはそれに従う他無かった。

「だいたいアンタは」

ショートカットの少女が当麻に対して怒りをぶつけている最中という、かなり悪いタイミングにアレックスは乱入することになった。

「常磐台のお姉ちゃん！」

アレックスの袖を掴んでいる少女のこの一言によって、ショートカットの少女の注意はその隣にいる彼へと移った。

「あ、あの時の……………って、なんでアンタまでここにいるのよ！？」

「次から次へと騒がしいやつだ……………」

ため息しか出ないアレックスであった。

「よくもまあ、ノコノコと現れたわね!!」

ショートカットの少女の右手が腰の位置から少し上がるのを見たアレックスは、いつでも右手を爪を出せるように細胞を皮膚の下で操る。

ショートカットの少女は電撃で気絶させるつもりだろうが、アレックスにその気があるかどうかは知れない。

「おい、ちょっと待てよ!」

その間に飛び込む形で横やりを入れたのは、焦燥感に駆られた当麻だった。

「何よアンタ? 邪魔しないで。それとも……………アンタもこいつの仲間なの?」

「ちょうどいい。当麻、なんとか言ってくれ。俺の話は聞かなさそうだ」

挟まれて十字砲火のように言葉を浴びせられる当麻は、よく冷房が利いた店内で汗が滲んできた。

それもそうだ、ショートカットの少女は気が昂ったのか、小規模の青い光が静電気のような警戒心を煽る音を立てながら時折少女の周りで弾ける。アレックスは外見上の異変はないが、その目線が猛禽類のような獰猛なモノになりつつある上に、全身から極めて小さな音だが氷に水をかけたような音が発せられている。

これを仲裁できる人物がいるなら、それは人間ではないだろう。

ただし、仲裁以外なら比較的 안전한方法がある。

「う、うえ……………うえええええん!!」

それらの全身が凍るような威圧感に当てられた、子どもの泣き声などである。

「また面倒が……………」

アレックスも予想はしていたが、実際にそうになると厳しいものがある。前述した通り、アレックス・マーサーは赤ん坊を育てたことはあったが、小学校に入っているかどうかの年頃に育てるまではいかなかったのだ。

そのため、急いで子育ての経験のある記憶を求め、脳の中を洗いざらい調べる。本来は、その記憶が不要かどうかを分けるにも時間はない。しかし、意識を落とさずに行動し続けるということは、イルカのように半分ずつ脳を　アレックスにとっては半身ずつ意識を落とさないことには違和感を覚える物であった。

「ほら、泣くな泣くな。ちょっとこのお姉ちゃんと知り合いでな、少し遊んだだけなんだ」

読み取った記憶から、アレックスはすぐに少女と目線の高さを合わせるようにしゃがむと、無表情を大きく崩して微笑んだ。

「アンタ　」

「当麻。悪いが、こいつと話すことがあるから先に行ってくれるか?」

ショートカットの少女が何か言おうとしたのを遮り、アレックスは当麻を遠ざけようとする。

「お、おうー！」

意図を察したのか、当麻は未だに嗚咽を上げる少女を抱え、子ども服売り場へと走り出した。

それを見送ったアレックスは無表情に戻ると、ゆっくりと美琴に向き直った。

「何の用だ？ 適当に時間潰したら、俺は当麻を追うからな」

「あいつと言い、何でマイペースな奴ばっかなのよ……………」

あの少女を泣かせてしまったことに罪悪感を覚えつつ少女は項垂れると、湿気ったクッキーのようなじめじめした雰囲気を纏い始める。

「どうした？ 用が無いなら俺は帰るぞ」

「ああ、もう！ 少しは待ちなさい！」

アレックスにとって、この少女との会話などは当麻の連れていた少女を遠ざけるための方便でしかない。そもそも、この少女が自身に対してやけに好戦的なことに警戒心を抱いていた。

「昨日のことはもういいわ。佐天さんから聞いたけど、拘束で済ますつもりみたいだし、それに」

「誤解したお前が殺す気で攻撃してきたな」

「どうやら、昨日のロングヘアの少女は佐天というらしい。」

「……………悪かったわね。それと、お前じゃなくて御坂美琴って名前があるの。」

多少悪びれた様子はあるが、言いたいことを言う性格のようだ。

「なら、なぜ『ノコノコと』だとか、電撃を放とうとしたんだ？」

アレックスは微量の殺気を向けながら、威圧感を持たせた声で言う。

「アンタが勝負せずに逃げるからよ！」

少女はそんな小細工には動じないようだ。

「誰がやるかよ……………」

「アンタ、逃げてばっかじゃない！」

アレックスはただの殺し合いなら擬態するなり物量で潰すなりで楽に勝てるだろうが、殺すわけにもいかない以上は加減をしなくてはいけない。しかし、加減をした場合には勝てるかどうかかなり怪しくなる。こんな少女でもレベル5なのだ。

もちろん、彼の中にはわざと負けて満足させるといった選択肢もある。しかし、その選択肢をこの戦闘マニアに見抜かれた際には、本気で戦うことを強要されるだろう。

「コイルガン撃てるようなやつから逃げて悪いのかよ……………」

「レールガンよ！」

呆れたようなアレックスに、少女は怒鳴る。

アレックスとしては科学の都市なので能力の名称もキチンとして
いると思っていたのだが、やはりかつこよさで決めるのがこの年頃
なのだと思って諦めた。

「ああ、そうかよ。もう用は無いだろ？俺は行くからな」

アレックスがそう言いながら背を向けると、

「じゃあ賭けよ！」

怒るというよりはムキになった少女が声を張り上げた。

「敗者は勝者の願いを一つだけ何でも聞いてあげること。これでど
う？」

アレックスはこの提案について少し思案したが、こちらの条件は
いいと判断した。

「二度と関わるな」と言ってしまうえば、この先も付きまとして来
るであろう戦闘マニアから逃れられる。約束を破る性格ではないだ
ろうが、その後に関わろうとしてきた場合の対処はいくらでもある。
警備員に通報するなどが代表的だろうか。

「いいぜ。日時と場所はどうする？」

「なるべく早い方がいいでしょ？用事が済んだらこの店の前。いい
わね？」

アレックスは何時でもよかったが、ここまで適当な時間を言われると「すっぱかせ」と言われているようにしか受け取れない。まあ、それはそれで彼には喜ばしいが。

「分かった、さっさと終わらせてくる」

アレックスはそう言いながら当麻の元へ行こうとするが、「子ども服売り場と婦人服売り場。どちらの方がいい財布があるかと聞かれれば、ほとんどの人は婦人服売り場と答える」という当たり前のことに気づき、歩みを止めた。

「どうかした？」

「ここって男でも使えるサイフ売ってるか？」

突拍子も無いことを言い出したアレックスを美琴は不信に思ったが、用事の事だと察したようで少し考え始めた。

「佐天さんなら知ってるかもしれないけど……」

美琴は彼女らのいる水着売り場を見ながら、アレックスと昨日の少女である佐天を会わせることをためらう。しかし、その水着売り場から二つの人影が出てくるのが見え、思わず美琴は固まった。

「ん？確か……」

そんな美琴の視線を追っていたアレックスもまた、その人影に気が付いた。

「御坂さん、どうかしました？」

歩み寄ってきた人影、初春が口を開いた。心なしか、その横にいる佐天はアレックスに警戒しているというよりは、怯えてるように彼の目映った。

「ああ、一昨日の不審者に会ったのよ」

「おい」

アレックスはテロリストや化け物とはよく言われて慣れてしまっただが、不審者と呼ばれるのは慣れることができないさそうだ。

「なるほど。お買い物ですか？」

そう言いながら明るく接する初春に、アレックスは違和感を覚えた。

「美琴」

「何よ？」

何気なく初春を無視しながら話しかけるアレックスに、美琴は疑問を抱いた。

「初春は昨日のことを知らないのか？」

美琴はその一言でアレックスが何を疑問に思ったのかが分かった。理由はどうであれ、親友に危害を及ぼせた相手に普通に接せられる

わけがない。

「多分、知らないと思うわ」

「そうか。初春、ここに財布は売っているか？」

アレックスは美琴から視線を外した。

「財布ですか？それならあそこに売ってると思いますよ」

初春は明るい表情をしながら、ある売り場を指さす。

「そうか、ありがとう」

アレックスは礼を言うと、どこかモヤモヤした気持ちを感じながらそこへと早足で向かった。美琴はそれを一瞥すると、初春たちと買い物を再開した。

あまりにもいい物が無いので諦めたアレックスは安い財布を買い、そのついでにラグビーボール型のボディバッグを購入した。持ち歩く物はあまり無いとはいえ、肉体の一部であるジーンズのポケットに貴重品を入れるのも気が引けたからである。

その二点が入った袋を持ったまま美琴の所へ行こうとしたアレックスであったが、女の買い物は長いのが当たり前なので当麻のいるであろう子ども服売り場へ向かうことにしたのである。

そして、店員に場所を聞いて子ども服売り場に来たアレックスであったが、当麻と少女が見当たらない。もう帰ってしまったのかと思ったが、少しだけ探そうと辺りを見回した時、店内放送がかかった。

『お客様にご案内申し上げます。店内で、電気系統の故障が発生したため。誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます。』

その案内と共に、店員たちがまるで災害時の避難のように誘導を始めた。その光景を不審に思ったアレックスは、風紀委員である初春に事情を聴くために比較的人の多かつた婦人服売り場へと再び歩を進める。彼としては知らない顔をしてここを出てもよかつたが、一応は約束があるので美琴に何かあつても胸が悪いと思つた。

『係員がお出口までご案内しますので』

鳴り響く店内放送を聞きながら歩いていると、アレックスの視界に奇妙な学生が映つた。どこにでもいそうな雰囲気の暗い、イヤホンをした眼鏡をかけた男子学生。しかし、その目つきはアレックスがマンハッタンで時折目にした、復讐心で濁つた物だつた。更には、どこか危険な笑みを浮かべている。だが、最悪顔だけでも覚えておけばいいので、この気味が悪い学生は捨てておくことにした。

「全員避難終わりました」

アレックスが係員の目につかないように婦人服売り場まで行くと、十字になつた通路の中心に予想通り初春がいるのを発見した。それも、風紀委員と電話で連絡を取っている最中らしい。後ろから音もなく近づいていたアレックスは、電話が終わつたら話しかけようと思ひながら辺りを見回していると、当麻と一緒にいた少女が大きなカエルのぬいぐるみを持ちながらこちらへ駆けて来るのが見えた。

「え!?!」

「お姉ちゃーん!!!」

ちょうど初春が電話で語られた内容に驚いた時、その少女が元気よく初春を呼んだ。アレックスもいいタイミングだと思ひ、少女の

会話が終わり次第か、途中で話しかけることにした。

「お姉ちゃん！眼鏡をかけたお兄ちゃんがこれを渡してって」

少女は初春の所へたどり着くと、持っていたカエルのぬいぐるみを初春に差し出した。初春はそちらを優先することにしたのか、しやがんでぬいぐるみへと手を差し出した途端、カエルのぬいぐるみが内側から掃除機で座れるように変形した。

アレックスは今の少女言葉から状況を察した。おそらく、眼鏡のお兄ちゃんとはあの気味の悪い学生のことだ、これは初春を狙った、店を巻き込むような攻撃だということだ。

「逃げて！！」

初春は少女からぬいぐるみを取り上げると、真後ろへと放り投げると、少女の盾になるように彼女を抱きしめた。

「あ？」

そして、アレックスの元へとそのいびつな形になったぬいぐるみは飛んで来る。アレックスは反射的にそのぬいぐるみを受け止めると、思わず動きを止めてしまった。

すると、どこからか来たのか、美琴と当麻が初春の盾になるように間へと割り込んで来た。

「逃げて下さい！それが爆弾です！！！」

初春は美琴と当麻に向けて叫ぶが、それを聞いたアレックスの中で、この爆弾を押し付けて来た初春の評価がかなり落ちた。

「早く捨てなさい!!」

美琴がポケットに手を伸ばしながらアレックスに手を伸ばすも、こつなつた以上はこれを捨てるなんて気持ちは彼にはさらさらなかった。

「当麻、これ頼むぞ」

アレックスは購入した物が入った袋を当麻へと投げると、ぬいぐるみを抱えて彼らに背を向けた。

「アレックス!!」

その袋に目もくれず、なぜか右手を伸ばしながらこちらへ走ってくる当麻の声を背中であきつつ、アレックスはため息を吐いた。

その瞬間、閃光と共に爆音と衝撃波がすべてを壊すために爆発物から解放され、店の床や天井を抉り、そして焼きながら辺りにその暴力を振りまいた。

店の外から人の声が響き、爆炎が吹き出した店中の様子を心配する大きな声がするが、その喧噪も爆音によって耳をやられた当麻たちには聞こえなかったが、彼らの目の前には見たことがない光景が広がっていた。彼らがこつして耳の不調を感じれるのも、盾となつたアレックスによるものだ。しかし、その肝心のアレックスは煙の中におり、その姿は見えない。

「アレックス!!」

当麻は叫んだ。未だにその声も小さく聞こえるが、叫ばずにはいられなかった。

「大声出すな。ガキじゃねえだろ……」

しかし、その心配とは裏腹にやけにあっさりど、アレックスは煙にせき込みながら当麻の所　　いや、投げた買い物袋へと歩を進めている。

「心配するなよ。ああ、美琴。決闘はどうするんだ？用事は終わったが　　」

「この馬鹿……」

さつさと次のことをしようとするアレックスに、美琴が怒鳴り声を上げた。

「死んだかと思っただじゃない……」

「あれぐらいで死ぬならお前と戦うのを承諾しねえよ……」

もうアレックスは呆れてばかりである。

「それよりもいいのか？犯人が逃げるぞ」

「なっ、あんた知ってるの!？」

アレックスのここから逃れる作戦が始まった。

「ああ、店内で不審な人物を見かけた。それがその少女の一言で確信になったがな」

そう言いながら、初春に抱かれて泣く少女を指さす。

「……………特徴は？」

真剣な目つきになってアレックスを見る。どうやら、彼の思いど
うりになったようだ。

「眼鏡をかけた学生で雰囲気は暗い。髪型はワックスで固めている
ようじゃなかったな。それとイヤホン
をしていたな。胸ポケットから伸びてた」

美琴はそれを聞いた途端、電気を操って反応速度を上げたのか、
かなりの速さで走り去った。

「 当麻、帰るぞ。面倒は御免だ」

「お、おうー！」

このままいれば他の風紀委員や警備員が来ることは確実のため、
その場を去ろうとする。しかし、ここにも風紀委員は一人いるのだ。

「待ってくださいー！」

初春だ。

「何だよ……………」

「参考人としてご同行願えますか？」

これはアレックスも想定していた。対処も考えるほどの物でもな

いが、考えてある。

「任意同行だろ？拒否する」

「アレックス、裏口はこつちだ」

当麻がすでに駆け足でこの場を離れ始めているため、その声に従ってアレックスは当麻を追って初春の視界から消えた。

「いったい何者なんですか……」

そう呟く初春の前方は、通路の両隣のブースも含めて爆発の衝撃で床は抉れ、ショーウィンドーのガラスは壁に刺さり、まるで戦争の資料にあるような光景が広がっていた。

アレックスは逃げるように店を出た後、いくつかの裏路地を使って現場から距離を取った。あんな場所においても、良いことが起こらないというのは誰にでも分かる。

そして、安心できる位置まで来た頃には、時刻はすでに四時を回ってしまっていた。無駄な時間を過ごしたとアレックスは思いつつも、あの店に立ち寄った自分の行動を呪った。

「アレックス、帰ろうぜ……」

当麻は、なぜ一緒に逃げたか自身でも勢いでとしか言えないが、あのままだと警備員のお世話になるこ

とを考えると、この選択が正解に思えた。

「そうするか。迷惑かけたな」

アレックスも、用事は済んだので寮に戻ることにした。

七月二十日 Part 1

当麻とアレックスが爆発事件の現場から逃走し、丸一日が経った。昨日は美琴に追われるという可能性からアレックスは表通りを出歩く気になれず、当麻の誘いも課題があると断って裏通りにて、ウィルスに意思を持たせた肉塊を使って超能力の演算式を改良していた。今までに吸収した科学者の知識もあり、いくつかのは実戦的な物にまで開発することに成功した。

例えば、念動力の威力は装甲車にも対処できるほどだ。ここまで一日で到達できたのは、アレックスの思考速度が開発の速度というのが大きいだろう。

ちなみに、昨日は終業式だったが、アレックスは欠席した。そのため、小萌が大騒ぎして家庭訪問までしたのだが、アレックスは出掛けていたので日を改める事になった。

一段落した頃には十時ほどになっていることに気づいたアレックスは、先ほどから警報のように鳴っている携帯電話へと手を伸ばした。

「こちらアレックス」

「遅いわよ。呼び出して五分よ?」

その向こうからは、アレックスも何度が聞いたことのある声があった。

「何だ、案内人?」

「あら、番号を知ってることに驚かないのね?それと案内人はやめて、結標淡希って最初に言ったでしょ?」

案内人 結標淡希は深いため息をアレックスに聞かせながら言った。どうやら、アレックスの周りにはため息を吐く人が多いようだ。「そうだったか？じゃあ淡希、用は何だ？」

アレックスはそう言われて記憶を掘り返すが、最初に会ってから数分後からしばらくは記憶が曖昧だ。恐らくは思索にふけていたのだろうとアレックスは当りを付けた。

「仕事に決まってるでしょ？」

「だろうな」

アレックスはある程度予測していたため、ある程度荷物をまとめながら言う。

「分かってるならいつもの場所に来

」

無言で淡希からの通話を切ると、渋々と部屋を出るアレックスであつた。

割合すると、窓のないビル内部。そこでアレックスはこの学園都市の統括理事長である、奇妙な人間の入ったピーカーの前に対面している。

「今度は何だ？抹殺か？殲滅か？それとも誘拐か？」

アレックスはこの人物の雰囲気はどうも好きになれないので、なるべく早くここから去りたいかつた。

「まあ、そう焦るな。今回はある人物の警護だ」

「警護だと？」

えらく自分の力には合わない物だとアレックスは思った。

「ああ、なぜ君かというのは、君のよく知る人物だからだ」

「勿体振るな。さつさと話せ」

アレックスの脳裏に美琴が浮かんだ。彼女ならこの汚い統括理事長に楯突いてもおかしくない。

「上条当麻だよ」

どうやら、アレックスの予測は外れたようだ。

「当麻か……」

当麻はお人好しの正義大好き人間だ。そんな彼がいったい何をしたのか、アレックスには想像がつかなかった。

「彼は能力の制御ができない『原石』。と、言えば納得して貰えるかね？」

『原石』。世界に十数人しかいないと言われる、生まれもつての超能力者。その能力は、開発によって手に入る能力と違い、かなりトリッキーな物もあるらしい。

「なるほど……」

アレックスには、『原石』の強力さがよく分かる対象がいる。レベル5の第二位『未元物質』は、物質にありもしない効果を付与させるという、とんでもない能力だ。あれにかかれば、日光を殺人光線と化す事も容易である。

「分かった。連れてくればいいんだな？」

アレックスは、当麻がそれと似たような力を持つ『原石』なら、いずれ大きな事故を起こし、自分がここに滞在することが困難になると考えた。

「いや、彼が死なない程度にしてくればいい。それ以外は、彼の行動には、物事を選択には絶対に口を出すな。私の指示ということ、絶対に知らせては駄目だ」

「何を言っている？警護じゃなかったのか？」

アレックスは、理事長の発言が、どこかおかしいことに気付く。

「彼の能力は『原石』の中でも特殊だ。予知能力者に彼を読ませたが『彼にとって今後に影響する大きな選択を変えた場合、大変なことが起こる』という以外は分からなかった」

忌々しそうな口調で理事長が言う。アレックスは胡散臭さを感じたが、予想はしていたので流される事にした。

「分かった。付き添いと考えればいいんだな？」

「まあ、そういうことだ。終了日時は未定だが、その間にも他の仕

事を割り当てる時があるかもしれない。その時は臨時でこちらの者を寄越そう」

そう理事長は付け加えるように言うと、アレックスの背後が開いた。どうやら行けということらしい。

「まったく、人使いが荒いな……………」

アレックスはそう理事長に向けて言うと、案内人の元へと向かった。どうせ当麻は補修だと検討を付けながら。

いないと予想はしながらも、当麻の部屋を訪れるために寮へと戻ったアレックスだが、鍵のされていないドアの向こうには誰もいなかった。補修もそろそろ終わる時間なのでアレックスはこのまま待とうとした時、エレベーターが到着する機械音のアレックスしかない廊下に響いた。

アレックスは当麻が帰ってきたのだと思い、エレベーターに視線を移す。しかし、アレックスの目に映るのは、彼の中の、どの記憶でも見たことの無いものだった。

水色の髪の毛のシスターの少女がエレベーターの壁に寄り掛かるように立っている。少女と言っても、その年齢は中学生ぐらいだろう。しかし、その純白だったであろう修道服は、背中から流れているであろう血によって脇腹を伝うように真っ赤な染みが広がっている。この出血では、そう長くは持たないだろう。

「逃げ……………」

こちらにゆっくりとした足取りで歩きつつ、振り絞るようにアレ

ツクスに警告する。

当初は、なぜこの階に少女が来たのかが分からなかったアレックスだが、現在は当麻の部屋で見かけたフードがああ、の修道服の付属品のような気がしている。そして、当麻の部屋にあったということから、彼の交友関係はかなり広いとアレックスは考えた。

そうこうしている間にも彼女はアレックスの元にたどり着き、懇願するように廊下に倒れた。その血溜まりは徐々に広がるが、ここに来るまでの血痕を辿ってきたのであろう、学園都市に配備されているポリバケツのような掃除ロボに集まれ、あっというまに消えてしまった。

アレックスは、その腰を横に一閃した豆腐を切り分けるような滑らかな刀傷を、見下ろすようにじっと見ていた。元は長かったのだろうが、傷口を終点に毛先が揃っている。

アレックスが気になったのは、なぜシスターが背中を斬られているかということだ。ナイフならまだしも、学生ばかりのこの都市ではあまりにも異常だ。

「仕方ない……………」

何が起こったかはこの少女しか知らない。もし、当麻を探す者にやられたのであれば、早めに排除するべきだ。そう考えたアレックスは、応急手当てをすることにした。最悪、吸収してしまえばいいのだ。

「邪魔だ」

まず、アレックスは掃除ロボの排除に乗り出した。排除と言っても、その右足で蹴り飛ばすだけの簡単な作業だ。

アレックスに蹴られた掃除ロボは、激しい音と共にそのフレームを大きくへこませ、少女の背中を掠めるような低さでエレベーター

と反対の方向へと飛び出した。その軌道下の床には、なぞるようにそれらが回収したゴミが散乱した。

さすが学園都市製と言うべきか、意外にも堅いことにアレックスは目を剥いた。

「これは……」

しゃがみ込んで少女の傷を見るが、このままではそう長くは持たないとアレックスには判断できた。しかし、アレックスには彼女を生かす方法がある。彼の細胞を使い、その傷口を埋めるというものだ。

普通に科学者がやれば感染するだろうが、ウイルスの司令塔は今やアレックスだ。感染体やウイルスは思考はできずとも、司令塔の命令には必ず従う。ましてや、アレックスの細胞で埋めるなら問題は無いだろう。

そして、アレックスは止血しようと少女の背中に触れた瞬間、再びエレベーターから到着のチャイムが鳴った。

「アレックスに………インデックス!？」

中にいたのは当麻だ。アレックスは当麻のタイミングの悪さに、つくづく不幸を呼ぶ奴だと思う。

そして、この少女はインデックスという名前、もしくはニッケネームという事が彼に知らされた。

「当麻、こいつは知り合いか？助かってほしいなら、そのまま自室に入れ。いいな？」

アレックスは、駆け寄ってくる当麻に向けて邪魔だと言わんばかりに言った。

「まさかお前が……！」

「いや、俺じゃねえよ」

どうやら、当麻はやけに冷静なアレックスを少し疑ったようだ。アレックスは、取り調べなどでガシガシ攻められるタイプの雰囲気をしているため、仕方ないと考えた。

アレックスがやった場合、体がいくつかに別れることになる。

「ちくしょう！ いったい誰がやった！！」

当麻はインデックスがやられたのを見て、怒り狂ったように叫ぶ。アレックスは話を聞こうとしない当麻に苛立つも、説明と手当てが先と考えて口を開いた刹那、まったく聞き覚えのない男の音が廊下に響いた。

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」

非常階段側から聞こえたその声の主は、なんと形容したらいいだろう。ニメートルはありそうな背丈に、肩まで伸ばしたオレンジのような赤の髪に、まだ当麻より幼そうな顔つき。そして、ピアスや指輪などのゴテゴテとした装飾品とくわえタバコ。極めつけは真っ黒な修道服と、右の頬骨の上あたりにあるバーコードのような入れ墨。まあ、機械に通じた所で大した値段も表示されないどころか、『ウチの商品じゃない』とか言われそうだ。

しかし、その雰囲気は常軌を逸している………決して、妙ちくりんな見た目からではない。魚屋で牛が丸々一頭売られているような、小学生がセンター試験で満点を取るような理解しがたい気味の悪さ。落としたリングが大気圏を突破しそうな別次元の雰囲気。そ

れをこの少年は持っている。
当麻は完全に動きを止める。

「うん？うんうんうん、これはまた随分と派手にやっちゃって。神裂が斬ったって話は聞いたけど………まあ。血の後がついてないから安心安心とは思ってたんだけどねえ」

魔術師はくわえたタバコを揺らしながら一人呟くと、アレックスへと視線を移した。

「まさか、こんなのが先に見つけたなんて思わなかったよ」

魔術師の目が刺すように薄められる。

その動作から、アレックスは魔術師が自分の事を知っていると判断した。それはマズイとしか言いようが無い。もし、この『魔術師』と名乗るふざけた野郎が、『魔術師』であるという事を装っている場合、『魔術師』という名の司法警察の場合、非常にまずい事態となる。しかし、もし第三の勢力の場合は面倒事になるため、確認することにした。

「お前は何が目的だ？」

「うん、そうだね。誤解があっても困る」

魔術師の腕がスツと上がり、気だるそうに伸ばされたその指先が床に倒れ伏すインデックスを指した。

「ソレだよ。詳しく言えば、ソレが持つてる十万三千冊の『魔導書』を回収することだ」

「……………よく分かった、すぐに救急車を呼んでやるからな」

「どうやら、アレックスの勘違いだったらしい。そう思いながら携帯を取り出し

「待った。持つてるという表現が正確じゃなかったようだ。正確には、ソレの頭の中だ。『完全記憶能力』と、言えば、その隣のバカ面じゃあるまいし納得できるだろう？」

手が止まった。

『完全記憶能力』。アレックスはかつてアレックス・マーサーの時に、珍しい脳の事例として聞いたことがある。何でも、録画ボタンを押したビデオカメラのように、ありとあらゆる物を記憶することができる脳ということだ。

「成る程。お前らは『魔術師』で、コイツの持つてる『魔導書』を取りに来たんだな？」

「うんうん、そういうことだよ。そこのバカ面よりは」

「てめえ！さつきからバカ面バカ面言いやがって、お前に言われる筋合いはねえよ！それに回収だと！？何様のつもりだ！！」

アレックスと魔術師が順調に会話しているなか、置いてきぼりくらっていた当麻が声を上げた。

アレックスは心の中で悪態をついたが、ちょうどいいと思った。この『魔術師』と名乗る男は真実を言っている。そう判断したからである。だとすれば、ここまでベラベラと喋るのは異常だ。

「アンタ、これは機密じゃあ無いのか？十萬三千冊もあるんだ。中にはかなり危ないのもあるんだろ？」

そう言った途端、魔術師の口元が歪む。

「うん。うんうんうん。そうだね、そうこなくっちゃ。まずは『何様か？』からだが、ステイル「マグヌスと名乗りたい所をFortiss931と言わせてもらおう」

魔術師、ステイル「マグヌスは短くなったタバコを手に取り、指で弾いて横へと投げた。火のついたタバコはオレンジの軌跡を描きつつ、隣のビルの壁に当たって火の粉を散らす。

「機密かどうかについてだが、The souvenir of the other world まあ、『冥土の土産』と言った所か。炎よ」

『炎』そう言った瞬間、タバコの描いたオレンジの軌跡が膨れ上がり、爆発した。それは一瞬で集束すると、水道の蛇口を限界まで捻ったように形をなし、炎の剣となり、ステイルの左腕に収められた。

その熱により、空気は揺らめき、隣のビルの壁は、花火を押し付けたように変色しはじめている。

「なんだ、マトモな脳ミソしてんじゃねえか……………！！」

アレックスは思わずそう呟いた。

背後の当麻はどうなっているか知らないが、アレックスには彼を守る義務がある。

「巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは笑みを浮かべながら、その剣を彼らに向けて横薙ぎに叩きつける。

その剣は手すりを飴細工のようにとかしつつ、目標へと振るわれ、昨日のモノを小規模に圧縮したように炸裂した。

「やりすぎたか、な？」

小規模と言っても、超高温の炎の固まりだ。ボリボリと頭をかくステイルの眼前は、石油製品の焼けた黒煙と残り火である魔術による火災に晒されている。

彼も範囲は調整したとはいえ、回収対象も酸欠になりそうな炎だ。ここは通れそうにもないので、下の階を回り道するしか無いだろう。

「まったく……………」

ステイルが首を振った途端、火災が中心に渦を巻いて吸い込まれるように消えた。

その中心には、蛇のような笑みを浮かべるアレックスがいた。

「どうした？そんなにひきつった顔して？こんな炎出した奴が驚くなよ」

『発火能力』。アレックスが実験場で手に入れたそれには、特殊な条件があった。それは、一度吸収した炎を使うという、不便極まりない特性だ。しかし、このような局面。炎を使う能力者には、かなり有効な盾になるだろう。

しかし、吸収できる炎には要領制限がある。三千度はあろうこの剣を丸々吸収するとすれば、二、三発が限界だろう。

まあ、その二、三発目が来る前に、溜まったのを打ち出せばその分吸収できるが。

「当麻、逃げる。お前はレベル0だろ？こいつはそこらの不良ってレベルでもなさそうだ」

当麻は原石とはいえ、レベル0。ましてや、相手は何をしてくるか分からない魔術師だ。

しかし、当麻はアレックスの予想とは多少違うようだ。

「う……おっ！」

そんな間の抜けた声と共に、アレックスの視界の両脇で燃え上がっていた炎が風船を割ったように消えた。

「……ったく、そうだよ、何をビビってやがんだ」

テストの最初にある問題に、最後になって気づいたように当麻は自嘲気味に笑いながら呟く。

「インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだから、この右手だったじゃねーか」

当麻は何かに気づいたようなそぶりを見せると、三千度の残り火にその右手で触れた。

「邪魔だ」

その瞬間、炎が砕け散るように消滅した。

アレックスが見たところ、当麻は消耗した様子もない。おそらく、

あれは電気使いに電気が効かないような当たり前の物なのだろう。しかし、炎を吸収ではなく、消した。打ち消したというには消耗がなさすぎる上に、それならばレベルがもっと上でもおかしくない。だが、強力な能力というのはアレックスにとって好都合だ。

「当麻、さつさと済ませるぞ」

「ああ、ぶちのめしてやろう」

二人の異常者を目の前にして、ステイルは恐怖を感じた。彼とて修羅場は潜っている。しかし、自身の炎を吸収したり消滅させる相手には出会った事がない。

そんなステイルを正面に捉えつつ、アレックスはその右手の平に野球ボールほどの大きさの炎の塊を作り出した。

「お前の炎だ。もっとも、さっきのをこの大きさにまで圧縮したものだかな　自分の炎だ、この意味が分かるだろ？」

アレックスは右手を前に突き出すと、その塊を射出した。

「くっ！！」

さすがにステイルはまずいと思ったのか、迎撃にと再び左腕を振るい、その手に炎の剣を生み出す。しかし、その動作の間にも当麻は動いていた。

右手を後ろに振りかぶりながら、ステイルにそれを振るわんと突っ走る。

「巨人に苦痛の贈り物を！！」

その叫びと共に、前に出ている当麻に向けて
ではなく、
その間の天井にむけて剣が振るわれる。

「なっ!?!」

当麻は予測がはずれたのか、思わず足を止め、正面に向かって右手を伸ばした。

爆発と共に天井が溶け、蛍光灯とコンクリートだったものがカーテンを作る。

「次は覚悟しろ、異能者ども!!」

その向こうから、スタイルの吐き捨てるような声と走り去る足音が聞こえる。

当麻はカーテンに遮られてもちろん追えず、アレックスは追ってもよかったが、伏兵がいる危険を考えて追うのはやめた。

「くっそ、出鼻をくじきやがって……」

怒りが収まらないのか当麻は声を荒げて言うが、インデックスの容体が気になるのか早足で彼女に駆け寄った。

七月二十日 Part 1 (後書き)

あまりにも長くなりそうなので分割。

七月二十日 part 2

「おい、インデックス！しっかりしろ！」

インデックスに駆け寄った当麻は、揺さぶりはしないものの彼女に必死の形相で呼びかける。

アレックスはそんな無駄なことよりも、目先の事をやるべきだと考え、

「 当麻、場所を変えるぞ。この火災だ、時機に色々来るぞ」

インデックスを抱き上げる当麻の肩を掴んだ。

それに並行して寮で燃え盛る火を吸収するが、溶けた手すりや天井はどうしようもない。ただ、それによって点いた周りの炎が、アレックスへと吸収されただけだ。その証拠に、熱を吸収されてすっかりと固まったガラスが廊下へへばり付いている。

「……………ああ、分かった」

当麻はしっかりとインデックスを背負うと、非常階段へと駆け出した。

そのまま急いで近くの裏路地まで逃げたが、そんなところに解決法はあるわけもない。むしろ、インデックスを楽な体勢に寝かせることが困難になった。

「インデックスには十万三千冊の魔導書があるんだろ？その中に治

療に使えるやつはないのか？」

当初、アレックスは自身の細胞で彼女を治療しようとしたが、当麻に見られるのはマズイ。しかし、彼は後は任せると言った所で、怪我人を置いてどこかへ行く性格でもない。

なので、アレックスは彼女の魔導書に賭けてみることにした。まあ、死んだらその魔導書が手に入るのだから、彼にとっては彼女の生死はどちらでもよく、そうするのはただの好奇心だ。

「君……は………？」

インデックスの呼吸は浅いが、アレックスが気になったようだ。

「当麻の知り合いだ。で、お前には魔導書があるんだろ？ だったら魔術で何とかできないのか？」

「あるけど……君もとうまも、『超能力者』なんでしょ？ だったら無理だよ」

「何？」

アレックスは超能力者だから無理という言葉に疑問を抱いた。

インデックスは血が少なくなってきたせいか、小刻みに震えている。

「『魔術』っていうのはね……才能のない人間が……才能のある人間と同じことをするために生み出された術式と儀式なんだよ………」

人は太陽光の模造品として、蛍光灯の光を使う。

蛍光灯では、高電圧による電子と原子の衝突時によって生まれる紫外線が、ガラス球の内側に塗布されている蛍光物質にあたり、可視光線に変化する。それと違い太陽では、内部で起こる核融合反応の過程で生まれたガンマ線が、外側に出るまでに可視光線になる。細かい事は除いて光は発せられるが、過程が違う。仕組みとしては、超能力と魔術は『太陽』と『蛍光灯』なのだ。

「もし使ったら、どうなる？」

「そうだね……拒絶反応が起こるのは確かだよ。例えば、能力や魔術の暴走とか………」

ほとんどアレックスの予想通りな回答が返ってきた。やはり、致命的な物になるらしい。

その会話を当麻は黙って聞いていたが、不意に口を開いた。

「じゃあよ、『才能のない』ただの人間ならできるんだよね？」

当麻はどこかにツテがあるのかインデックスをアレックスに任せて公衆電話で大騒ぎした後、行き先をアレックスに言うこともなく、ただ付いて来るように彼は言った。

「ここに頼れるやつがいるのかよ………」

裏路地を抜けてたどり着いたのは、廃墟にあるようなボロい二階建てのアパートだ。取り壊されていないのが不思議なほどである。

「アレックス、こつちだ！」

いつしか二階に上がっていた当麻が、アレックスを呼び寄せる。それに従い、彼は体重をなるべく減らしながら跳躍し、猫のように柔らかく、赤い鉄の階段に着地した。

「当麻、少し落ち着け」

その頃には、当麻が一番奥のドアのチャイムを鳴らしていた。

「落ち着いてられるか！」

そう言いながらドアを蹴破ろうとし、悶絶する当麻。アレックスは冷めた目でそれを見ながら隣まで歩み寄った。

「お前、馬鹿か？」

「ふ、不幸だ……！」

アレックスが思わず首を振った時、その頑丈なドアが開き、中から小学生ほどの子どもが顔を出した。

「うわ、上条ちゃんにアレックスちゃん。二人揃って新聞屋さんのアルバイトですか？」

訂正。子どもではなく、子ども用の緑のブカブカパジャマを着た、二人の担任の小萌だ。

「なるほど。適任だな」

教師は開発を受けていないのが普通だ。ならば、たとえ学園都市の人間でも、普通の人間と言えよう。

「だろ？先生、ちょっと色々困ってるんで入りますね」

「そついうことだ。悪いな、先生」

当麻が入るのを小萌は邪魔しようとしたが、アレックスはさりげなく増やしたもう一本の腕で彼女を抱える。

「ちよ、今はダメです！」

「忙しいのは分かるが、少しの間でいい。人命救助だ、協力してくれ」

アレックスは反論を無視しつつ、当麻に続いて部屋に押し入った。ドアを抜けると、そこはゴミ屋敷だった。

タバコの吸い殻でタワーができている灰皿。ゴミ箱に入れられる事もなく、床に転がっているビールの空き缶。

「……………当麻、ここに怪我人を？」

「そつだよ。場所を開けるから、そこに下ろしてくれ」

さすがのアレックスも躊躇った、当麻は動じないようだ。

一刻を争うとはいえ、感染症を考えないのだろうか。

「先生。アレックスが説明するんで、協力してやってください」

当麻はスペースの確保のために、ビール缶を蹴散らしながら言う。
アレックスは丸投げされた事によりイラつきを感じながらも、渋々と虚構を織り混ぜながら状況を説明する。

「俺が背負ってるやつ　まあ、友人なんだが、少し怪我をして死にそうなんだ。ただ、している宗教が特殊で、医療行為はダメなんだ」

即興で考えた嘘をベラベラと述べる。

「治し方はあるんだが、学園都市の開発が宗教上引つ掛かる。だから先生に頼るが、心配な事はない。彼女の言うことを聞いてさえくれば、きつと助かる。先生、俺たちは先生だけが　」

「出血に伴い、血液中にある生命力が流出しつつあります」

アレックスと当麻は聞いたことがあるはずの声。しかし、その声はまるでテキストを読み上げるソフトウェアのように感情がなかった。

「警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に『自動書記』で覚醒^めめます。……現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時間に換算して、およそ十分後に私の身体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これからは私の行う指示にしたがって、適切な処理を施していただければ幸いです」

あまりにも冷たい声に、当麻は黙ってインデックスを凝視し、小萌は固まる。

「 当麻、急ぐぞ。提案するってことは、まだ間に合う上に方法がある」

そんな中、アレックスは冷静に言い、インデックスを床にうつぶせに寝かせた。

もちろん、片手で背負っていたように見せながらだ。

「インデックス、俺と当麻に手伝えることはあるか？」

うつぶせに寝たインデックスに向け、アレックスが問いかける。

「いえ。あなた方がここにいれば、術式に多大な影響を及ぼす可能性が高いです。あるとすれば、この部屋から出ることです」

アレックスの問いに即答し、テンプレートにあるかのように淡々と言う。

「 そうか。行くぞ、当麻」

これ以上は無駄と考えたのか、アレックスは当麻のカッターシャツの襟を掴むと、引きずるように部屋を出た。

「ちくしょう……………!!」

あまりにも一気に事が進み、取り残されていた当麻だが、後ろ手にアレックスがドアを閉める直前、悔やみ言を吐き捨てた。

アレックスは部屋を出ずに魔術を見ていたかったのが本音だ。しかし、あの炎を部屋に叩き込まれたりすれば、アレックスはともかく当麻はそれによる火災で死ぬだろう。そのため、野外で一緒にいる方が安全だと判断した。

数分後。当麻はどこかへ駆け出し、アレックスは裏路地を作るビルの上でさきほどくすねたタバコをふかしていた。

アレックスはタバコが好きというわけではないが、せめてもの娯楽だ。

吸っては吐く作業を繰り返し、箱の中身が空になるうとした時、背後から女の声がかかった。

「終わりましたか？」

アレックスには聞き覚えのない声だった。

「まだだ、あと二本」

しかし、彼は振り向くこともなく、新たなタバコを口にくわえる。

「……………話だけさせてもらいますね」

「勝手にしろよ」

イライラしているような雰囲気を感じたが、敵意を微塵も感じてはいないので聞き流す。

「あなたは、インデックスをどう思いますか？」

アレックスは大きく紫煙を吐き出す。

「なんだ、また魔術かよ……………」

「答えてください」

肩を落とすアレックスを無視し、声は問いかける。
仕方がないと思ったアレックスは、渋々答えることにした。

「そうだな、面白いと思う。十万三千冊の魔導書、完全記憶能力。
これだけでも興味を惹かれる内容だと思う」

「そうですか……」

どこか落胆したような声になるが、アレックスは続ける。

「極めつけは、あの『自動書記』っていう魔術だな。インターネット
トの検索みたいに脳ミソの中を検索するの
のは便利だな」

「あれは加護のような魔術です。かけてもらうのは結構ですが、魔力を吸収して発動するタイプの物です。あなたは超能力者ですから、
どうなるか分かりませんよ？」

「そうか、残念だ」

アレックスは吸うペースを落とし、うまくも無い物を味わって吸う。

「じゃあ、こつちも聞かせてもらうが、なぜ赤いのはいきなり攻撃した？あの状況だ、自分たちは増援で保護しに来たと言えば、当麻はともかく、俺は何も言わずに引き渡すと思うぜ？俺はあの時が初対面なんだからな。その方が、そつちとしても戦闘の手間が省けていいだろう？」

背後から、体重が一方に偏る音を聞いた。

アレックスはビーカーの説明と違う当麻の能力も気になってはいたが、魔術師の策略もクソもないやり方に疑問を抱いている。ステイルのあの行動は、陳腐という以外には評価できないものだ。

「まあ、あのガキを餌に、寄って来るのを始末するのが目的っていうなら忘れてくれ。そんな外道に質問した俺が間抜けなんだからな。そうだろ、魔術師？」

「……………何を」

アレックスには、女の声に怒りの色が籠ったのを感じたが、煽るように言ったのはわざとだ。

元々、敵が真実を話すなんて期待はしていない。ただ、話に来たというのであれば、そう偽って攻撃してきたことにしてやり、仲裁するような組織が出てきた場合に有利になる状況を作る。

「ん？どうかしたか？さあ、答えてくれ。あんたらが回収する対象が死にそうになっている時に治療しようとした一般人を、警告も無しにあの神父が攻撃した理由を」

背後の人物が、大きく息を吐く。

「そうですね……………ちょっとこちらを向いてもらえますか？」

丁寧な言葉遣いだが、アレックスにはどんな感情が込められているかがはっきり分かる。

「……………なんだ、人相が悪いのかと思えば、けっこう美人じゃねえか。なんていうか……………日本っばいな、顔は」

へりを誘導するためのライトをバツクに、女は立っている。

彼女は長身でスタイルもよく、黒髪にポニーテールという、モデルのような風貌をしていた。しかし、その服装はステイルとは別の方向に奇抜。白いTシャツをヘソの辺りで片側で結んで短くし、全体的に細いジーンズは臀部の真横あたりで左足が通る筒が切り捨てられている。そして、右は切り捨ててあるのだから、膝の下あたりまであるブーツを履いている。

アレックスの結論は早く、止めの一言を放つ。

「なんだ、露出狂かよ」

「……………どうやら、少し痛い目を見た方がよさそうですね」

そう言いつつ、女はその腰に差した二メートルはありそうな太刀に手をかけた。

アレックスは、夜のビルの上に吹く風が、一層冷たくなったのを感じた。

七月二十日 part 2 (後書き)

更新速度が……

6 / 15 改行ミスを修正

七月二十日 part3 (前書き)

やっと一日が終わった……

七月二十日 part 3

「七閃」

刀を鳴らす音が虚空に響く。次の瞬間にはコンクリートが真っ直ぐ七本の線を描いて弾け、その先にある落下防止の鉄柵がバラバラに弾け飛ぶ。

「七閃！」

声と共に、七つの閃光が空気を切り裂く。

「どうした？当ててみるよ！」

その範囲から外れた空中でアレックスは挑発する。

先程から、女が屋上で器用に跳ね回るアレックスを攻撃すれば、それが行われる寸前に彼は消える。といった状況が、何度も何度も繰り返されている。

「……………空間移動ですか、厄介ですね」

アレックスを追うように走りつつ、忌々しそくに女が呟く。

「能力名知ってるのか？博識だな」

次の瞬間、女のバランスが右に崩れた。

「なっ！？」

その細い右足のスネには、ピンポン玉ほどのコンクリートの破片の端がめり込んでいる。

空間移動は、移動先の座標にある物を押し退けて出現する。それは相手の固さには関係ないため、豆腐で戦車を撃破することもできるだろう。

その隙を突いて、アレックスは自身の座標を相手に重なるように空間移動する。

「嘗めんな！！」

女は左足で地面を蹴ると、驚異的な跳躍で真上に数メートル跳び、空中で刀に手をかける。そして、アレックスが女の跳躍前の位置に出現した瞬間、真上から線を雨のように降らせる。アレックスは、移動後の隙で動けない。戦車の主砲を正面からでも避けられるとはいえ、それは自由に動ける時の話だ。この状態では、散弾銃のような範囲を持つ攻撃を避けられる可能性は皆無だ。

コンクリートが粉々に吹き飛ぶ音が屋上に響き、砂埃が夜の空に舞い上がる。

「……………やってしまった」

少し離れた場所に着地した彼女は、後悔を滲ませた声色で言った。その眼前には、彼女の攻撃による大穴が最上階から屋上にかけてぽっかりと空き、その淵は斬撃の余波でコンクリートに爪痕が刻まれている。

この様子では、その対象となった人物は細切れになっているだろう。無論、生きている訳がない。しかし、頭の冷えた彼女は話に來ただけだというのにあんな安い挑発に乗り、戦闘を始めた自分を恨んでいる。なので、確認をして生きていれば救急車を呼ぶことにす

る事にした。

女は飛び出した鉄骨を避けて穴の中へ飛び降りると、辺りを見回す。オフィスのような部屋は、瓦礫やそれによって潰された物品が散乱し、見るも無残な光景が広がっている。

その中心に、手足や胴が綺麗なピンクの断面を覗かせながら散らばっている。恐らく、アレックスの物だろう。

「やはりダメですか……」

彼女も予想していたとはいえ、気持ちの良いものではなさそうだ。ふと、右側の机の後ろから、生き物が床の上をはいずる音が聞こえた。彼女は反射的に刀に手をかけ、その机に斬撃を放つ。

「ひ、ひい！？た、助けて、殺さないで！！」

気の弱そうな女の声が響く。

机の残骸の向こうにいたのは、スーツを着た日系の白人の女性だ。先ほどの残骸を受けたのか、その額と足には裂傷が見受けられる。

彼女とて、無関係の人間を殺すことは好きではない。見られたこと自体は、魔術で記憶を消せばいいのだから。

「大丈夫ですか？」

怪我をした女に歩み寄ると、その怪我を診る。あまり医学に長けていないのはその手つきを見れば明らかだが、どの程度の傷が危ないかは判断できるようだ。

「この怪我ならあまり心配はありませんね。もっしばらくすれば救急車を呼びますから、安心してください」

「……本当ね？」

負傷した女は疑うように言う。

「ええ、本当です。心配いりませんよ」

魔術師は安心させるため、微笑みながら言う。

「そうですか。綺麗に笑うんですね、うらやましいです」

女は話題を振りたかったのか、苦笑いしながら言った。

魔術師もそれを察したのか、話乗ることにした。

「そうですか？ありがとうございます」

再び微笑む。

「ホント、きれいな笑みね」

次の瞬間、魔術師は血を吐き散らしながら後方に大きく吹き飛び、進路上の物を蹴散らしながら壁にめり込んだ。

「あ………？」

何が起こったのか分からない。魔術師はそんな様子だった。

「えらく丈夫な体だ。ノーガードでもろに受けたっていうのに、まだ生きてるのか」

負傷していた女は、身動きの取れない魔術師に歩み寄る。その口

から発せられる声は、屋上で魔術師が聞いた声だ。

女を黒い茨のようなものがつつむと、その身長と体格、足音が変わった。

「馬鹿な……」

負傷した女はアレックスによる擬態。あの姿は、油断させておびき寄せするための餌でしか無いのだ。

「敵にべらべらしゃべる趣味はない。だが安心しろ、すぐに分かるようになる」

アレックスの背中から、大人の腕ほどの太さを持ち、先端には巨大な針を持つ触手が四本伸び、獲物に食らいつこうとする蛇のように首をもたげる。

それを突き刺そうとした時、アレックスの背後から異様な熱気が吹いた。

「Fortis。巨人に苦痛の贈り物を」

聞き覚えのある声を聞いたアレックスは真横に飛び退き、クレールン車が自らを固定するように足から触手を伸ばし、壁に突き刺してピタリと止まる。

見上げるように跳ぶ前の場所を見ると、そこは見覚えのある炎でドロドロに溶け、その上は火の海になっていた。しかし、その炎とは広がらず、まるでドーナツの穴のような燃え方をしている。

「黙って攻撃した方が良かったんだろうけど、やっぱり炎だから気付かれるね」

「……………ステイル、助かりました」

つい先日、自分と当麻を襲った炎の魔術師の出現に、アレックスは思わず舌打ちをした。その魔術師はこちらに警戒しつつ、何かを呟きながら女を立ち上げらせる。

相手の攻撃に対して隙のできる空間移動は止め、両腕の肘から先に装甲を作りつつ筋力を強化する。

格闘に重点を置いた、装甲車にも通用する一撃を打てる形体だ。その一撃が振るわれる対象が人間ならば、確実に仕止められるだろう。

「まったく、魂を大量に持つてると複数の能力を使えるのか。厄介だね」

ステイルはタバコを噛みながら、苦い表情を浮かべる。

「いや、そいつは違う。喰った脳に演算させて、その結果を使うだけだ」

アレックスがステイルの間違いを指摘すると、ステイルの表情が一層キツくなった。

「清々しいまでの化け物だね」

「魔女狩りの王！」

ステイルのコートが風船のように膨らむと、ボタンを内側から弾き飛ばしながら炎の塊が飛び出した。その塊は空間を燃やすように形を作り、足こそは無いが巨大な両腕を持つ全高二メートル以上の巨人と化した。

アレックスは肌を感じるその熱気から、炎の剣と同等かそれ以上と判断した。

つまり、当たらなくても近づくだけで致命傷になる可能性がある。さらに、自滅する危険からしないだろうが、気温を上げて内部から焼きに来る可能性も捨てきれない。それに対抗しようと発火能力を使えば、立ち直った女からの攻撃をまともに受ける事になる。

アレックスは体勢を立て直すため、数メートル先の天井の穴に駆けだす。一度屋上に上がれば、上から天井を落とすなりの攻撃方法があるからだ。

「七閃」

その声と共に、進路を塞ぐように炎の巨人の腹から斬撃が飛び出る。

アレックスは思わず舌打ちをすると、スラディングでその下を潜る。

しかし、前方には炎の巨人が待ち受けている。そのまま行けばアレックスは綺麗に消毒されてしまうため、右腕を爪のついた伸縮性を持つ一本の触手に変えると、それを斬撃の通り過ぎた天井に突き刺して自分をそこへ引き寄せる。

「逃がすか！」

天井の穴にその勢いで飛び込む寸前、魔女狩りの王の右手がアレックスの左足を掴む。

しかし、その高熱のために足を溶かしてしまい、屋上への逃亡を許してしまった。

「気を付けてください、近くにいます」

「分かってるよ。魔女狩りの王の準備もできてる」

それを追って二人の魔術師も屋上へ上がるが、アレックスの姿は何処へと消え失せていた。

しかし、彼らにはアレックスが付近に潜み、奇襲の機会を伺っているのがはっきりと分かる。ステイルは魔女狩りの王を自身の背後に。女は常に抜刀できる体勢をし、いつでも対応できるように神経を研ぎ澄ませた。

「くそつ、熱源探知にもかからない……」

索敵のために神経を張るステイルには、ビル風と、その中に紛れる魔女狩りの王の燃焼の音が騒音にしか聞こえない。

それが彼を苛立たせ、集中力を削った。

「ステイル！」

女が叫んだ頃には、魔女狩りの王を避けるように飛来した物体によってステイルの足の甲はコンクリートに縫い付けられた。

「ぐ……！？」

隣のビルの屋上から飛来したその物体は、女が最初に切断した鉄柵の鉄柱部分。片側はコンクリートに刺さっているため見えないが、上を向いているその末端は専用の工具で切ったような、なめらかな切り口を覗かせている。

続けるように、女にそれを切り取った元であろう鉄柵が投じられるが、彼女はそれを易々と七閃と呼ぶ斬撃で迎撃する。切られた際

の衝撃により、柵は埃のようにあらぬ方向へ飛んでいく。
女はその流れで刀を納めると、ため息のように息を吐いた。

「待て！神裂！！」

痛みをこらえながら叫ぶステイルを彼女は無視し、明らかな殺意を込めた声を発する。

「Salvare000！！」

その瞬間、私たちのいるのビルと同じ高さにあった隣のビルにて、屋上に設置された物が激しい音を立てながら倒れた。

それだけではない。それによる余波であるうか、近辺のビルのがラスが一斉に砕け散り、屋上のコンクリートが刻まれる。

「Wh !?」

もちろん、そこに隠れていたアレックスも、その余波を受ける。
彼の手足は千切れ飛び、下半身は上半身とお別れした上にミンチ同然。更には脊椎の中心部が余波によって破壊されたため、そこから離れたい彼の意思に反して強制的に再生が優先される。

「そこですか」

いつの間にか刀を振り切った体勢になっている女が呟くように言った。

先ほどまでステイルのそばにいた神裂が空間移動でもしたように、コンクリートに転がるアレックスの真横に表れる。

「魔法名は名乗りたくなかったのですが、名乗らせたのはそちらで

す。悪く思わないで下さい」

その間にも、アレックスの再生は進み、五体は完全に再生する。

「すさまじい再生能力ですね。やはり、斬撃では無理ですか」

その様子に、神裂は手におえない事が分かったようだ。

ステイルが来る時間を稼ぐためにか、女は七閃でアレックスの手足を切断する。今度は狙い澄ましたのか、コンクリートには傷一つ付かない。

「スプラッタが好きなのか。いい趣味してるぜ」

「嫌いです。ですが、インデックスを助けるためなら私は何だってします」

アレックスの皮肉めいた言葉への神裂の反論を、アレックスは鼻で笑った。

「助けるだ？ 斬った奴が何を言う。最初にも言ったが、そっちから俺と当麻に攻撃を仕掛けたんだ。あんたらが殺しかけたインデックスを、治療できる場所へ運ぼうとした時にな」

その言葉に、女は息を詰まらせる。

「あの子の修道服は世界最高クラスの防御力を誇る結界が張られていました。私があの子を斬る、その日までは」

「……何？」

女のその意味ありげな言い方に、反撃に背から腕でも生やそうと
していたアレックスの動きが止まる。

「あなたの言った、当麻という青年の部屋にてフードを残した結果
が全て破壊されています。ご存じなかったのですか？」

アレックスは当麻が炎を消したことから、熱振動、しいて言うな
ら運動エネルギーを操る類の原石かと思っていた。しかし、結果を
破壊させるということはエネルギーを操ったというわけでは無いよ
うに思える。その上、インデックスを守る物と分かっているのでは
あれば、あの当麻がそれを壊すはずもない。

アレックスの中で、当麻の能力の危険度の認識と、彼自身が制御
できない事への確信が強まった。

「初耳だ。すると、あんたらは攻撃が効かないことは分かっている
からこそ、足止めのために攻撃できたってことか」

「そういうことです。あなたたちにステイルが攻撃した事について
は、少々長い話になりますが話しましょう」

探るようなアレックスが攻撃しないと見たのか、女は詳しく話す
ことにしたようだ。

アレックスは彼女を吸収すれば短くて済むと考えたが、ここまで
力のある人物が前線にいるとなると背後の勢力はどんな規模かは予
想がつく。

アレックスとて、訳の分からない集団が集まった勢力にはかなう
と思わない。それに、服装から予想するに宗教絡みの組織だ。宗教
は、敵に回したらろくな事にならないのは世界のどこでも変わらな
い。

「続けますね。私たちとインデックスは同じイギリス清教の魔術結社、『必要悪の教会』に所属しています。簡単に言ってしまうえば、毒を持って毒を制する組織です」

アレックスは魔女狩りを思い出したが、こんな事は世界史に頼っても仕方ないと思って忘れる。

「私たちは同僚として、友人として。私としては、彼女を妹のように思っていました」

アレックスは自身の妹の事が気になったので、後でインターネットで彼女の記事を調べる事に決めた。

「しかし、彼女の持つ完全記憶能力による記録は彼女の脳を圧迫し、その命を脅かし始めました」

「ん？」

アレックスは彼女の言葉に、明らかにおかしい部分があることに瞬時に気づいた。

「どうかしましたか？」

アレックスの雰囲気からは予想できない疑問を感じた姿に、女は訝しげに聞く。

「完全記憶能力じゃなく、映像記憶能力が正式名称な……………まあ、それで脳が危ないなんて聞いたことがない上、あり得ない」

「……………どういう意味ですか？私が嘘を言っているとしても？」

女はアレックスの言いたいことが分からないようだ。

「せいぜい十数歳だろ？ドイツの作家ゲーテは映像記憶能力を持ちつつも、八十二歳まで生きた。死因は確か……老衰だったかな」

アレックスの吸収した人物の中に、映像記憶能力について調べた人物がいる。しかし、その人物の記憶が確かとは言えないため、曖昧な言い方をする。

「しかし、現にあの子は苦しみ、私たちが記憶を消せば治まりました……それでも、あり得ないと言えるんですか！」

彼女にとって記憶を消すの事は余程辛かったのか、震える声で叫ぶ。

「そうだな……恐らくは魔術が原因じゃないか？診断した奴は確実にグル、指示したのはそつちの上層部だろうな」

「そんな、まさか……」

完全記憶能力のせいだと思っただけでも上層部には思うところがあるらしく、女は絶句し、黙った。

アレックスは説得という物は慣れてはいないが、やってみると意外に面白いことに気づいた。

女が黙ってから二、三分が経った時、女はいきなり口を開いた。

「……彼女には魔導書がある。組織としてはあの子は拘束したい。だけど私たちがいる。そうか、あいつら……」

彼女なりに推測できたのだろう。苛立つというよりは憤慨している。

アレックスは、面白そうな物を見る目付きをしているが。

「どうだ、納得できたか？」

「ええ、原因が彼女の体質が原因では無い事は分かりました。しかし、魔術が原因というなら、尚更彼女を保護する必要があります」

その言葉を聞き、アレックスの目つきがイライラした物に変わる。ピーカーの人間から出された任務の理由が、この魔術師たち。しいて言うなら魔術が原因だと悟り、この件を片付ければ任務が終わると考えた。

「じゃあ、そうだな……取引だ。当麻の能力は俺も知らないが、少なくともエネルギーを操る力かもしれない。ステイルの炎をアイツの右手が消したんだ、魔術にだって効く。こつちでも魔術に詳しそうな奴から調べてやるし、処置を施す場合はそつちに了承を得てからだ」

悩むような女の表情を、アレックスは目の動きだけで窺う。

「そつちにとつても、悪い話じゃ無いと思うが？」

彼女には、アレックスたちがインデックスを助ける理由があるとは思えない。それに、当麻からは感じないが、アレックスの放つ雰囲気信用する事をためらわせた。

しかし、彼らの力を借りれば解決の手口が見つかり易いと感じ、怪しい動きが見つかるまでは彼らを利用すると決めた。

「……………いいでしょう。あなたたちの現在の拠点を中心にしますが、私たちも交代でインデックスを見させていただきます。ただし、終戦ではなく停戦ですからね？」

女は仕方なさそうに呟くと、刀から完全に手を放す。

「ああ、もちろんだ。じゃあ、取引成立だ」

女に交戦の意思が無い事を悟ったのか、アレックスは立ち上がる。傷一つ無く再生したアレックスを、女は呆れた表情で見っていた。

七月二十四日 part 1

アレックスは、女と取引をした翌日。つまり、七月二十一日に当麻とインデックス両名に事情を全て説明し、協力を得ることができた。

その際には、当麻が魔術師の心変わりに激昂したり、インデックスが聖職者らしい広い心でそれを咎めていた。そして、一人だけ放置された家主の小萌は部屋の隅で泣きだし、当麻が大慌てしたのは小話である。

「まあ、そういうわけだ。さっさと原因の魔術の消し方を教えろ。どんな物が察しは付いてるんだろ？」

「教えてやってもいいが、タダというわけにはいかないな」

アレックスが話しているのは、胡散臭さならオカルト記事にも負けない学園都市の統括理事長である。

もちろん、理事長はビーカーの中に引きこもっているので家で寝ていた淡希を電話で叩き起こし、ビーカーのある窓の無いビルに案内させた。

彼女はそれで機嫌を損ねたようで、アレックスはコルク抜きを数本ほど体内に埋め込まれたが。

「何と交換だ？金っていう訳じゃ無いんだろ？」

アレックスは、理事長は金に固執するようなタイプではないと思っっている。なので、先ほどの言葉は、労働力を寄越せということだ

と解釈した。

「これからは先の仕事と併用し、とある実験の後処理をしてみよう」

「……………何？」

理事長から話された意外な仕事内容に、アレックスは思わず声を漏らした。

そんなアレックスに構わず、理事長は説明を続ける。

「後処理と言っても、やるのは死体の処理だけでいい。実験は成果が出たら終了する。何か質問は？」

終わりの分からない仕事に、アレックスは研究室にいた頃を思い出した。

「分かったよ。で、解決方法は何だ？」

その類いの仕事にはあまりいい記憶は無いが、二つ返事でその仕事を承ける。

「簡単だ。脳に影響している魔術の発動元の大抵は額か延髄、もしくは口の中だ。上条当麻の右手でそれに触れれば、後は簡単だ」

理事長はさも当然のように言うと、付け足すように言う。

「実験場所と日時はその都度連絡させる。今からの実験にはこちらから案内人を出す。いいいな？」

アレックスはそれを聞くと、もう用はないと言わんばかりに早足

で出口から出て行ってしまった。

「……………まだ被験者にはこの事は伝えてないと言おうとしたのだが」

その場には、かなり重要な事を意図的に最後に回したように思える理事長が残された。

「あなたが処理係ですか、とミサカは質問します」

淡希にビルから外に出してもらい、実験場への案内人へ取り次いでもらうと、その相手はいつかの戦闘マニアだった。

ただし、感情の抜けた瞳とSFチックなゴーグルを額に掛けているという違いはあるが。

「じゃあ、後は任せたわよ」

何者か思案するアレックスに淡希は一声かけると、他人事だから知らないといった様子で立ち去ってしまう。

「お前、何だ？」

「私は実験のためのクローンです、とミサカは答えます」

一瞬、アレックスは彼女の頭はどうかしてるのかと思うが、学園都市でそう思える人間にはよく会うので、ここでは普通なんだと納得する。

「……………時間の無駄だ、案内してくれ」

「自己紹介も無しですか、とミサカは常識を疑います」

その言葉に苦手な何かを感じ、アレックスは思わずため息をつく。

「アレックス・マーサーだ」

「ミサカ9812号です、とミサカは簡素な自己紹介をします」

彼女に驚いた様子はないため、言葉の文だ

とアレックスは判断する。そして、9812という数字から、学園都市では人体実験は当たり前だと彼は改めて感じた。

「そうか。さつさと案内してくれ、俺にも予定がある」

アレックスとしては、他人がいくら自分に関与しない理由で死のうと、知ったことではない。ましてや、まさに実験材料といった雰囲気、全ての感情を落としてそんなクローンだ。気にする事が異常だとアレックスは思った。

「分かりました。こちらとしても、実験の開始まで時間がありませんから。と、ミサカは賛成します」

9812号はそう言うと、付いてこいと言わんばかりに歩き出す。アレックスは当麻に解決方法を携帯で伝えつつ、その小さな歩幅を大きな歩幅で追いかけた。

アレックスは死人の出る実験と聞いたため、目的地は研究所と想像していた。しかし、9812号に導かれて到着したのは、第七学

区の裏路地にある開いたスペースだった。

しかし、それこそ自分が呼ばれた理由なのだとアレックスは解釈する。

「あと六分七秒で実験を開始しますので、あなたは待機しててください、とミサカは警告します」

ミサカは更に奥へと続く通路に向くと、その奥には何かがいるように言っ。

「ああ、分かった。ここにいればいいんだな」

アレックスは了承したように言うが、彼としては9812回以上も実験の対象となる相手がいったい何か気になっている。なんせ、レベル5のクローンを万近く使う実験だ。

「本日の実験は後六回ありますが、詳しくは被験者に聞いてください。さようなら、とミサカは別れを述べます」

9812号は機械的に路地の奥へ歩き出す。

9812号を見送ると、屋上から観戦するためにアレックスは飛び上がる。

「こっちな」

屋上伝いに9812号の後を追うと、更に広い空間が路地裏に用意されていたように広がる場所に出た。

そこでアレックスが見たのは、暗殺者のような身のこなしの9812号に背後から迫られている黒いシャツに、ジーパンを履いた白い髪の少年。その姿を誰かで観た気がしたので、アレックスは研究

職の人物の記憶を探る。そして、該当した人物にアレックスは驚いた。

「一方通行 《アクセラレーター》……………か」

レベル5第一位。本名不明、能力名は『一方通行』。これはレベル5全てに当てはまるが、群を抜いて性格を中心としたその他諸々がイカれている人格破綻者だ。

その背後に9812号はたどり着くと、右に手にしていたアーミナイフを筋肉の欠片も付いてない一方通行の肩甲骨目掛けて凄まじい速さで突き刺す。

「あア？」

一方通行は、何が起こったのか分からないというような声を発した。

しかし、その切っ先はその薄い胸板の先から飛び出す事はなく、その軌跡をなぞるように同じ速度で弾かれた。

「ぐー!？」

9812号の腕はナイフをしつかり握っていたために大きく弾かれ、肘と肩から骨がずれて外れるような音が響く。

振り返った一方通行は、喜ぶようにその口元を大きく歪ませた。

「ンですかアその様は。不意打ちして自滅かア？」

一方通行は、醜い獣のように笑っている。その姿は、楽しすぎて堪らなく、悶えてるように見える。

体勢を立て直すつもりなのか、9812号は駆け足で路地の更に

奥へ逃げる。

「はっ！逃げられると思ってんのかよオ！」

しかし、一方通行は短距離の陸上選手にも勝る瞬発力で、9812号の背中目掛けて突撃する。

本来ならば、お互いに複雑骨折や粉碎骨折をし、脳震盪も避けられない衝突だろう。しかし、一方通行は『本来ならば』の中には入らないようだ。

「あ」

背中からタツクルとも呼べない突撃を受けた9812号は、自動車事故にあつたかのように体組織や体の一部を辺りに撒き散らしながら真上に吹き飛ぶ。

しかし、一方通行はピタリと止まったものの、傷一つどころかぶつかった際の返り血一つ付いていない。一方通行の完勝だ。

「ただの跳ね返す能力………って訳でも無さそうだ」

個人的な解釈を呟くと、アレックスは一方通行の背後に降りるように飛び降りた。

重く鈍い音と共に草の生えていない地面が二センチほどへこみ、アレックスの着地を一方通行に伝える。

「ああ？誰なんですかアお前は？」

一方通行は音に反応して振り替えると、アレックスをまじまじと見つめる。

彼としては一方通行には会いたくないが、いきなりの戦闘を避け

るためには仕方がないと自身に言い聞かせる。

「気にするな、ただの死体処理だ」

一方通行に実験場の事を聞くと9812号は言っていたが、そんな事をしなくてもアレックスは知る方法がある。

アレックスは一方通行の横を通り抜けて地面に転がる仰向けの死体に歩み寄ると、しゃがみこんでその曲がった首に手を置く。そして、一方通行に見られないようにその掌から触手を出すと内部から死体を食わせ、いつかの爆発物のように掌へと吸い込まれるように消えた。

ざっと観た彼女の記憶からは、実験の目的、手段、近日に行われる実験の日時が読み取れた。おまけに、彼女は欠陥電気 《レディオノイズ》 と呼ばれる電気能力を保有することが分かった。しかし、ゴーグルを使わないとマトモに使えない、まさに欠陥なのでアレックスはあまり得したと思わなかった。

次の場所まで待機しに行こうとアレックスが立ち上がった瞬間、一方通行に声をかけられた。

「なんだア？えらく変わった能力だなアおい」

死体がアレックスの掌に吸い込まれたのに異常を感じたのだろう、明らかな敵意をアレックスに向けている。

「そんな顔する必要がどこにある。ビビってんのか？」

しかし、アレックスはただかたかた四、五歳の反抗期真っ盛りの少年とは話す気にならず、9812号の落とした刃先の折れたアーミナイフを懐に入れる。

「　　ンだとてめえ！」

その瞬間、アレックスは背後から殺気が吹き出すのを感じた。アレックスは反射的に背後の一方通行を殴りそうになるが、アーミーナイフが弾かれたのを思い出して真上に数メートル跳ぶ。

「てめえが売った喧嘩だ！責任取れよオ！！」

そのままアレックスが壁面に張り付くと、明らかに彼を敵と見ている一方通行が笑っている。

「どうなってんだ……………」

その姿を見てアレックスは思わずため息を漏らし、一方通行から数メートル離れた場所へ着地する。

しかし、アレックスはレベル5を手に入れる事ができるかもしれないため、能力の解析だけでもしようと考えた。

「試させてもらっぞ」

アレックスはそのまま一瞬で一方通行に近付くと、反応できない一方通行の顔面に拳を叩き込む。

しかし、それは先ほどと同じく彼に当たった瞬間に巻き戻しように弾かれ、アレックスの腕がメリメリと嫌な音を発する。

「えらく馬鹿力だなア、オイ！」

一方通行は何もなかったかのようにアレックスに向き直ると、お返しと言わんばかりに鳩尾を殴りつける。

しかし、その拳はアレックスが十数センチほどの身長差から狙わ

れることを予期し、予め作っておいた装甲に阻まれる。

「ア？」

その事に驚いたのか、一方通行の動きが止まる。

そして、体重を増やすことによつて微動だもしないアレックスは、一方通行の右目目掛けて人差し指を突き立てる。

が、やはり弾かれ、今度はアレックスの指があらぬ方向にねじ曲がる。

「ワリいな、反射はオートなんだよ！」

アレックスは眼球は防御できないと思つたのだが、その予想を裏切つて一方通行は難無く弾く。

そして、今度は蹴りを放たれ、アレックスは大きく吹き飛ばされる。が、空中で体勢を立て直し、反対側の壁面をへこませながら着地する。

アレックスはこの筋肉の欠片も窺えない少年のどこにこんな力があるか考えたのだが、彼が殴つたり、蹴つたりした反動を受けた様子が無いことから推測はついた。

一方通行は、力の向きを操る。反射かと最初は思つたが、それは波紋のように剥がされたコンクリートの説明に無理がある。

「身体能力を上げてンのかア！？」

アレックスの異様な身体能力から当たりを付けたのか、見抜いているように言ひ。

「さあな。当ててみるよ」

アレックスは一方通行の能力を半ば見抜いたとはいえ、その対処法はまだ分からない。そこで、色々試すことにした。
まず、小さなコンクリートの塊をいくつか拾い、それを人間並みの速度で投げ付ける。

「オイオイ、どうしたんだ？」

明らかに遅いのに気づいた一方通行は、能力の使用限界と勘違いしてあきれたように言う。

当たり前のように投石は弾かれ、それと同時にアレックスに向かって突撃してくる。

アレックスは一方通行が右手を突き出しているのに不信感を覚えるが、勘違いさせたままというのも面白いと感じ、当たってみる事にした。

「限界かア！？三下ア！」

そして、アレックスの腹に一方通行が触れた途端、アレックスの体が十数ヶ所破裂し、穴という穴から血が噴き出す。

アレックスは、一瞬何が起こったのか分からなかったが、血管壁が逆流した組織液によって潰され、または広げられている。この怪我にその事を関連付ければ、血液を逆流させたという線が最も有力だと考えた。

一方通行は触れた際に相手の体の異常さに気付き、子どもが作った粘土細工のようになったアレックスを見下ろす。

「統括理事会つてのは、こんな訳のわかんねえのも入れてんのか」

呆れたように一方通行が呟いた時、彼の携帯が鳴りだした。

「ん？」

懐からが雑に携帯を取りだし、急かすように鳴るコールを止めようとする。

「ああ？なんだ、芳川」

その相手はどうやら一方通行の知り合いの、芳川というようだ。

『そっちに行つた死体処理係、理事長から送られたらしいわよ。色々話すこともあるし、彼と一度こっちに来てくれる？』

その言葉を聞き、一方通行は足元に転がる死体処理係を見る。

「危険だア？ソイツなら俺の足元で愉快的オブジェになつてるぜ」

『……………何ですって？』

電話の向こうで、芳川が絶句したのを一方通行は感じ取る。

「何なんですかア？確かに異常な奴だったが、そこまで強いつて訳じゃなかったぜ。それに、こんな仕事をさせられるなんてのは、どうせ捨て駒だろオ？」

一方通行はアレックスから視線を放すと、乱暴に携帯をポケットに押し込みながら背を向けて歩き出した。

その時、一方通行は背筋から獣の息のような視線を感じ、反射的に振り返る。

その視界にはアレックスのスパラッタな死体ではなく、傷一つ無いアレックスが無表情で立っていた。

「どうした、研究所に行くんだろ？」

そして、何事も無かったかのように話し掛けてくるアレックスに、一方通行は言い知れぬ何かを感じた。

アレックスは、一方通行能力への対処も不完全ながら組み上がっているため、一方通行を直ぐ様殴り飛ばしたかった。しかし、それをしてメリットは新しい能力が手に入る以外は無く、むしろデメリットだらけのために自重した。

「お前……………」

一方通行はアレックスがなぜ動いているのか気になったようだが、それを聞いても答えないと判断し、舌打ちをした。

「仕方ねエな……………」

一方通行は、諦めたように研究所へと歩き出す。

その言葉に従い、アレックスは芳川がどんな人物か想像しながら追いかけた。

七月二十四日 part 2

「私は芳川桔梗。よろしくね」

「アレックス・マーサーだ。今日より実験終了までの間、死体の処理を務めさせてもらう」

一方通行に付いて行くと、コーヒーの香りが漂う、散らかった研究所の一室にアレックスはたどり着いた。もつとも、コーヒーの匂いの元凶は、到着するなりさっそく飲み始めた一方通行のせいだが。

「おいおい、俺の時とはずいぶん態度が違うじゃねエか」

そして、アレックスがあることを聞き出すために下手に出ているのを、即座に妨害しているのも彼である。

「社交辞令だ。頭回せ、第一位」

アレックスはそう吐き捨てて一方通行を睨むと、再び口を開く。一方通行は舌打ちをすると、コーヒーを煽った。

「それ自体はそつちにも大した問題はないだろう。俺が話したいのは、AIM拡散力場についてだ」

AIM拡散力場。これについては様々な知識をアレックスは手に入れたが、どれもこれも専門外。それに詳しそうな学者の論文もあったが、直接会うには紹介がいるだろう。

それを手に入れるためと、桔梗への多少の自己紹介という目的でアレックスはここに来た。

「私は遺伝子方面が専門、AIM拡散力場は専門外もいいところよ」

「ああ、そうだろうな。この実験にはAIM拡散力場はあまり関係ない」

9812号からアレックスが手に入れたこの実験の目的は、一方通行をレベル6にすること。

それも、二万体の妹達と呼ばれる御坂美琴のクローンを殺すという方法だ。

その実験上で力場を観察するという物はあるそうだが、それ以外には力場は関わってこないだろう。

「それはつまり、詳しい人への紹介が欲しいのね？」

「そういう事だ」

芳川は少し悩むような素振りを見せたが、すぐに口を開いた。

「分かったわ。それなりにコネはあるから、よっぽどじゃない限りは可能よ。ただし、私の要望にも答えてもらおうわ」

割とすんなり通った事にアレックスは安堵したが、遺伝子専門である彼女の要望を危惧した。

「何も難しい事じゃないわ。あなたの体細胞をちょ

」

「断る」

それは、アレックスの危惧した通りの要望だった。

Black Light というウイルスに感染した体細胞を研究されれば、その結末がどうなるかは容易に予測ができる。

よくて強化兵士や、対Black Light用のウイルス又はワクチン。悪くて、学園都市全域を巻き込むパンデミックだろう。

「あら、クローンなんて作らないわよ？ただ、ちょっと調べたいだけだから」

芳川はアレックスがクローンを作られる可能性から否定したと勘違いしたが、アレックスはウイルスの事を知らなかったための方便に使うことにした。

「実験のために二万體も作る奴の言葉か？信用できるわけがない」

「……そう、残念ね」

どういう事か、アレックスの知る研究者の性格としてはありえないほど早く、彼女は引き下がった。

しかし、それを指摘するのは失礼だとアレックスは感じたため、それには触れないことに決めた。

「他のなら手伝えるが」

「いえ、いいわ。誰に紹介して欲しいか言って頂戴、一筆書いてあげるから」

桔梗はそう言つと席を立ち、近くの棚に積まれたプラスチックの引き出しから書類を取り出した。

「はっ！えらく甘えじゃねェか」

それに対し、一方通行が横槍を入れる。

「コーヒで酔ったのかとアレックスは思いつつも、ならば尚更相手にしないのが得策だと判断した。」

「木山という水穂機構病院の研究者だ。かなり前だが、AIMについての論文を発表していた」

アレックスがそれを言うと、桔梗は納得したように言った。

「ああ、彼女ね。確かに専攻がそれだけど、今は大脳生理学の専門チームよ？」

もつと名の知れた研究者はいる。桔梗はそう言いたそうだった。

「いや、構わない」

「……………分からないわね、ほんと」

桔梗は呆れたようにため息を吐くと、書類に記入を始めた。

アレックスとしては、大騒ぎになるのを避けたいだけだ。主に吸収した後。

「分からねえと言えば、いったいお前の能力だ。殺した筈なのに死んでねエ」

一方通行のその声を聞き、桔梗のペンが止まる。

「自動再生のレベル3」

「嘘だろ」

「嘘ね」

アレックスの形式化した返答は、当然のように見抜かれた。

「全身の体液逆流から再生しといてレベル3ですか？分かりやすすぎる嘘吐いてンじゃねエよ」

「彼と戦ったなら、レベル3なら死んでるでしょ？」

一方通行に続き、桔梗までもが否定しにかかる。

アレックスは、日本人は詮索しない性格が多いんじゃないのかと、その情報元の人物を恨んだ。

「正直に言いなさい。この書類を書くのと交換よ」

桔梗を吸収して書類を書くにしても、その後どうなるかは知れたことだ。なので、アレックスはぼかして答えることにした。

「身体検査では手を抜いている。レベル3は色々都合がいい。分かるだろ？」

思い当たる節があるのか桔梗は黙るが、一方通行はそうはいかないようだ。

「脳みそを破裂させたのに演算？脳無しかオマエはよオ？」

その言葉に、アレックスは思わず吹き出した。

「おいおい。やるなら肉片を残さないくらいやれよ。そうすれば死ぬかもな」

その言葉に一方通行はキリがないと思ったのか、今日は寝ると言いながら席を立った。その様子では、今日はもう実験を受ける気は無いのだろう。

「そういうことだ。さあ、書いてくれ」

桔梗はアレックスを余程高レベルの再生系かと考えたのか、渋々といった様子で記入を再開した。

「ここか」

A I M解析研究所。そう書かれた病院の玄関にアレックスは到着した。

ちなみに、まともな人と推測し、悪印象を与えないために制服である。

「この木山という研究員に会わせてくれ。紹介状も持ってきた」

「はい、お聞きしています」

アレックスが受付で書類を見せると、すんなりと面会の許可が降りた。

桔梗が電話をいれてくれたのだとアレックスは察し、その甘さに

思わず笑った。

すぐに木山春生と書かれた書齋にアレックスは通されたが、そこに彼女の姿はなかった。そのため、アレックスは置いてある専門書を読みつつ、時間を潰していた。

半分ほど本を読み終えたところ、不意にドアが開いた。

「待たせてすまない。少し手が離せなくてな」

表れたのは、アレックスの吸収した人物の記憶にある木山春生本人だった。

整った容姿をしているが、ボサボサの長髪に、眠そうな目の下には濃い隈。そして、使い古されて生地が完全に柔らかくなった白衣。アレックスは、その女性が金儲けではなく、何か他の目的で研究をしているのだと強く感じた。

「アレックス・マーサーだ。時間を割いてもらい、申し訳ない」

「いや、気にする事はない。あと少しで終わる予定だからな」

アレックスは春生と軽く握手をすると、本題に移ることにした。向かい合うように机を挟んで黒革の椅子にすわると、春生に比べてアレックスの座高は大きく沈んだ。

「さて、AIM拡散力場について、何が知りたい。目的も教えてもらえると助かるのだが」

アレックスの目的は知的欲求を満たすことだが、能力の開発の役に立たないかと思案していた。

まあ、それによって当麻の能力が判明すれば、棚ぼた物だが。

「知りたいからだ。AIM拡散力場について、もっと詳しくな」

そのアレックスの言葉に春生は少し固まったが、すぐに口を開いた。

「それはつまり、講義を受けたいという事か？」

「そういう事だ」

春生の表情が少し強張ったように見えた。

そして、春生は冷めたコーヒを一気に飲むと、アレックスに言った。

「仕方ない。ただし、私は先生という訳ではないからな。先生と叫ばないでくれ」

そう言つと、簡単な事を説明するのか、棚から専門書を引っ張り出した。

「そうだな。分かりやすくするために、後で君から出ているAIM拡散力場を測定しようか。自分の事となれば理解も深まるだろう」

今度は、アレックスの指先がピクリと動いた。

もし、超能力者を取り込んだ影響で力場が発生しているならば、その合計は一般の能力者をゆうに超えてしまうだろう。そして、影響が無い場合には、レベル0からでも測定される物がレベル3から測定されないと、いうことになる。

「今までのデータじゃだめか？」

「それでもいいが、やはり個人差もある」

ブラッドリー・ラグランド医師とのようにうまくやれそうな気がしていたアレックスだったが、ここで騒がれるよりは吸収し、一度彼女の姿で外出した方が得策だと考えた。

そして、彼女の脳髓の座標へ自身の爪を空間移動させようと演算を開始した瞬間、部屋にノックの音が響いた。

「少しすまないな。風紀委員から要請があつたんだ」

春生はアレックスにそう言うと、ドアの向こうにいる人物を招き入れた。

アレックスは舌打ちをしそうになったが、気長に行こうと気持ちを切り替える。そして、席を立てて書類の入った棚にもたれるように立った。

「木山先生……佐天さんが……」

ドアが開くなり泣きそうな声で春生に訴えたのは、花飾りを頭に乘せた少女。初春飾だった。

それを見て、彼女が風紀委員だった事をアレックスは思い出した。

「どうかしたのか？とにかく座りなさい」

春元は飾を椅子に座らせると、その正面に座る。

彼女が話した内容を簡潔に言うと、親友である佐天涙子がレベルアップ幻想御手1を使用して昏睡状態になってしまったというものだった。

それを聞いた春生は、焦る飾りを落ち着かせるためにコーヒ1を

入れると言いき残りすと席を立つた。

アレックスは幻想御手という物を名前から能力の強度を上げるものとし、涙子はレベルが高くないという推測を立てた。

「あなたはなぜここにいるんですか？」

「野暮用だ」

飾はアレックスがなぜここにいるか疑問に思ったようだが、彼女に答える義務もないのではぐらかした。

しかし、そのまま飾が見つめてくるで煩わしく思い、春生の元へ行こうと柵から背を離す。

その時、アレックスの臀部辺りにある引出から、ひらひらと書類が床に落ちた。

「ん？」

気になってそれを手に取ると、彼の眼には『Synesthesia』つまり、『共感覚』というタイトルが目に入った。

「何ですか、それ？」

アレックスは大して秘匿する必要のない、専門的な事なので言う事にした。

「共感覚についての………まとめだな。共感覚性、分かるか？」

飾は首を横に振る。

「刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさ

せる、特殊な知覚現象だ。例を挙げるならば、音楽を聞いて暑くなったりな」

そう言うと、飾の目が大きく見開かれた。

「アレックスさん、それって」

そして、いきなり崩れ落ち、眠るように椅子へ倒れた。

「勝手に資料を見ないでくれないか。これだから子どもは嫌いだ」

そう言いながらドアを開けたのは、春生。その目は、俗に言う白目の部分が充血によって真っ赤になっている。

「さて、そろそろ警備員が嗅ぎ付ける頃だ。すまないが、君にも眠ってもらおう」

春生はそう言いながらアレックスに右手を伸ばし

「講義はどうするんだ？詳しく聞かせてくれよ」

その腕は空間移動によって真横に現れたアレックスによって掴まれた。

「な!？」

左手を動かすより早くアレックスの念動力が彼女の周りの空気を固め、拘束する。

「顔の周りは固めてないから聞こえるよな？」

アレックスは手を掴んだまま言った。

「初めて見るな……………複数の能力が使えるのか？」

春生はあっけに取られたように言っても、その目は諦めていない。

それを見たアレックスの脳裏にはマンハッタンの自分が思い浮かび、彼女がしている何かを風紀委員が追っているのだと判断した。それと同時にその何かについて知るのは吸収ではなく、彼女の口から聞きたいと思ってしまった。

「幻想御手だったか……………それで何をやる気だ？」

「私の目的には膨大な演算能力を持つ物が必要、とだけ言っておこう」

春生は真意を話す気は無いのか、突っぱねるように言う。

膨大な演算能力が必要だが、強力な力とは言わない。つまり、研究員である彼女の目的はシミュレーション関係であり、複数の能力を使えるのはただの副産物。もしくは、あり得ないだろうが生まれつきだと、アレックスは考えた。

そして、能力を複数使うためにアレックスが行っているのは、他者の脳を自分に接続すること。

アレックスは先ほどの共感性の事から推測し、幻想御手を用いて脳に影響を与え、脳波を操っているのではないかと考えた。涙子の昏睡はそれによる副作用だろう。

「……………とんでもない事を考えたな。尊敬するぜ」

その発想に驚かされたアレックスは、思わず呟いた。

「記憶を……………!?」

春生はアレックスの能力を複数使用する行動や、無表情での先ほどの呟きから何を勘違いしたようだ。

アレックスは好都合だと思い、彼女を取り入れるための賭けを行う言葉を言った。

「ああ、少しだけだが観させてもらった。そうだな……………いくら能力があるとはいえ、警備員から逃げ切るのは骨だろ、力を貸してやる」

七月二十四日 part2 (後書き)

誤字や矛盾がある気がする

七月二十四日 part3 (前書き)

こちらの方が書き終わったので取り合えず投稿

七月二十四日 part 3

春生の運転する黄色いスポーツカーには、彼女の他に気絶した飾を膝に乗せた大人版アレックスが乗っている。

他に車のいない道路を延々と走っていると、不意に飾の目蓋がピクリと動いた。

「おっと」

アレックスは彼女が目覚めると思い、適当に容姿を組み合わせて作った日本人に擬態する。

普段よりほんの少し時間はかかったが、あつという間に何の特徴もない、女性の研究員に早変わりした。

「性別や容姿も自由か。何でもありだな、君は」

運転しながらそれを横目で見た春生は、呆れた様子で呟いた。

「それを言えた口かよ。ところで、さっき言った内容は俺がこいつに言えばいいのか？」

そうアレックスが言うと、春生は少し笑ってから言った。

「ああ、頼むよ。君の方が説得は得意だろう」

春生は一呼吸置くと、言葉を続けた。

「それにしても、君に掴まれたときは驚いたよ。体温は、かなり高いようだな」

それを聞いたアレックスは、自身の手を見つめながら言った。

「測ったことは無いが、五十近くはあるかもな」

アレックスはエリザベスを調査した人間なら知っていると思ったが、一々思い起こすのも面倒なので推測を言った。

「君は何だ？」

「逃げ切ったら教えるかもな」

春生の問いに、アレックスは彼女から受け取った拳銃を返しながら答えた。

暫しの沈黙の後、アレックスは不意に口を開いた。

「もし仮にだ、人を殺したらどうする？」

その問いに春生は不意を突かれたような顔をしたが、すぐに答えた。

「後悔するだろうな。どんな相手にしろ、誰かの人生を潰してしま
うからな」

それを聞いたアレックスの表情は、俯いているため見えない。
締めるように、春生は言った。

「もし、大切な者を殺してしまったら、私は死ぬかもしれないな」

その声を聞いたアレックスが春生の表情を見ると、自分が妹を助

けようとした時と同じ顔をしていた。

「春生、まさか」

アレックスが何かを言おうとした途端、彼（？）の膝の上の飾が目を開けた。

「ここは……？」

アレックスは反射的に黙ると、吸収した女性の中から適当な口調を探した。

「気が付いたか？」

その間に、春生は飾に話しかける。
飾は目をぱちくりさせると、春生へと視線を集中させた。

「木山先生！ いったい、どうして!？」

しかし、春生は運転中だと言わんばかりに黙っているが、アレックスをチラチラと見ている。説明をしてやれ、ということらしい。

「初春飾ちゃんだっけ？」

アレックスがそう言うと、飾は自分が膝の上にいるのに気付き、慌て出した。

「え!？ 何で私!？ それにあなたは誰」

「落ち着きなさい」

アレックスはそれを咎めると、こう続けた。

「私たちは 敷いて言うなら、木山先生がある人たちを助けたかったのよ」

それを聞いて黙る飾に、アレックスは続ける。

「助けるためには、膨大な演算が必要な。でも、樹系図の設計者の設計者の使用許可は、理由を言っても降りなかった」

飾は首を横に振った。

「だから、AIM拡散力場を媒介としてネットワークを構築し、複数の脳に処理を割り振ることで高度な演算装置とした」

それを聞いた飾の顔が青ざめる。そして、恐る恐るといった様子で、口を開いた。

「それが、幻想御手ですか」

「そういう事だ」

そうアレックスが答えると、飾はうつ向いて悩み始めてしまった。先程言われた内容を整理しているのだろう。

暫しの間車内に沈黙が訪れたが、その沈黙はアレックスによって破られた。

「あなたが悩む必要は無いわ。幻想御手で脳に後遺症を負うなんて

事は無い。それに」

アレックスがそう言った瞬間、車内のオーディオ機器がある筈の場所に収まった機械から警報のような物が鳴った。

「警備員め、もう来たのか？」

木山はそう言いながら飾に、MP3プレイヤーと小型のデータチップを手渡した。

「幻想御手をアンインストールする物だ。彼女も言った通り、誰も犠牲にはならない」

「信用できません。臨床研究が十分でないものを安全だと言われても、気休めにもならないじゃないですか！」

膝の上で大声を上げる飾を、アレックスは鬱陶しく思った

「いいのか？研究所のデータは、警備員の突入と共に消えた。これしか幻想御手に関する物は残っていない」

飾の顔が、驚愕の色に染まる。

「大切にしまえ」

アレックスはそう言うと、シートベルトを外して窓を開けた。

「どうしたんだ？」

春生が訝しげに訪ねると、アレックスはしかめっ面をしながら言った。

「正面で警備員が道を塞いでるのよ。ちょっと退いてもらおうわ」

そして、器用に飾を膝からどかせて助手席に座らせると、アレックスは窓から屋根の上に登った。

「まったく、女の話し方は疲れるな」

アレックスはそう呟くと、ステイルから吸収した炎、その分子振動のエネルギー残量に脳内で単位を付けた。

「警備員と風紀委員を相手に足りるかどうか、博打だな」

予想できる相手戦力を元に配分を考えた頃には、真っ直ぐに伸びる道路を横に塞ぐ武装した警備員と、警備ロボの目と鼻の先まで進んでいた。

「死人は出さないでくれ」

そこで停車させた春生は警備員の投降を促す警告を無視し、窓を開けてアレックスに言った。

「分かってる」

そうアレックスは言うつと、車の屋根がへこむのもお構い無しに警備員に向かって突進した。

警備員までは約二十五メートル。

アレックスが空中で加速した場合のコンマ二秒ほどの瞬間最高速度

は、毎秒三十九メートル。それに達するのは早く、コンマ一秒ほど。つまり、一秒もかからない。

「ッハア！！」

アレックスはそのまま警備員が道を塞いでいる四台の車両の中心、六台の間に轟音を立てて着地する。

体重を十数トンにまで増加させた事と、着地寸前に加速した影響により、コンクリートと共に両側の車が地雷に巻き込まれたように宙を舞った。

「な、何が……………！？」

仲間が二、三名吹き飛ばされたのに臆しながらも、警備員のリーダーらしき男が狼狽えている。しかし、動揺してほとんどがアサルトライフルを降ろしてしまい、リーダーしか銃を向けているのではアレックスの方が早い。

アレックスは視線から体を右にずらしたままリーダーに接近し、一瞬で地面に倒すと同時に銃を奪い取った。

「は……………！？」

驚いた表情のまま地面に仰向けになった男は衝撃で肺から空気が一気に抜け、ブラックアウトする寸前に聞き慣れた銃声を立て続けに聞いた。

男は何が起こったか分からなかったが、同僚がアレックスか春生の乗る車を撃つたのだと思った。

しかし、その期待が大きく外れたことを知るのは、病院で目覚めてからである。

「春生、終わったわよ」

アレックスは再び車に戻ると、飾を器用に膝に乗せて助手席に座った。

「……………何でもできるんだな、君は」

春生はそう言いながら車を発進させ、
脛すねと肘から出血している
警備員を避けながら先へ進んだ。

そのまま暫くは追っ手もいず、順調に車を走らせていた。

「今すぐ車を止めて」

しかし、不意にアレックスは春生に車を止めさせる。

「どうかしたか？」

そのまま無言で車を降りたアレックスに、春生は訝しげに尋ねた。
その声に反応したようにアレックスは飾を見ると、口調も忘れて
忌々しそくに言った。

「ああ、そうだったな。お前はあいつと友人だったな」

「え？」

その口調か言葉にか、飾は理解できない事を表す。

「春生、レベル5がいる。御坂美琴だ」

「……………なら、あの方法か」

アレックスに続くように春生は車を出て、トランクに向かう。アレックスは飾が出てこないようにドアを閉めると、それに続いた。

飾は後部のガラスからそれを伺っていると、不意にアレックスがポケットに手を突っ込んだ。

「」

「」

飾は二人が話しているのをじっと見ていたが、開かれたトランクに視界が遮られる。そして、トランクを閉じたアレックスの手を見て顔を青ざめた。

拳銃。なぜ研究員らしきアレックスがそれを持っているのか理解できなかったが、更に驚くべき行動をアレックスは行った。

「そんな!？」

腰だめに構えたそれを春生の腹に向けると、躊躇いもなく数発撃った。

崩れ落ちる春生をアレックスは受け止めると、肩に担いで高架から下の川に投げる。

「待たせたわね」

アレックスは真っ白な白衣をなびかせる事もなく、車のドアを開けて飾を追い出す。そして、飾の責めるような視線を物ともせず、的確な狙いで放たれた高速で飛来する小さな物体を右腕で受け止める。

「アンタ……………!!」

電気で身体能力を上げたのが、前方にいた美琴に五十メートル程まで近づかれていた。

アレックスはその親の仇でも見るような視線を無視し、車のドアを車体と分離させる。

「何で木山先生を殺したのよ!？」

アレックスはそれを大きく振りかぶると、美琴に投げ付けた。

しかし、美琴が何かをした素振りが無いにも関わらず、彼女の二、三メートル前方でアレックスから見て右に大きく逸れた。

「そんなモン効くわけ」

「量子変速、いい能力ね」

次の瞬間、美琴の数メートル真横でドアが爆発した。彼女は爆煙に包まれ、その姿は視認できない。

しかし、アレックスは止まらずに今度は車を空気の刃でバラバラ切断し、それを念動力で真上に射出する。それは鳩に投げられたエサのように、間隔を空けながらアレックスの周りに散らばり、着弾

と共にコンクリートを抉りながら一斉に起爆する。

比較的大きな破片もあったため、橋の一部は噴煙と共に河の中へと崩れ落ちた。

七月二十五日 part 1

明朝、アレックスは寝袋を肩に担ぎながら早足で寮の自室に入ると、テキパキと戸締まりをした。

「……………もうこんな時間か」

アレックスはそう言いながら、寝袋をベットに降ろした。

「今から開けるが、静かにしてくれよ」

そのジッパーを開けると、真っ白な白衣が見えた。

一定のリズムで上下を繰り返してはいるものの、起き上がる様子はない。

「寝てるか」

時刻は午前四時半。日の出まで、あと三十分はある。

だが、アレックスは飾に姿を見られたため、いつこの部屋に風紀委員や警備員が乗り込んでくるか分からない。

何せ、彼女は誘拐にあつたにも関わらず、彼は現場から姿を消したのだ。関係者だと推測するのが、普通の思考だろう。

「余裕が無いな……………」

崩落を利用して川に飛び込んだ後は、先に落とした春生と合流。

その後は、昏睡状態にある彼女の教え子達を、学園都市でも腕が飛び抜けているというカエル顔の医師に任せた。春生は幻想御手を知られる恐れからか、彼には任せていなかったようだ。しかし、腕が

良いのにあまり偉くない医者は、巨大な病院にいる医者よりアテになる。

ちなみに、春生を川に落とす前にアレックスが撃った銃弾は、念動力で空気の原子同士を固めて作った防弾プレートによって、直撃していない。落とした後は、幻想御手による能力で彼女自身で何とかしてくれたのが、アレックスには楽でよかった。

美琴に対してアレックスが行った量子加速は、春生の体細胞から脳波を擬態させた結果の産物と言える。その事をふと思い浮かべらアレックスの脳裏に、美琴のクローンの同一のAIM拡散力場を利用した電磁的ネットワークがよぎった。

「元はそれか……。いや、発想の元が同じだけか？」

この事については後で聞くことに決め、アレックスは警備員が来た場合に備えて春生を隠す準備を始めた。

「ごめんくださいー」

八時四十七分。

当麻からの、インデックスが完治したという内容のメールを見たアレックスは、来客の声とチャイムを聞いて思わず舌打ちした。

初春飾、風紀委員だ。恐らくは、警備員が荒事に慣れた同僚も一緒もいると、アレックスは予想した。

「飾か？」

アレックスが電磁波によるレーダーを広げながらドアを開けると、
気まずそうな飾の後ろには額に包帯を巻いた黄泉川愛穂がいた。

「アレックス！調子はどうじゃん？」

「黄泉川？」

アレックスの愛穂に対する評価は、『破天荒』。

先日には、アレックスが笑わないので頬つぺたを引っ張るといっ、
クロス大尉もびっくりな暴拳に出た教師である。

「朝から何の用だ」

「言われなくても、分かるじゃん？」

そして、ヘルメットや暴徒鎮圧用の盾で、レベル3を捕縛したと
いう噂もある警備員でもある。

「……………まあ、入れよ」

アレックスは二人を招き入れ、その際に愛穂の視線が窓に動いた
のを確認した。

「水しか置いてないが」

アレックスは冷蔵庫から、五百ミリのペットボトルを二人に出し
た。

「エアコン点かないじゃん」

「何？」

アレックスは愛穂からリモコンを奪い、エアコンのボタンをカチカチと押すが反応は無い。

無断でエアコンを点けようとした行為については、アレックスは何も言わないことにした。

「故障か」

アレックスは使った覚えがないが、前の住人が使いすぎたのだと判断した。

「仕方ないじゃんよ。さて、如何わしいものを持ってないか、抜き打ち捜索じゃん！」

アレックスは愛穂の突拍子もない行動に呆れながらも、共犯者と自分を疑いつつも学校と同じ様子の彼女に感心した。

彼女は、アレックスが犯人だと心からは思っていないから、こんな風に振る舞えるのだろう。

「勝手にしろ」

そう言うと、アレックスはベッドに腰を掛ける。

どうやら、これから行われる事には、傍観に徹するようだ。

「入っていいじゃんよ！」

愛穂がそう玄関に呼び掛けると、突入用の装備で整えられた警備員がゾロゾロと入ってきた。

「……………何する気だ？」

「細かいことは気にしちやいけないじゃん」

愛穂は愉快そうに笑うと、彼らと共に家宅捜索を始めた。

タンスからも机からも、絨毯の下からも、何一つ不審な物は発見されなかった。

不審な物と言っても、事件に関連する物だが。

「アレックスもこんなの買っくんじゃんね」

ケラケラと笑う愛穂の目の前には、アレな本が二、三冊並べられている。

発見されてからというもの、アレックスは無言である。

「アレックスさん……………」

飾は時折、独り言の様なものを呟くようになったが。

「まあ、これで捜索は終わりじゃん。ちゃんと宿題やるじゃんよ」

そう愛穂が言うと、まるで台風のように去る警備員。

玄関のドアが閉められる直前、その隙間から飾が顔を出した。

「佐天さんが意識を取り戻したので、よかったらお見舞いに来てあげて下さいー！」

それを聞いたアレックスは、ドアを閉めながら言った。

「いや、遠慮しておく。二人仲良く、買い物でもしてろ」

戸惑うような飾の音が聞こえたが、アレックスは聞こえていないようにボタンと閉めた。

足音が遠ざかったのを確認すると、大きなため息を吐いた。そして、本に触れて当麻の部屋に空間移動で送り、自身もそこへ空間移動した。

「春生、終わったぞ」

アレックスの正面には、エアコンが点かないからか上着を脱いだ春生がいた。

「遅かったじゃないか。ここは暑すぎる」

「部屋でなら、念動力で気温調整できる。戻るぞ」

アレックスはあまり興味を示すことなく、問答無用で自室に彼女を送る。もちろん、脱いだ上着を持たせるのは忘れていない。

アレックスは学生らしい部屋をぐるりと見渡すと、羨ましく思いながら自室に飛んだ。

「なあ、アレックス」

「何だ？」

戻った途端に春生に話しかけられたので、室温を調整する演算を

考えながら答える。

「君は、ああいう物は持ってないのか？」

上着を着ながら言う春生に、アレックスは淡々と言った。

「人間じゃないからな。三大欲求も食欲だけだ」

アレックスは室温を一定まで引き下げると共に、点検のためにエアコンのカバーを外す。

「私には君が人間に見えるが、違うのか？」

「見た目は、これが基本というだけだ。それに、この体温なら、脳細胞が死滅するのが普通だ」

エアコンの回路自体が高電圧に焼き切られていたため、アレックスは思わず舌打ちをする。

「家族は？」

巻き込まないようアメリカに残した妹の姿が、アレックスの脳裏を過った。

あの後、当面の生活費と新しい住居を、様々な方法で渡した。しかし、自分がアレックス・マーサーではなく、それに擬態したウィルスと知ったからには、妹と意思いつつも、そう言うことはできないと考えた。

最も、元気がどうか、気になりはするが。

「いない。ただの、化け物だ」

アレックスはそう言うと、春生が返答するより早く、新しいのを買ってくると言い残して部屋を出た。

時刻は正午、アレックスは両肩にエアコンと冷蔵庫、二の腕に通すように食料品を含めた生活用品が入った袋という、誰もが振り返るような荷物を持ち方をしている。もちろん、安定のために念動力も使用しているが、浮かせる訳にもいかないなのでこの形となった。ちなみに、全ての費用は能力者に支給される、補助金から捻出された。

しかし、こんな所を人が見た場合、知り合いなら話しかけるのが普通の反応である。

「何やってるのよ？」

アレックスがあまり会いたくなかった相手、淡希が声をかけてきた。

「買い物だ」

振り返ったアレックスは、春生の事を悟られるわけにもいかないので、淡々と返す。

すると、アレックスの持つ生活用品を見た淡希が、訝しげな顔をした。

「普通のご飯も食べれるのね」

「当たり前だ」

アレックスはそう返すと、会話が広がらないように前に向き直って歩き始めた。

「少し、下準備が必要な用事がある。じゃあな」

普段と変わらぬペースで歩きながら周りの視線を惹いているが、それを意に介さず歩き続ける。その背後を、なぜか淡希が無言で付いて行く。右へ曲がれば追うように、左へ曲がっても同じように。しばらく寮に向かって歩いた後、アレックスは立ち止まった。

「なぜ付いて来る？」

「料理できるのかしら、っと思っただけよ」

そう淡希が言った途端、アレックスは盛大にため息を吐いた。

「人並み以上には作れる」

「……言うわね」

アレックスが取り込んだのは軍人や感染者だけでなく、街中で戦闘した際には一般人も取り込んだ。ど

うやら、その中には料理人志望や、趣味にしている人も取り込んだようでかなり腕はいい。

もっとも、あまり作らないのは事実だが。

「そういう事だ」

アレックスはそう言うと、自身の聴覚を無くして寮に向かった。もつとも、深刻な顔をしながら後を追う、淡希の存在は変わらないが。

アレックスは寮に着くと七階まで跳び、エアコンと冷蔵庫をそれぞれ空間移動で自室に押し込む。そして、淡希が入れないように素早く鍵を掛けた後、念動力でガチガチに固める。

アレックスは何度か淡希に座標移動で送ってもらった事はあったが、彼女自身が移動した事は一度もないのを見ていた。そのため、彼女は何等かの理由で、自身を座標移動で送る事はできないという仮説を立てていた。

「どうしたんだ？」

「いや、ちょっと嫌なのがな」

その動作に疑問を抱いた春生を、アレックスは白を切るように言った。

そして、アレックスがエアコン、冷蔵庫の設置を終えた頃、誰もいないはずの風呂場に、何か落ちる音がした。

「春生、そこにいる」

アレックスは予想を付けながら風呂場のドアを開けると、口を押さえてうずくまる淡希がいた。

「……………何か飲むか？」

「ええ、もらっわ……………」

体に負担が掛かりながらも侵入する執念に、アレックスは軽く引いた。

アレックスは新しい冷蔵庫に移したペットボトルを、念動力で冷やして渡す。

ちなみに、腐っているであろう生肉は、アレックスが握って吸収した。口からは、さすがに躊躇われた様だ。

「ありがとう、楽になったわ」

半分ほど飲んだ後、淡希は大きく息を吐き出してから言った。

「座標移動は負荷が大きいのか？」

自分を送っただけでああなるのは、明らかに異常だ。理由にも心当たりが無かったので、アレックスは淡希に尋ねる。

「いえ、演算が複雑な事を除けば、負荷が大きい能力じゃないわ。少し、実験でへまをした事があって、それが原因よ」

実験のへまと聞いて、体の一部、若しくは全身を何かの中に送ってしまったのだと予想した。

「トラウマか」

「まあ、そんなところね」

淡希はそう言うと、浴室を出ようとするが、アレックスが前に立

ち塞がる。

「土足じゃ無いわよ？入る前に、玄関に送ったわ」

「ご丁寧に、玄関に送ってあるようだ。しかし、統括理事長の部下である彼女を、春生のいる場所へ通すわけにはいかない。

春生の事は、既に気付かれている可能性が高いのは、アレックスも知っている。しかし、万が一にも知られていない可能性があるのなら、知らせないのが得策だ。

「靴なら持ってきて

」

そう言ったアレックスの視界に映る景色が、一瞬で浴室から青空に変わった。いい風の吹く、七階ほどの高さだ。

アレックスは座標移動で飛ばされたと理解すると、表情を歪ませながら奥歯を噛み締めた。

「あのアマ……………！」

荒々しく着地したアレックスは方角を確認すると、足元が砕けるのもお構い無しに走り出した。

七月二十五日 part 1 (後書き)

Prototype 2の発売日が決まりましたね。

ジェームスVSアレックス が次回のテーマの様ですが、アレックスさんはジェームスさんみたいな事は出来るんですかね？

無印のパッケージ裏には何にでもなれる、といった様なことが書いてありましたか

アレックスは寮に辿り着くと、自室には鍵を掛けたのでドアを思い切り引つ張って歪ませながら開ける。空間移動で入らないのは、出た後の隙が大きいからだ。

座標移動は、極めて強力な能力だ。幻想御手が中和された今、春生に淡希への対抗手段は無いだろう。

「春生！」

汚れた足のまま室内に駆け込んだアレックスが見たのは、コンロに温められるフライパンを談笑しながら待つ、春生と淡希だった。

「煩いわよ、アレックス。静かに入れないの？」

「ドアを壊さなくても、空間移動があつただらうに」

アレックスは、どうして二人が並んでいるのかが、不思議でしよ
うがなかった。

見たところ、料理をしようとしているのはアレックスにも分かつたが、淡希がムキになっていた以外に、関連する事があるとは思えない。

「彼女が君に料理を教わると言うから、少し準備をしていたんだ。私も期待するぞ」

アレックスには、春生がクスリと笑ったような気がした。彼自身は、仏教面をしているが。

「そうよね、アレックス！」

そして、脂汗か冷や汗をかく、その表情を見て焦った様子の淡希。何処と無く必死である。

この様子では、統括理事長に報告しないだろうと判断したアレックスは、春生に負担を掛けないためにも、嫌々この流れに乗ることにした。

「……………明日と聞いていたから、驚いてな」

それを聞いた淡希の顔色が、すっと明るくなる。アレックスはそれを確認すると、淡希の肩を掴んだ。

「春生、悪いがこいつと二人きりでやりたいんだ。……………察してくれ」

淡希がパントマイムの達人のように固まるが、アレックスはなるべく春生が見れないように、手を離して彼女たちの間に入る。

「テレビは無事だった様だから、それでも見ててくれ」

アレックスは春生を離れた位置に追いやると、淡希の肩を抱くように掴んでダイニングキッチンの奥に引きずり込む。

「淡希、俺が何を言いたいか、賢いお前なら解るよな？」

春生に会話が聞こえないよう、アレックスは居間との間を念動力で遮断する。たとえ中で発砲しようが、外には聞こえないだろう。

「アレイスターには言わないわ。私に利益が無いでしょう？」

「信用できると思うか？」

アレックスにはアレイスターという名前に聞き覚えは無かったが、統括理事長の名前だと察した。

「確かに私は案内人をしてる。けど、優先するのは、私の利益。あいつに魂売った訳じゃないわ」

淡希は呆れたように言うが、アレックスには彼女の動悸が激しくなっているのが分かる。恐怖を感じているが、嘘を言っではない。それを確認したアレックスは、肩に回っていた手を離れた。

「春生、昼は何かいい？米は買ってないが」

「ん？そうだな……。パスタ系で頼む」

テレビを見ていた春生は少し悩むと、あまり拘りが無さそうに言う。

「分かった」

アレックスも意外に好きなのか、それを快く受け入れた。

彼が尋問を止めたことに淡希は驚いたようだが、彼がなぜ止めたか予想するため息をつく。そして、春生に聞こえないよう、声を潜めて言った。

「まるで嘘発見器ね」

「翻訳機能もある、優れものだ」

アレックスはそう言うと、麺を茹でるために水を入れた鍋を火にかけた。

「翻訳って、何か国語？三か四？」

淡希が野菜を洗いながら聞く。それに、アレックスは缶詰のトマトの蓋を、爪で切りながら答えた。

「七十ヶ国語だ」

ゴトンと、流しに玉ねぎが転がった。

「何だ？以前、ギネスには五十九ヶ国語が、最高記録で乗ってた。今じゃ、項目事態が無いがな。それ、洗い直せよ」

アレックスはフライパンを火にかけると、淡希の洗った玉ねぎをまな板に置いた。しかし、包丁を石像のように固まる淡希に差し出す。

「練習だろ？だったらやってくれ。アレイスター絡みで、午後から用事がある」

アレックスはミサカネットワークに接続し、実験のスケジュールを脳に刻んだ。昨日はあの後行かなかったので、文句を言われるだろうと当たりを付けながら。

「淡希、泊まってもいいから、春生を頼む」

「え、ええ。でも泊まりは……………」

渋る淡希に、アレックスは舌打ちする。

「春生に何かあれば、学園都市に変わったスペイン風邪を流行らせるからな」

アレックスはそう言うと、料理に使わない物を片付けて玄関に向かう。そこで一旦立ち止まると、春生に言った。

「深夜か、明日の朝には帰る。誰か来ても、出なくていいからな」

「ああ、分かった。気を付けてくれ」

春生は普通の用事ではないと察したのか、すんなりと了承する。それを確認すると、アレックスは駆け足で玄関を出た。

その急に思い出したような慌ただしい行動に、淡希は思わずため息を吐いた。彼の言った『変わったスペイン風邪』に、底知れぬ恐怖を感じながら。

「ああ？もう終わりか？」

午後十時。開始二分二十六秒で、本日七回目の実験が終わった。

実験機材である美琴のクローン シスターズ 妹達は、臓物と肉が混じったスプラッタ死体と成り果てていた。能力で加速した一方通行に、何度

も蹴られたのが原因だろう。そして、その傍に佇むアレックスの機嫌は、かなりというより極めて悪い。

「おい、一方通行。片付けるヤツは俺だって、分かっけて嫌がらせしてるのか？」

本日の他の六回の実験でも、一方通行はその手の職に就く人すら、目を背けるような死体をわざわざ作っている。コーラの空き瓶を捨てるだけでは飽き足らず、踏み砕く様なものだ。明らかにやりすぎである。

「ああ？オマエはこれが仕事だろ、いつつも一瞬で消してるじゃねえか」

「飴玉拾うのに、掃除機使う身にもなれ。いくらなんでも、毎回これだと面倒だ」

そう言うアレックスの足元に、妹達だった肉片が集まりつつある。そして、ズボンや靴に触れた部分は、溶け込むように消えていく。靴もズボンも、アレックスの細胞だ。

「わアったよ。ミンチはやめて、両断にでもしてヤンよ」

一方通行はそれを見ると、ケラケラと笑いながらその場を離れ始める。アレックスは妹達から、一方通行は実験が終わり次第、さっさと帰るといっているのを知っていた。

だが、それでは張り合いが無いと、アレックスは考えた。本心は、神裂達と約束した時刻までの、時間潰しに丁度いいと思ったからだが。

「おい、一方通行。飯、食いに行かないか？」

時間的にも妥当である。

「ンア？別に構わねエが。ファミレスぐらしか、この辺りにはねエぞ？」

「食べたらどこでもいい、とにかく腹が減った。それにしても、普段は何食ってるんだ？いや、ベジタリアンって思った訳じゃ無くな」

アレックスは演技とはいえ、二人を知るものからすればあり得ない、他愛もない会話をしながらファミレスに向かった。

スキルアウトと呼ばれる、言わばチンピラ数人しかいないガラガラファミレスに、アレックス達は入った。

アレックスは、門限のある学校の学生が殆どのこの都市で、ファミレスが夜でも開いていることに疑問を感じた。人件費などの採算は取れないだろうに。

「お待たせしました。コーヒーと、ステーキセットになります。以上でご注文はお揃いでしょうか？」

前者が一方通行、後者がアレックスである。

「いい加減に吐け、オマエはどうやって妹達の処理をしてんだ？」

一方通行は人の耳になるタイプではないことは、誰にでも予想が

つく。だが、アレックスが話す気になるのとは、別である。

「俺はお前を信用してない。言わせたきゃ、信用されるような事をしろよ」

「ああ？俺アオマエに教えてくれって、頼んでんじゃアねエンだよ。言えって言ってんだ」

机の下で、一方通行の足がアレックスに触れる。

「もっと、マシな脅し方をしろよ」

また血液逆流かと、アレックスはため息を交えて呆れる。だが、ここで破裂も不味いので、倒れないように床にしっかりと固定し、膝を区切りに切り離す。

しかし、何もなかった時に戻せるよう、再生はしない。

「ハッ！後悔すんじゃねエぞ！」

一方通行は足に何かをしたようだが、アレックスに繋がっているわけではないので意味が無い。アレックスは気付かないふりをして、黙々と肉を咀嚼する。

アレックスとて、人肉ばかり食べていれば気が滅入ってしまう。なので、この口直しだ。

「……………アア？」

手応えを感じられない一方通行が、間の抜けた声を出す。それを見たアレックスは、仕方なさそうに言った。

「じゃ、お前は自分の能力を話し、俺も能力を話す。もちろん、お互いに他言は無用。公平だろ？」

このタイミングなら、一方通行の能力の全容を知れると思い、アレックスはこう持ちかける。はっきり言うと、一方通行がしつこすぎで折れたのだ。

それを聞いた一方通行は、コーヒーを一気に煽る。

「イイねイイね最っ高だね！」

ファミレスの中にも関わらず、一方通行が大声をあげる。その傍若無人さに、アレックスはフードを深く被る。

学園都市第一位とファミレスに行っているのを見つかれば、確実にスキルアウトにマークされるだろう。もちろん、不登校を生かして昼夜問わず。

「……………四面か」

アレックスは念動力の壁を座席ボックスの周りに作り、音が漏れないようにする。まあ、反射する事になり、内部は煩くなるが。

「ハッ！コイツは念動力か！？面白エ！」

一人で盛り上がる一方通行に、アレックスはサイコ野郎という評価を付けた。

「今から説明する。そうだな……………まずは、俺の成り立ちからだ
が……………」

一時間ほど経った頃には、お互いの説明を終えていた。アレックスには一方通行は交遊関係が乏しいということが、安易に予想できた。そのため、自分の体であるBlacklightウィルスウィルスの成り立ちだけは、ほとんど話したのである。

「それにしても、ベクトル操作とは厄介な能力だ。その上、お前の自分自身の現実パーソナルリアリティーの中じゃ、ありとあらゆる物にベクトルがある、か……………ある意味馬鹿だな」

「……………まア、そういう事だけだよ、オマエも大概だろうが。そんなSFみてエな、科学の通用しないオモシロ生物。ここ《学園都市》でも知られてねエンだろオな」

一方通行は、Blacklightウィルスを「オモシロ生物」とせせら笑う。反射ができるからこそその、余裕だろう。そして、両者ともお互いの能力や成り立ちに、ケラケラと笑うしかなかった。声と共に、背後から鉄パイプで後頭部を一撃。アレックスが前のめりになる。

それを皮切りに、入り組んだ裏路地の中からウジャウジャと、その仲間が湧いてくる。彼らは皆一様に武器を持ち、中には軍隊で使うようなナイフを持つものもいる。彼らの装備も、アレックスが能力者と分かったからだろう。

「今だ、やっちまえ！」

前方の一人がスタンガンを突き出しながら、アレックスに突っ込む。その場にいる全員が、楽勝じゃないかと笑った。

そのスタンガンを持った一人と、鉄パイプを持った一人が、汚い路地裏で崩れ落ちたにも関わらず。

「　　なんだよ、能力者はいねえのか」

アレックスの足元から黒い茨が伸び、裏路地の中に入り不能の檻を作る。

「テメエ！」

髪を金色に染めた一人がナイフをアレックスの腹に突き立てるが、アレックスに機械的な動きで両肩を掴まれ、一気に引き寄せられる。その勢いで顔からアレックスの胸に飛び込むと、沼から蛇が飛び出すように鉤爪の付いた触手に絡まれ、アレックスの中に沈んでいく。

「ひっ！？バケ　　」

言いきる前に、アレックスは太極拳の様に両手を、前に一瞬で突き出す。それにより、アレックスの前方の空気が轟音を立てて、裏路地を掻き回した。

「スキルアウトはレベル0ばかりか……。割りに合わないな」

茨は地面に四肢を投げ出して転がるスキルアウトを吸収しながら、アレックスの元へと一斉に巻き戻り、路地から肉片を取り除くとアレックスの体へと消えた。

そして、電磁波レーダーに人がいないのを確認すると、反動で地面が砕けるほど勢いよく跳び上がった。

小萌の住むアパートにたどり着いたアレックスは、ちゃぶ台を囲んで、当麻と魔術師達。そして、インデックスと話し合っていた。インデックスが参加しているのは、自分の症状は知った方が良いという、アレックスの判断である。

「状況を詳しく言うと、インデックスの口内には、お前達も見たこともない魔術が仕掛けられている。当麻の右手で破壊しようにも、恐らく何らかの防衛魔術が働く。その際、最悪の場合と言うよりは十中八九だが、敵を排除するために、魔導書による攻撃が行われる。それを封じるには、インデックスに。もしくは、再び口内の魔術へ、当麻が触れる必要がある………………。こんなところか」

アレックスの言葉からは、場合によっては学園都市が大きな被害に見舞われる可能性が大きいことが分かる。それを聞いたステイルが、前歯でタバコを噛みながら言う。

「まったく、最大主教もやってくれるね……………」

火織に関しては、ステイルの様に行動には表さないが、かなり怒らないと出ない雰囲気が出ている。分かりやすく言うと、angryではなくmadだ。

「これは、当麻が触れる以外に俺達には手段が無い上、イギリス清教に言ったところで取り合いすらしないだろうな」

アレックスがこう言った時、この場の面々は理解していた。これからやる事はひどく目立つ上、下手をすれば魔術側に攻撃されたと

学園都市側に言われた魔術側が、協力してこの面々を消す可能性もある。

「この場のほとんどが、そうやって悩む中、インデックスが口を開いた。」

「……………もういいんだよ。私を助けて大事になるのなら、私は今まで通りでいいよ」

彼女は続ける。

「それなら、当麻もアレックスも今まで通り過ごせるし、ステイルも神裂も、何かされる恐れもない。なら、このままが良いよ」

アレックスは、この赤毛の神父とは大違いの、正に聖職者といった考えに頭を抱えた。ステイルも火織も何かを言おうとした途端、当麻が声を荒げた。

「ふざけんじゃねえよ！」

インデックスの肩が、ビクリと跳ねる。

「そのままが良いだ？そんなんじゃ、何にも変わんねえだろ！こいつらはどうする！？またお前の記憶を消すことに罪悪感を感じながら、お前を追い回す日々を繰り返させて言うのかよ！！」

そう、ステイルを指差しながら言う。

「それに、俺達だってそうだ！そうなってるって、『今でもあの魔術師達はお前を追い回してるんだな』って、そう思いながら暮らさせて言うのかよ！？」

俺は思わないだろうなと、アレックスは思った。

「それが嫌なら、自分達の事しか考えないお偉いさんより！自分が幸せになって、周りも幸せになる、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高に最っ高な ハッピーエンド 幸福な結末にしようじゃねえか！！」

そう当麻が言い切ると、タバコを灰皿に押しつけながらステイルが言った。

「上からの処分なんてどうでもいい。僕は、ただ信念に従った事をやるだけさ」

「私もです。いざとなったら、イギリス清教から離反も躊躇いませんよ」

火織もそれに続く。

「手を握れよインデックス。払い除けてたら、救いも無い」

アレックスはそう言うと、居心地が悪そうに台から離れて壁にもたれた。

「……………ありがとう」

インデックスは、ボロボロと泣き出した。先程までの聖職者と違い、年相応の子供の泣き顔だ。

「さあ、場所を移すか。この場所じゃ、小萌が怒るだろうな」

第七学区にある、過去にレベル6シフト計画でも使われた、監視カメラも人の目もない廃工場。その倉庫で、インデックスから十メートルほど離れて全員が集まっていた。

「ルーンの設置と、人払いも終わったよ」

先程から紙を投げていたステイルが、突然手を止めて言う。

「じゃあ、始めようぜ」

当麻はそう言うと、目を瞑って口を開けるインデックスに向き直り、その口内の魔術に右の指先で触れた。

「がっ……!?!?」

当麻の右手がまるで反射でもされたように、後方に勢い良く弾かれる。

「予想通りだな」

そう言うアレックスの視線は弾き飛ばされた当麻ではなく、碧眼が真っ赤に染まったインデックスに向いていた。その赤さも、眼球の中に浮かぶ魔方陣の赤さだ。

オマケに、まるで暴風のような何かが、彼女から吹き出している。これでは、急いで体勢を立て直した当麻も近寄れない。

「警告。第三章第二説。Index-Librorum-Prohibitorum
インデックス
禁書目録の『首輪』、第一から第三ま

で全結界の貫通を確認。再生準備……失敗」

脳を圧迫していた魔術の破壊には、成功した。しかし、アレックスの懸念は的中のようだ。

「『首輪』の自己再生は不可能、現状、十万三千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

そう言うインデックスの眼が、アレックスには理性の無い感染者の眼と重なった。

「いいかい。殆どの魔術は、次の魔術の発動までのインターバルがある。発動したら、モタモタするなよ」

ステイルは当麻に言う。

「『書庫』内の十万三千冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術（リカルウエゴン）を組み上げます」

糸繰り人形のように、インデックスは小さく首を曲げて。

「侵入者個人に対して、最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します」

鉄筋が折れたような凄まじい音を立てて、インデックスの両目にある二つの魔方陣が一気に拡大した。インデックスの顔の前には、直径二メートル強の魔方陣が二つ、重なるように配置される。それらは左右交互の眼球に中心が固定されているようで、インデックスが軽く首を動かすと、空中に浮かぶ魔方陣も同様に動く。

「……………一方通行がチンケに見えるな」

その光景に、アレックスは思わず呟く。

「。、」

インデックスが何か　　もはや人の頭では理解できない『何か』を歌う。もしかしたら、この場にいる魔術師には分かったかもしれないが。

瞬間、二つの魔方陣が真っ赤に輝き、真っ黒なプラズマのような物を爆発のように放った。それは二つの魔方陣の接点を中心に、ガラスが割れるヒビを入れると、四方八方へと空間を駆け巡る。

固唾を飲んで見守る中、卵が孵るように亀裂が盛り上がる。

「行け！当麻！！」

それに底知れぬ何かを見たアレックスは、当麻を追い立てる。それに弾かれたように当麻が走り出すと同時に、アレックスは地面に両手を突き刺す。

当麻が三步進んだ瞬間、卵が割れた。その中からアレックスですら寒気を覚える『何か』が覗き込み、亀裂の奥から太陽を溶かしたような純白の光の柱が、当麻に襲いかかった。

「ド、竜王の吐息ドラゴン・ブレス！！？」

誰かが叫んだ。

しかし、それを阻むように、地面から全高十メートル程のどす黒い棘が二つ、当麻の前に重なって飛び出した。たった直径一メートルほどの光の柱はそれにぶつかると、掘削機のように棘を掘り進む。

その削り屑は、純白の羽に変わって床に降り積もる。

「右だ！」

そう叫ぶアレックスの体は、土くれのようにポロポロと崩れ始めている。当麻は一瞬それに目を奪われたが、指示通りに右へ走る。

『聖ジョージの聖域』というのは探索魔術のようだが、それでも聖域だ。広義で言えば病魔であるアレックスは、『殺菌』されてしまっただろう。

「くそっ……！」

アレックスは両腕を切断し、崩れかけた足で後ろに飛び退こうとするが、脚の強度が足りずにうつ伏せに転がる。

そして、それに反応するようにインデックスの標的が変わった。

「警告。聖ジョージの聖域が、有効な侵入者を検知。追撃します」

グリンと、インデックスの首がアレックスに向き、それに遅れて竜王の吐息がインデックスの視線の先へと向く。光の柱がアレックスを右腕から飲み込む直前、火織が叫んだ。

「Salvare000！」

それと共に振るわれた七閃が、インデックスの足元を吹き飛ばす。それによって仰向けに体勢を崩したインデックスに従い、竜王の吐息は倉庫の錆び付いた天井を真っ直ぐに切り裂く。

アレックスが消えそうになる視界を何とか保ちながら後退りした頃には、真っ赤な竜王の吐息が魔女狩りの王を削っていた。だが、当麻は既に亀裂の目の前だ、その右手で破壊するだろう。もしかし

たら、壊した瞬間なのかもしれない。

しかし、当麻の耳元に、一枚の羽があった。アレックスは先ほどの竜王の吐息の向きを思い出し、彼の頭上を見る。

そこには、無数の羽が、ヒラヒラと当麻に向かって落ちる最中だった。

「と……ま………！」

アレックスは叫ぶが、既に喉もボロボロだ。囁くのすら難しいだろう。

そこで、念動力を使い、インデックスと当麻を弾き飛ばす。これで羽の雨に降られはしなかったが、耳元にあった一枚が当麻の頭に触れてしまったのが、アレックスには見えた。ステイルは見えなかっただろうが、火織には見えただろう。

それを見たアレックスは倒れ込むと、その衝撃で砂のように床に広がった。

「そんな………」

ステイルに揺さぶられる物言わぬ当麻と、真横にあるアレックスだった黒い砂を見て、火織は絶望したように言った。

七月二十五日 part3 (後書き)

やっぱり原作があると楽だ

七月二十六日（前書き）

眠れなかったので投稿。

短い上に、これからちょっと日にちが飛び飛びになります

七月二十六日

早朝。昨日の一件により半壊した倉庫の屋根から、朝日が倉庫の中へと降り注いでいた。

羽は既に消えているが、竜王の吐息の直撃を免れた棘の半分や砕けた床、その上には黒い砂が小さな山になっていた。そこからは、腹辺りの肉だったのだろう、乾燥した小さな肉片が覗いている。

そこへ、一匹のネズミがチョロチョロと近づきつつある。一見すればビーフジャーキーのような大きさと見た目だ、彼にはご馳走に見えたのだろう。

そして、用心深くその臭いを嗅ぎ、安全だと確かめた上でかじりつく。日本の前足で押さえるその姿は愛らしく、ネズミでなければ好かれただろう。

かじり始めて数十秒後、ネズミが苦しそうにもがき始める。しかし、まるで接着剤でくっ付けたように、肉片は離れない。そして、もがけばもがくほど、ネズミは肉片の中へと入り込む。

暫くすると、肉片はあつという間にウサギほどの大きさになった。にネズミの体積を足したとしても、明らかにおかしい。

それはそのまま肥大化すると共に、蟻に人が捕食されるビデオを逆再生するように、内側の組織から順に人の形を取り始めた。

「危なかったな……………」

アレックスはそう言うと、自分の体をマジマジと見る。

「擬態すらできないか」

アレックスはアレックス・マーサー本来の姿のまま、倉庫を後にした。

朝日が昇った頃、アレックスは木山の生徒の入院する病院に、公衆電話から電話をかけた。頑なに拒む受付に、プロのネゴシエーター顔負けの交渉術で快く面会の許可を得た。

アレックスがこの病院だと当たりを付けたのは、魔術師に火織がいた事と、ここにかなりの腕を持つ医師がいるからである。

冥土返し《ヘヴンキャンセラー》という学園都市特有の二つ名まで付いたその医師は、患者の為ならどんな機材も手段も使用し、機材が足りなければそれを作る。しかし、その制作費は患者に請求することも無いという、ある意味では非営利目的と言っても過言ではない。

蛇足ではあるが、かなりのカエル顔である。

「しかし、重症か重体か……………だな」

アレックスは面会を許可された際に、その医師に一度会うように言われた。そういう場合は、軽傷というのは少ないだろう。

しかし、彼は正攻法で行く気は毛頭無いので、窓からの侵入を試みた。

アレックスは自身のウィルスの位置を頼りに、当麻の入っている個室の病室を見つけた。中には誰もいず、点滴もされていないのを不審に思いながらも、張り付いていた壁から空間移動で中に侵入する。

「ん？いたのか」

窓からは見えないベッドの横の位置に、憂いの表情を浮かべる火織が立っていた。その手の真つ白な袋から、ウィルスの反応がするのがアレックスには分かる。

「アレックス……………？」

幽霊でも見たような顔をする火織の手から、アレックスは袋を奪い取る。

「まったく。俺の骨を 素手へ、へで拾うなんて、死にたいのかお前は」

袋を開けたアレックスは、ポテトチップスを食べきるように口に流し込む。

もし、アレックスがあのような状態から再生できるという経験が無かったら、本能的に火織を取り込もうとしたかもしれない。

「倒れた衝撃でボロボロの輪郭が崩れたただけだ。なら、残った部分から再生できる」

あっけにとられたような火織に、アレックスは仕方なく言う。その言葉に、火織は呆れたような、安心したような表情をした。

「当麻はどうした。まだ意識が戻らないのか？」

その問いに、火織は首を横に振る。

「いえ、今は寝ているだけです。医師の話では、命に別状は無いと」

安心より、アレックスの胸には疑問が渦巻いた。あれほどの魔術

の副産物が、気絶させるだけか、と。

「それよりも、本当にアレックスですか？」

「ああ？」

何言ってるんだこいつ、という目で火織を見る。その数秒後、アレックスはとんでもないミスをしたと思った。

「あー、年齢か？」

「ええ、失礼ですが……お尋ねしても？」

どこか、火織がいつもより低姿勢にアレックスは感じた。もう会うことも無いだろうと思ったアレックスは、気紛れで言った。

「二十九だ。誰にも言うなよ」

アレックスになってからの年齢を言うと詳細を話さなければならないので、アレックス・マーサーの年齢を言った。

「にじゅ……！？」

絶句する火織に、アレックスは問いかける。

「そんなに驚く事かよ。姿を変える方法なんていくらでもある。それに、見た目からして、十歳以上も歳が離れてる訳でも無いだろ？」

スウツと、火織の顔から表情が消える。アレックスは、地雷を踏んだのだとすぐに理解した。

「私は、まだ十七です。何が、何が、十歳も違わないですか？ええ、そうですね。よく言われますよ」

これはマズイと思うアレックスの脳裏には、アレックス・マーサーがカレンと喧嘩した時の光景が映し出される。ただ謝るのでは無駄だと、アレックスは判断した。

「悪かった。大人びていたから、ついな。落ち着いてるって、よく言われないか？」

クロス大尉が聞けば、抱腹絶倒していただろう。

「え？ええ、まあ……………」

多少、火織の表情が変わったので、アレックスは今の内に話題を変える。

「話は変わるが、そろそろ帰らせてもらう。もう、こんな時間だからな」

ベッドの脇に置いてある時計を指さすアレックスに、火織は頷いた。

「日も昇り始めましたからね。…………インデックスを助けていただき、ありがとうございます」

頭を下げる火織に、アレックスは冷たく言った。

「当麻に言え。俺は助けたかった訳じゃない。こいつがやるうとし

なければ、俺は見殺しにしていた」

その言葉に驚く火織が頭を上げると、既にアレックスの姿は無かった。火織はやり場が無さそうにため息を吐くと、ベッドで眠る当麻に礼を言った。

夕方。本日七体目、合計十五体目の妹達である検体番号9832号を吸収したアレックスは自室に帰るなり、携帯の紛失によって淡希に怒られ、春生は怒りこそしていなかったが、あまりにも遅すぎるとアレックスを叱った。

八月八日 part 1 (前書き)

悩んだ結果がこれだよ！

八月八日 part 1

日は進み、八月八日。本日の実験は朝日を迎えた頃に終了し、百六体目の妹達をアレックスは吸収した。

戦闘経験で言えばオリジナルの美琴は、一人で妹達を約百五十六人分だ。演算式をアレックスが弄くっている事を除けば、あと五十人ほどで御坂美琴を吸収したも同然になるだろう。ちなみに、自分だけの現実を改良しようとしたアレックスだが、自分の細胞にコピーされといえども思想を操るのは未経験のため保留とした。

上条当麻の護衛に関しては、気絶で済んだので不問ということだった。最も、アレックスはアレイスター直々に嚴重注意を受けたがそれ以外にもアレックスは産業スパイの処分など様々な報酬が歩合制の仕事を担うため、先の二つのボランティアを除いては金銭は勿論、超能力開発の実験体などの稼ぎが入っていた。

アレックスの現在の目標は、春生が使うための研究機材の購入となっている。いくら優れた音楽家とて、楽器がなければ演奏を聞かせる事はできないだろう、というのがアレックス自身を納得させる考えだった。

最近、通帳を眺めるアレックスを見る淡希は、女子がある時に浮かべる笑みを見せる。彼女はアレックスが春生の護衛として、名目上は、本当に名目上だけの監禁である。

まあ、アレックスが一日の大半を家を空けている以上、淡希は引越してルームシェアをしているようなものだ。現に、アレックスの荷物は端に追いやられ、その代わりに彼女が購入した服などが置かれている。現状を簡単に説明すると、アレックスに同居人が増え、自室が乗っ取られつつある所だ。

そして現在、一度自室に戻ったアレックスは淡希経由でアレイスターの指示を受け、三沢塾という王手予備校の前にいた。十字路のそれぞれの曲がり角に建つビルには、歩道橋のように道路を跨ぐ渡り廊下がある。

ひとまず、アレックスはその内の一つのビルの入口に向かい、自動ドアの横の壁にもたれ掛かった。そうやって待っていると、淡希もといアレイスターに言われたのである。

ちなみに、今回はボランテニアではない。

アレックスが二時間ほど待っていると、急に人通りが途絶えた。そろそろ来たかと、壁から背を離す。

「ん？生きてたのかい？」

顔を上げたアレックスが見たのは、先日の魔術師ステイル「マグヌスとあれ以来会ってない、上条当麻だった。」

「ステイルか……………」

「何だいその不服そうな顔は」

思わず失望の声を出したアレックスに、ステイルがこめかみをピクピクさせながら言う。

「いや、魔術の解説ならインデックスの方が良かったんじゃないかな」とな

「ほう……………。化け物風情がよく言うね」

明らかにステイルの実力を軽んじる言葉に、ステイルは口にくわえたタバコを摘んだ。

「おいおい、自分も化け物だとは考えないのか？」

よく言えたものだ、アレックスは嘲笑う。

彼としては、発電能力の実験台が増える事はとても好ましい事だ。

「何やってんだよお前ら！！」

当麻は訳が分からないといった様子で叫ぶ。

それを聞いたアレックスは、当麻がヒートアップしないように言った。

「悪かったな、ステイル。じゃあ、場所と目的、手段を言え」

悪びれた様子もなく言うアレックスにステイルは舌打ちをすると、彼も説教は嫌いなのか促されるまま言った。

「ここ、三沢塾だよ。目的は人質の救出。手段は正面から堂々と

」

「おい」

明らかにノープランなステイルに、アレックスは横槍を入れる。

「最後まで聞け」

ステイルは不機嫌そうに言う。

「ここにいる三人は発信器を付けてるんだ」

「え？」

ポケットなどをひっくり返す当麻を横目で見つつ、ステイルは言う。

「時間がないから簡潔に言うが、あのビルには敵の錬金術師アウレオルの魔力が満ちてる」

「なあ、魔力って」

「当麻、少し黙れ」

アレックスは当麻に冷たく言う。

「……まず、僕は僕の魔力が発信器になり、ツンツン頭はその右手で魔力を消し、君は魂を持ちすぎて明らかに異質だ」

ちらりとステイルが当麻を見ると、訳が分からないという顔をしていた。

「例を挙げれば、赤絵の具一色の絵画があつたとするよ？」

アレックスは理解したと判断したのか、ステイルは当麻に向いて言った。

「この赤絵の具はあのビルの中に充滿している、アウレオルの魔力だ。この赤一色の絵画の中に、僕の青絵の具を塗りつけたら誰だって気づくだろう？」

「……よく分からんが、俺もアレックスも似たようにバレバレって

事デスか？」

「あつはつは。君達ほどじゃないよ」

ステイルは続ける。

「君の幻想殺しは赤絵の具をこっそり拭き取っていく魔法の消しゴム。そして、アレックスは重ね塗りしすぎて盛り上がった、絵の具の塊だ。君達の発信器からは常に喧しい音が出てるよ」

当麻はやつと理解できたようで、大きな声で言う。

「じゃあ何か？俺達は発信器から騒音流しながら、何の策も持たずにテロリスト満載のビルん中に正面からドアベル鳴らしてお邪魔するってのか？」

「そのために君がいる。蜂の巣になりたくなければ死ぬ気で右手を盾にしる」

「ふざ、思いつきり他人」

ビルの解体で、壁に大型のハンマーを叩き付けたような音がし、二人が硬直する。

「敵の目の前で悠長にしゃべる余裕があるならさっさと行くぞ」

ほとんど足を動かさずに道路の一部を砕いたアレックスの言葉に従い、ステイルを先頭にして正面玄関の自動ドアに踏み込んだ。

見てくれや雰囲気優先したロビーの吹き抜けの天井は三回まで延び、まるで自動車屋のように多くのガラスで日光を取り入れて明るくしている。それは、夕暮れである今も変わらない。

しかし、アレックスの目には二機のエレベーターの間に倒れる、鎧を着た手足の潰れた死体が見えた。警戒しつつも、アレックスはそれに近づく。

「あれ？」

アレックスの行く先を当麻は見たのか、疑問に満ちた声を出す。

側に近付いたアレックスはそれがまだ生きているのに気づき、腰を下ろした時にあることに気付く。

「ステイル」

「はいはい」

ステイルがアレックスの後ろに立つ。

「こいつ、イタリア人だ」

「ああ、施術鎧による加護と天弓のレプリカ　おそらくローマ正教の十三騎士団だろう。……チツ。それにしても、あのホルマリン野郎もやってくれる」

その言葉に、アレックスが小さく反応する。

「他の教会のメンツが揃っていながらバラバラに突撃させるように仕向けるだなんて、わざと失敗することを狙ってるのか……？ 確か

に事後処理に来る連中は皆、教会の精鋭だろう。一人でも頭数を減らせれば向こうとしては行幸と言った所だろうが……」

ホルマリン野郎とはアレイスターの事だと確信したアレックスだが、敵の懐に入っているので無駄話だと判断した。

「看取つたら行く。階段の前で待機して」

「ばっ！みゃあ！みぎゃああっ！？」

床を殴り、痛みで叫ぶする当麻の音がステイルの言葉を遮る。

「……………。この建物と他の人間には、結界で干渉できなくなっている」

「らしいな」

アレックスはクスリと笑うと、階段の前からステイルと鎧の騎士を見守る。

アレックスにもできない事は無いが、看取られた者は地獄に召されるだろうと思った。

騎士はゆっくりと潰れていない手をステイルに伸ばす。

「。。」

神父としてのステイル何かを言った騎士は、ステイルが頷いたのを確認すると力が抜けたのが分かった。しかし、数秒の間その手は宙に留まると、前触れもなくゴトリと落ちる。

その光景は、動けない重体の身にも関わらずアレックスを撃つて

事切れた、海兵隊の一兵士をアレックスに想起させた。

「待たせたね」

階段へと歩くステイルの目に憂いの表情を見せるアレックスが映ったが、それについては何も言わずに階段を昇る始めた。

ステイルを先頭に階段を昇るアレックスと当麻だが、先程からステイルのペースが落ちつつある。現在、二階を過ぎたところである。先ほどの落ち着きとは反対に呼吸を大きく乱すステイルに、アレックスが言った。

「タバコ、止めたらどうだ？」

「たかが五階で、ニコチンとタールを捨てられるか……！」

「……………そうかよ。五階だな、先に行ってる」

アレックスは二人を追い越すと、早足で階段を登り始めた。その後ろから、西の隅の部屋だとステイルが言うのが聞こえた。

五階に到着したアレックスは、こちらに反応すらない生徒の間を掻い潜りながら隅の部屋へと向かう。一度肩が当たったのだが、その際には肩を中心に、メキリと車に人間が跳ねられたような強い衝撃が襲った。そのため、アレックスはこの一人一人をハンターと思い、きちんと避けることにしたのだ。

そして、言われた部屋の前に着いたのだが食堂と書かれている札が目に入り、アレックスはなんとも言えない気持ちになりながらも中へ入る。干渉できないので、塾の生徒に開けてもらってだが。

「……………こついう事か」

中に入った途端、アレックスからその気持ちが吹き飛んだ。

ぶつかろうと反応を示さなかった生徒達はアレックスが食堂に足を踏み入れた途端、一斉にアレックスに注目したのだ。

「熾天の翼は輝く
」

明らかに意味のありそうなその言葉を壁際に立つ少年から聞き、アレックスは問答無用の雷撃を放つ。赤みが強いオレンジの電撃がアレックスの一步前から放たれ、当然の如く少年の肌を激しく焼いた。

焼いた。彼らに干渉ができたということだ。それを、魔術を使用したからだとアレックスは考える。

「し、熾天の翼は輝く光、輝く光は
」

しかし、少年は明らかに重症にも関わらず、再び言葉を紡ぐ。それを見たアレックスは右腕の細胞に伸縮性を持たせつつ、真っ黒の蛇のような鱗と均一な太さをもつ腕に変化させる。手首から先を儀式用のナイフのような曲がりくねった四つの爪に変える。その内二つは、両側の物よりも大きい。

アレックスはフットボールの選手がボールを投げるように左足を前に出しながら右半身を後ろに引くと、ポツリと言った。

「運が悪いな」

腰を捻らせながら振るわれた右腕は一瞬にして壁に到達するほどに伸び、削れない壁をガリガリと引つ掻きながら、食堂の中を座っている生徒の頭の高さで風ぎ払った。高速で振るわれたそれに胴が引つ掛かった者は二つになり、頭が引つ掛かった者は背が三十センチほど縮んだ。

「純白は浄化」の証、証は行動の結果

しかし、食堂の中に生徒の魔術の下準備のような声は未だに響く。それを見て、アレックスの表情が苦々しい物に変わった。

「クソツタレな外道野郎が相手か……」

その眼前では、腰の位置で引つ掛かった生徒が、苦痛に呻く代わりにパクパクと口を動かしながら言葉を紡ぐ。同時に、アレックスは新たな事に気が付いた。

「結果は未「来、未来は時間、時」間は「一律、一律は全」て、

アレックスの背後、廊下のあるこちらから、生徒達と同様の言葉が合唱のように聞こえるのだ。それ以上言葉が続く前に、アレックスは階段に向かって駆け出した。

最低でもこの階層。下手をすれば、この建物の中の全員が魔術を使おうとしているからである。

「これはマズいな……」

逃げるだけなら、このまま生徒の少ない上層階に上がるのがベス

トだが、当麻を死なせるのは大問題。その為、再びステイルと合流すべく、踊り場まで飛び降りる。

アレックスは聖ジョージの聖域のようなモノでないことを祈りながら踊り場に着地した途端、視界に映る景色が白い壁から豪華な家具が並んだ巨大なフロアに変わった。

空間移動だと理解したアレックスは、咄嗟に電磁波のレーダーを起動させる。空間移動能力者のAIM拡散力場を常時出しておこうかと、アレックスは本気で考える。

「ようこそ、歓迎するよ」

その背後から、若い男の声がかかった。

八月八日 part 2 (前書き)

少しずつ書いたので、色々おかしいかもしれませんが。指摘していただければ、修正します。

八月八日 part 2

振り返ったアレックスが目にしたのは、真っ白なスーツに緑の髪、それもオールバックという奇怪な格好をした長身の男だった。この服装にも意味があるのだろうか、アレックスはふと考える。

しかし、それよりも大事なことがあるので、思考を切り替えて言った。

「……この塾の魔術はお前が？」

「そうだ。私の名前はアウレオルス・イザード。錬金術師だ」

そう名乗るアウレオルスの顔から、アレックスは彼が傲慢な部分を持ち合わせていると経験から判断した。表面上は紳士的だが、中身は欲望や自尊心がぎっしり詰まったようなタイプだ。例えばそう、クロス大尉のような。

「俺はアレックス・マーサーだ。残念ながら、俺は吸血鬼じゃない」

アレックスは早速吸血鬼という事を否定する。誤解は長引けば、嘘に変わるのだ。そうなれば、信頼などは築けなくなるだろう。

人質の救出が目的ならば、一部の例外を除いては戦闘を避けるのが望ましい。最も、既に数十人を殺害した後だが。

「前の目的は何だ？吸血鬼が必要か目的の様だが、その力か？」

「……ふむ、その前に、先ずは座ろうか」

男はそう言いつつ、応接用らしい黒革のソファーと机に目をやる。どちらも高価そうな品だ。

二人が座った所で、男は口を開いた。

「私に必要なのは吸血鬼の脳の仕組みだ。ここにいるのもこの者を害す為ではなく、吸血鬼を捕える為だ」

よく喋る奴だとアレックスは感じた。

「吸血鬼の脳……。不老不死でも欲しいのか？」

「否。その大量の記憶を収める脳のが、それを人間に実現する理論が、私には必要なのだ」

その答えにアレックスは嫌な予感がし、思ったことを言うことにした。遠回しにしなくても、このタイプの人間なら答えるだろう。

「記憶力か。知り合いに、記憶を溜め込みすぎて困った奴がいたが、そいつの事を話しても？」

「……………聞かせてもらおう」

アウレオールの視線がゆらゆらと揺れる。

「インデックス禁書目録、これで通じるか？」

アレックスの言葉にアウレオールは眼を見開く。

「それは……。いったい、どういう事だ！？あり得ないあり得ないあり得ない……………」

アレックスはアウレオールが拳を固め、震わせているのに気付く。

スタイルにしろ魔術師は子供の集まりだと、嫌な現実を思い知った。それと同時に、先程の自分の発言を悔いた。もしインデックスが目的なら、死亡したとは思わないだろう。その上、自分で助けられなかった事から、助けた人物に危害を加えるかもしれない。

「おい、落ち着

」「黙れ」！！」

アウレオルスが声を発した途端、アレックスは言葉を続けることが不可能になった。それは決してアウレオルスに威圧された訳ではなく、声を発する事ができなくなったのだ。

アレックスはある種の恐怖を感じ、立方体の不可視の念動力の壁を机を境に出現させ、アウレオルスを囲む。狭いため、椅子から立ち上がれもしないだろう。

アレックスはトドメにと立方体を潰そうと演算を開始した途端、アウレオルスの口が動いた。

「

完全なる遮断の為に何を言ったのかアレックスには分からなかったが、それと共に念動力の立方体が消滅したのが分かった。

「変わった事をする……。『磔にし、動きを封じよ』」

その言葉と共にアレックスの背後に巨大な漆黒の十字架が出現し、アウレオルスに飛び掛かろうとしたアレックスは手足をピンと伸ばしながら凄まじい力によって十字架に叩きつけられる。伸びた手足が戻る前に、淡希が座標移動でコルク抜きを刺したように筆箱ほどの大きさの杭が両手足の前に出現し、両足の甲と両手のひらを打ち

抜いて十字架に縫い付ける。杭と十字架がぶつかった際、何も音が出なかったのをアレックスは確認した。

「ふむ、苦痛で表情を変えもしないか」

「だったらどうなんだ、手品師？」

立ち上がったアウレオルスは分析を進めるように、事務的に呟く。アレックスは杭の刺さった周りの細胞を崩すと、すり抜けるように落ちながら十字架を蹴ってアウレオルスに飛び掛かる。勿論、空中で例のごとく急加速してだ。

「くっ！？」止ま

アウレオルスがそう言い切る前に、アレックスは時速百四十キロあまりで衝突。それと同時に質量を増したアレックスにぶつかられたアウレオルスは、干渉できないソファアとの間に挟まれて象に踏まれたように胸部が大きくへこむ。それと同時に、アレックスは一瞬停止でもしたかのようにピタリと止まる。

数十秒後、アウレオルスが事切れた事によって魔術が解かれ、アレックスはようやく動くようになった。アウレオルスのよく分からない魔術を恐ろしく思いつつ、その死体を喰らった。

走馬灯のように見た記憶は、自身の書いた魔導書を自分の思うように使えない苦悩とインデックスによる救い。そして、高熱らしき症状に数日苦しむインデックスと、視界に映るはありとあらゆる治療のための魔導書。ステイルと火織によって延命措置としてインデックスの記憶が消された後、インデックスを助けようとローマ正教を裏切り、過ぎた現在までの三年。

アレックスはそれを要らない物と一瞥し、先程の魔術についての記憶を漁る。

「……………おいおい」

先程の魔術が アルス・マグナ 黄金錬成と言われ、言ってしまうえば思い通りの現象を起こす物と知ったアレックスは思わず呟いた。例えば、無条件の死から蘇生まで、文字通り何でもできるのだ。

食堂の生徒も、あの直後に蘇生されたらしい。

その弱点は、想像した物は自分に害があっても造り出されてしまふ事だ。もし、アウレオルスが想像を言葉にして明確にせず使っていた場合は、再生など意味もなく無条件で殺されたらうとアレックスは畏怖の念を抱いた。

そして、記憶を読み進めたアレックスはこの魔術の最大の弱点を目にし、落胆した。下準備に、通常なら二百年はかかるというのだ。アウレオルスは二千人を動員して半日で終わらせたが、アレックスはそんな真似ができる筈も無く、かといって全身に口をつくっても独立させて動かすのは骨だろう。更に、アレイスターは科学側であるという事もある。

要するに、現時点でこの魔術は、アレックスには使えないのだ。最も、不老を利用して二百年間呟き続けるという、地味な方法もあるが、あまり意味は無いだろう。

魔術の事は見送りにし、アレックスはヒビの入った携帯で当麻に魔術師を処分した旨を伝えた。肝心の人質は、塾内を彷徨っている事も。ステイルが死体の在処を聞いてきたが、炎で焼いたので蒸発したとアレックスは伝えた。納得していなさそうなステイルだったが、アレックスが捏造した仮定を言つと簡単に言いくるめられた。

その後、アレックスはその直後に受けた淡希からの電話の指示通りに外にいた鎧の男に帰ってもらい、事後処理はステイルに丸投げして魔術の使用方法の模索のために自室に帰った。帰り際に口座に

報酬が入っているのを見て、少し機嫌が良かったのは本人しか分からなかっただろう。

八月十五日 part 1 (前書き)

大変遅れてしまいました。申し訳ない

八月十五日 part 1

八月十五日

本日の実験予定：午前中に四回、午後三回

本日最終実験の開始予定時間：午後九時零分

天井亜雄研究員より追加指令

アレックス・マーサーの同行については引き続き警戒。殺害された個体によるミサカネットワークへの接続と関連している可能性が高い。様子見のため、部外者が実験に乱入した際には彼に処理を一任する事。そして、その内容を事細かに報告せよ。

午前十時。アレックスは四回目の実験を終え、春生に重要な話があると冥途返しが連絡をよこしてきたため淡希に一任し、第七学区の街中を宛もなく彷徨っていた。だが、ただ歩くのは彼としても嫌なので、電磁レーダーを使って周辺をマッピングしている。

中の欠陥電気を総動員したレーダーの広さと正確さから脳内に立体の地図をつくるのもずいぶん楽にできそうだと、アレックスは超能力の便利さを痛感した。

しかし、不可視の電磁波によるレーダーでも、当然の如く電気系統の能力者には色の付いた波のような訳で

「見つけたわよ！今日こそ逃がさないんだから！」

超電磁砲^{レールガン}である御坂美琴ともなれば、意図も簡単に発信源を割り出せた上で、ステルス機のように近づけるだろう。

「そうか、電磁波だったな……」

婦人服専門店の中から目の前に現れた美琴を見て、アレックスは自身が思っているよりも舞い上がっていたのだと実感し、悔いた。妹達に関連している事が知られただろうかと、多少の不安を抱きながら。

ふと、アレックスは美琴に シンクロナトロン 量子変速によるドア爆弾をお見舞いしたのを思い出し、美琴の左半身を注視する。しかし、その細い手や首元にも傷一つ見当たらない。もしかやと思い、アレックスは問いかける。

「二十日ほど前に重傷を負ったと噂を聞いたが、もう完治したのか？」

「私が重傷？何言って……ああ、あれね。噂っていうのは、大きな尾ひれが付くものね」

『大きな尾ひれ』は間違っているのか自尊心による物なのか、アレックスは判断しかねた。

「とつさに、攻撃に使うつもりだった砂鉄で盾を作ったのよ。かなり強く作ったから軽傷で済んだわ」

「……………ならいい」

相手が銃弾を放ってきたのを確認すると共に、弾丸と自分との間に挟む防弾チョッキを作るような行為だ。それを一瞬でやってのけるなど正気の沙汰じゃない。

アレックスはこんな中学生でも兵器並みの力を持つことを改めて実感した。

「もういい？ だったら始めましょ」

何をと、聞かずともアレックスには理解できた。先日、アレックスがすっぱかした事をする気なのだろう。

「勘弁してくれ。最近はアルバイトで忙しい」

「今のアンタの用事なんて知らないわ。あの時勝負するって言ったのなら、ちゃんと勝負しなさいよ！」

引き下がるつもりが無いのを真摯に感じると同時に周囲の視線も気になったアレックスは、仕方なさそうに溜め息をついた。

「場所を変えるぞ」

そう言つと、美琴を一瞥して人通りの多い街中から近くのか河川敷へと歩き出した。

昼間だが人が一切いない河川敷に到着したアレックスは、肝心の勝ち負けの基準を確認したが、強い方が勝ちという納得のいかない返答が変えるのみだった。

その為、現在アレックスは対峙する美琴の開始の掛け声を待ちながら、電磁線を視認するために感覚器官に手を加えている。オリジナルの超電磁砲と違い、クローンである欠陥電気は電磁線が見えないのだ。ならば、電磁線を捉えられるように身体を作り替えた後に、能力を使えばいいというのがアレックスの考えである。

「じゃあ、そろそろ始めましょ」

「ああ、そうするか」

アレックスと美琴は互いに数歩下がる。

「三、二、一、ゼロで開始ね。三、二、一」

美琴はカウントと共に右手を伸ばし、銃を持っているかのようにアレックスに突きつける。対して、アレックスは仁王立ちのまま構えようともしない。

「ゼロ!」

美琴は声と共に伸ばした右腕から躊躇無しに電撃を放つが、それはアレックスに当たる前に大きく逸れる。欠陥電気を使用し、誘導したのだ。

電撃が逸れた瞬間にアレックスの手のひらに念動力による砲弾が出現。アレックスは右腕を大きく振りか振り、美琴の足元めがけて投げつける。しかし、電磁レーダーに大きな影として映ったのか、地面に到達する前に美琴の背後から飛び出した砂鉄の渦に衝突し、消滅。更に、砂鉄を辺りに散らしてしまう。

「チャンス!」

喜ぶ美琴と反対にアレックスは舌打ちをすると、空間移動で数メートル後ろに飛ぶ。地表の砂鉄をごく微弱な磁力で操るアレックスの目の前では、先ほどまで自分がいた位置で砂鉄が蠢いている。恐らくこの砂鉄は、どんな研磨機よりも物を削ることができるだろう。

「おいおい、殺す気か？」

本気でかかってきていると実感し、アレックスは思わず軽口をたたく。

「どうせ当たっても平気なんですよ？それに、能力のコピーでもできるの？私のかなり似てるけど」

「ご機嫌な美琴の言葉に、アレックスは口角を釣り上げる。やはり、能力は見慣れている分そういうのが分かるのだろう。」

「さあな。それと、俺の勝ちだ」

「何言って　！？」

アレックスは周囲の地表に広がらせた砂鉄を磁力で流れを作りながら、念動力で一気に空中に舞いあがらせる。それと同時に、美琴は操作できるだけの砂鉄を身に纏わせて防御体勢に入った。それを確認したアレックスは砂鉄の操作を放棄。未だ砂鉄が宙を漂っているにも関わらず、アレックスはその中を走って砂鉄を纏った美琴に走る。

砂鉄を纏った事に加え、宙を舞う大量の砂鉄。電磁レーダーはアレックスはもちろん、美琴もすでに意味を成していないだろう。

「ほら、勝ったぞ」

首に当たる部分をやや強く掴んだアレックスは、他人事のように言った。

数秒の間後、纏っていた砂鉄が一気に地面に落ち、美琴の姿が現れる。

「……………」

しかし、何も言おうとする様子はなく、俯いて立ち尽くすだけだ。だが、その口元は微妙に動いている。

負けたのがそこまでショックだったのだろうか、数歩離れたアレックスはふと思う。そして、そろそろ約束である勝った際の命令を言おうと口を開いたその時

「引き分けよ！」

美琴がアレックスに指を突き付けながら、河川敷に響くような大声で言う。言葉を続けると思い、アレックスは口を閉じた。

「今回は私はレールガンは使ってないし、アンタも本気じゃ無いでしょ！？ だったら引き分けよ！」

子供らしい不条理な言葉に、アレックスから反論する気が失せる。言っても無駄だと感じたのだ。

「……………そうかよ。忙しいんだ、じゃあな」

「ちよっと待ち」

アレックスは相手をするのさえ億劫になり、深く溜め息を吐いた

後に空間移動でその場を後にした。歩いて去れば、確実に何かを言われると思ったからだ。

操車場での本日最後の実験。アレックスは邪魔にならない位置にある電車の上に乗し、実験の開始をジッと待っていた。

故障を恐れて携帯電話を自宅に置いてきたため、寝ているわけでもないのにただただ目を閉じている。ボーツとしているのは嫌なだろう。しかし

「何の用だ？」

「隣は空いてますかと、ミサカは見上げながら尋ねます」

決して油断しているわけでは無いようだ。

「あと少して自分が死ぬにも関わらず、えらく気楽だな9982号」

「別に気楽なわけではありませんと、ミサカは検体番号を言い当てられた事について驚きながら言います」

相変わらず個性が無いと、アレックスは胡座を組みながら思う。

返答が無いことを了承と見たのか、

「では隣を失礼しますねと、ミサカは相変わらず無愛想だと思いが言います」

9982号の言葉をアレックスは鼻で笑う。

「そうかよ」

無愛想だと自覚しているが、直す気も無いアレックスである。ミサカも分かっているようで、アレックスの顔をジッと見た後に正面を向いた。アレックスは時間を潰すために、脳内に作成した立体の地図に予想される監視カメラの監視範囲を作成し始めた。

数分後、一方通行がこの操車場に入ったのをアレックスが感知し、立ち上がる。

「来たぞ」

そう一言言ったアレックスは、邪魔にならないように近くの貨物列車に積み込むためのクレーンの上に跳び移る。それを見た9882号は電車から飛び降りると、操車場の中での実験を開始する地点へと走った。

その後はアレックスが飽きるほど見た内容と同じで、ミサカが一方通行から逃げつつチクチクと攻撃するも効果無し。そして現在、散弾銃並みの石つぶてを両足に受けたミサカが、走っている勢いそのまま砂利の上に倒れたところである。

「なんだよ。もう終わりかア？」

苦痛に呻く9882号にそう言った一方通行は、近くの一両だけポツンと止められている電車へと歩き出す。

「オマエは他のやつらと比べて、まあまあがンばった」

口を大きな三日月の形に裂けさせた一方通行が、電車に腕を伸ばせば触れられるほど近づいた。

「だから特別によオ、一台まるごと使つてやる！」

一方通行の枝のような腕が勢いよく振るわれ、電車の下辺りに叩きつけられる。それ自体に音は発せられなかったが、ベクトル操作と言つ名の法則の書き換えによつて電車は轟音を立てながら9982号へと迫る。

電車は半ば浮き上がっているため、さながら投石機によつて飛ばされた巨石だ。当たればミンチでは済まないだろう。しかし、そうなれば後処理も面倒なわけで

に電車が9982号に衝突する瞬間、耳を塞ぎたくなる轟音とそのガラスの破片を操車場にばらまきながら大きくひしゃげて静止した。

「な………?」

太ももに空いた小さな穴の近くを押さえながら倒れ伏す9982号があっけらかんになる。

一方通行の一切のミスの無い演算により、豆腐を潰すように9982号を挽き肉にするはずだった。しかし、壁に叩きつけられたプラモデルのようになったのだ。

更に、それを行ったのが、両腕が丸太のように肥大化した黒い西洋甲冑ならば尚更だろう。

「いったい何も

」

9982号が黒い西洋甲冑と化したアレックスに何者が問い掛けようとしたが、彼が振り向きざまに右手を振り下ろしたために遮られ、体の半分ほどが潰れた。

そのまま死体を吸収したアレックスは、全身に纏った装甲と数百キロの鉄槌と化した腕を元に戻す。それと同時に、9982号の記憶が流れ込んだ。研究所、培養液、学習装置、戦闘方法。そして、昼のアレックスと美琴の戦闘、その後の美琴との遭遇。

「気付かれたか……」

記憶の奔流から抜け出したアレックスは、忌々しそうに呟いた。クローンの存在がオリジナルにバレた。アレックスは美琴の性格から、死ぬ気で阻止しに来るだろうと考える。

「何だア？さっきのは？」

そんなアレックスとは裏腹に、ある意味暢気な一方通行は問いかけた。

「……………細胞を硬質化しただけだ。俺はアーマーと呼んでるがな」

しかし、律儀に答えるのは多少なりとも焦っている証拠だろうか。

「いや、それはどうでもいい。今すぐ桔梗に」

そこまで言ったアレックスは何か強烈な攻撃の予兆を感じ、即座にアーマーを纏って防御体勢に入る。それを怪訝な顔で見る一方通行が口を開いた瞬間、巨大な雷が操車場を襲った。

八月十五日 part 2 (前書き)

遅れました。

長かったのを削ったので短いです

落雷によって周囲の電灯は破裂し、金属が未だに帯電している操車場の中心。そこにアレックスと一方通行はたたずみ、ある一方方向を見ていた。

落雷自体は一方通行は反射し、アレックスはアーマーで絶縁。二人には、まったく効果が無かった。

「……オリジナルか？」

疑うように言う一方通行の視線の先には、妹達のオリジナル……御坂美琴が周囲の金属に時折伝播するほどの電気を纏わせながら仁王立ちしている。

「ああ、そうだ。一方通行、今からこうなった際の対応を問い合わせる。それまで、傷付けないように相手をしてくれ」

アレックスはアーマーを解除してそう言うと、ミサカネットワークに接続した。

ネットワークを介し、今動いている妹達の感覚や知識を共有したアレックスは適当な個体に問い合わせ聞いた、その対処法の内容に舌打ちをした。『アレックス・マーサーは一方通行が乱入者を殺しそうになった場合に限り、戦闘に介入すること。上部よりの命令である』完全にアレイスターの差し金だと理解したアレックスは、舌打ちをすると一方通行に大声で言う。

「一方通行、お前が殺しそうになった場合のみ止める」

一方通行は砂鉄の嵐の中にいたが、それを一瞬で吹き飛ばしてアレックスを見る。

「ああ？それまでのんびり観戦ってたか？」

「上部からの命令だ。俺に権限は一切無いらしい」

アレックスはそう言いながら、美琴に視線を移し、

「絶対に死ぬなよ。当麻が何をするか分からない」

一方通行は美琴を見た後、少し上を向いてから口を開いた。

「……勝手にしやがれ」

そう言う一方で一方通行は大きく手を広げて言った。

「第一位様からのサービスだ。一分だけ攻撃させてやる」

一方通行は光すらも反射するベクトル操作能力。アレックスの見込みでは、美琴に勝ち目は一切無い。

もともと、一方通行の名前と化している能力を知らない美琴には、そんなことは知るよしもないが。

「揃いも揃って、嘗めてんじやないわよ！！」

美琴は憤慨した様子で雷の槍と自称する電撃を一方通行に叩きつける。が、当然のように一方通行に触れた途端に電撃はあらぬ方向に逸れ、その先にいるアレックスに当たりそうになるが、これは当たる前に逸れる。

「……おい、一方通」

「ナアにぼさつとしてやがる。あと六十秒しか無いのによオ？」

明らかに狙われたアレックスは、抗議の言葉を遮るように美琴を挑発する一方通行に舌打ちをし、挑発により再開した戦闘を注視する。

辺りの空気中の成分濃度を明らかに変化させる程の雷撃を美琴は連続で放ち、一方通行は両手を広げたままの悪魔の抱擁のような体勢でそれを逸らし続ける。時おり磁力で操られた砂鉄や鉄骨を身に受けるが、それすらも逸らし続ける。

「じゅう、きゅう、はち、なな……………」

轟音に混じって一方通行のカウントがそろそろ終わりそうなのがアレックスには聞こえ、彼はアーマーも身に纏わずに少しずつ二人の間へと歩をすすめる。

「さん、にイ、い……………」

そして、カウントが終わる直前に美琴はコインをポケットから取り出し、アレックスが前に見た中で最も派手に電撃を辺りに散らしながら一方通行へと十八番であるレールガンを放った。

立ち去る美琴の横に並びながら歩くアレックスは、ミサカネットワークに結果を送る。内容は、一方通行に攻撃が通じないのを理解し、こちらの警告に従って退去したというものだ。

「……………アンタ、何でこんな実験やってんのよ」

それについて了解の旨を受け取ったアレックスに、美琴が話しかける。

「質問に答えるのは俺の仕事じゃない」

アレックスは親しいとは言えない美琴に言う気は無いため、事務的に返す。

「仕事でなの？」

「かもな」

これが春生に知れたらどう思うだろうかと、アレックスは考えた。恐らく、彼女は許さないだろうとすぐに結論が出たが。

「お金目的なの？」

「違う、タダ働きだ」

金銭目的とは思われたく無いので、アレックスは即座に答える。

「……そう」

それっきり美琴は話さず、アレックスは彼女が寮に入ったのを見届けた後に自室へと帰った。

八月二十日

美琴の乱入した実験の後、アレックスは亜雄に実験場周辺を妹達で封鎖するように進言したのだが、樹系図の設計者の演算通りに行うという彼に呆れてしまい、結局は桔梗に進言した。それでも、聞き入れたかどうか、元同業者として不安になるアレックスだが。

そして八月二十日十六時現在、アレックスは徐々に自室のドアを開け、中に入った。

実験やアレイスターから斡旋される仕事により、実に二週間振りであった。もつとも、二週間前に戻った理由は、携帯のバッテリーが切れたので充電に戻っただけだ。ちなみに、仕事以外で電話を使わないアレックスの携帯のバッテリーが上がった原因は、淡希からの大量の電話やメール主である。それ以来、着信拒否に設定してからはバッテリーが上がることは無いのでアレックスも安堵していた。

「誰よこんな朝・・・!? 春生! 帰ってきたわ!!」

そして、ドアを開けた途端に淡希に気付かれ、春生を呼ばれたアレックスは徐々に苦々しい表情をする。

無表情が常の彼でも、たかだか二週間ぶりに帰ってきただけでここまで騒がれるのはあまりよく思わないようだ。彼がたかだか二週間と考えている例を挙げれば、妹であるディナとすらも、アレックス・マーサーは五年ほど会っていないかったのだ。

「アレックス、やっと帰ったのか」

淡希に急かされるように出てきた春生は、相変わらず濃い隈をこすりながら声を発した。

「おはようアレックス」

「おはよう。調子はどうだ？」

「少し疲れているのかもな。それより、冥土返しからいいことを聞いた。それについて話したい」

その春生とアレックスのやり取りを見て、淡希が目をパチクリさせる。

「ちょっと春生、二週間もよ？もっと言うことは無いの！？」

たかだか二週間と言った様子の二人に自分が浮いているようで、淡希はあわて始めた。

「淡希、今は早朝だ。静かにしろ」

そして、アレックスの日本の建築物の壁の薄さへの心配から出た言葉に、淡希は頭を抱えた。

「で、冥土返しは何を言っていた？」

「中古の機材を格安で譲ってくれるそうだ。しかし、このままではスペースが足りないな」

春生のその言葉に、アレックスは思わずため息をついた。

「機材の話か……。てっきり、目覚めた教え子達の話かと思ったんだがな」

アレックスの言葉に、春生が目を見開く。

「……………気付いていたのか？」

「ああ、えらく揺れていたからな。それに、あれだけ派手に警備員が動けば気付く。手伝おうかと思ったが、第三位がいれば俺はいらない」

「あの子はよくやってくれたよ。……………そういえば、君が私を連れてきたのも、あの子達のためだったか？」

「いや、俺のためだ。AIM拡散力場について教授してもらったのが、俺の目的だったからな。あれは建前だ、どうだっていい」

普通の人が言われたのなら殴り飛ばすであろうその言葉に、春生は笑いながら答えた。

「そうか。ふふ……………そうだったな……………ふふ……………」

「何だ？」

その笑いが気に入らなかったのか、アレックスは低い声で言う。

「何。ちゃんと見ていたんだな、と考えるとな」

「……………勝手に笑ってる」

春生の言葉にアレックスは背を向けると、冷蔵庫へと向かう。

その行動は、照れ隠しなのか勝手な想像だと呆れたからなのか、そのどちらかは春生には断言できないが、おそらくは前者だろうと

思いながら朝食を作るために戸棚に向か

「おい、これは何だ？」

アレックスは目の前にある冷蔵庫。その中身を指さしながら淡希と春生に言う。

「ただのレトルトカレーだが？」

「……あえて聞くが、その戸棚には何が入っている？」

「そんなものは決まっているだろう」

そう言いながら春生が開けた戸棚の中には、インスタントラーメンやカップラーメンが詰められている。その光景に、アレックスの顔から表情が消えた。

「お前ら、今すぐ座れ」

アレックスは有無を言わさぬ様子で二人に言い、問答無用でテーブルに着かせた。

二人にバランスのとれた食事の大切さを、生物学と栄養学の両方を使って脅迫気味に二時間ほど説明したアレックスは、実験の時間

が押ししているとこの食材を買いに町へ駆け出した。原因は、淡希の方にアレキスターからの用事があるようで、彼女が出かけるからだ。おそらくはスキルアウト狩りだろうと、アレックスには大方予想がついた。

ホイコーロー

回鍋肉や天津飯が簡単に作れるといったような料理の元と、それに必要な材料や付け合せを買ったアレックスは少し実験まで擬似的な昼寝でもしようかと、実験場の近くにある繁華街へとゆっくりと向かっていた。この辺りの地図は、すっかり頭に入っているようだ。

「ん？」

電磁レーダー内にいきなり現れた、つまり空間移動能力者に気付いたアレックスは疑問に満ちた声を出した。姿をとらえたので拡大するようにその部分だけ細かく知ろうとすると、付近の一部分だけが霧がかかって見えない。それが気になったアレックスは、駆け足でそこに向かう。駆け足と言っても、レーダー内なのでそこまで遠くはない。

繁華街のある通りにあるバス停近くにたどり着いたアレックスは、そこにいる面々を見て会いたくない奴がいたものだと思った。なにせ、御坂美琴と上条当麻がいるのだ。唯我独尊に正義漢。すでに用が済んだのか、黒子が立ち去っていたのは幸運だろうが、この疲れる面々と顔を会わせたくないアレックスは立ち去ろうと背を向ける。触らぬ神に祟り無しと言うのだろうかとアレックスが思った途端、

「おい、アレックス！ 買い出しか？」

当麻によって大きな声がかけられた。この瞬間にアレックスが学

んだことは、触らなくても祟りに来る、である。
仕方なくアレックスは振り返り、当麻へと嫌そうな雰囲気醸し出しながら歩み寄った。

「よお。……デートか？」

「ちげーよ。こいつに巻き込まれたただけだ」

「その言い方はないでしょ。二千円分取り返してあげたんだから」

アレックスの冷やかしの言葉に、二人が冷静に答える。二人とも、つまりは美琴もだ。美琴の反応を見た当麻が、目を見開く。

「どうしたビリビリ？いつもなら電撃モノだろ？」

「……何でも無いわよ。それより、アンタも暇になったわね」

美琴は当麻の言葉を流すと、アレックスに皮肉を言うように言った。その顔には、どこか愉悦の色がある。実験で使用している研究所の襲撃を行っているのは美琴だと予測できていたアレックスは、そういう意味合いだと思い言い返すことにした。

「お前も俺を暇にさせようとしているのは知っているが、まだまだ忙しい。残念だったな」

アレックスは働きづめのところにそう言われたので、不機嫌そうに言う。この後も、すぐに実験が始まるのだ。

「えー！？。ちょっと、それってどういう」

「お姉さま？」

自分が何か勘違いをしていると気付いたような美琴がアレックスに問い詰めようとした瞬間、その声から感情を抜き取った声が三人の耳に入った。言わずもがな、妹達だ。

「何の用だ？」

当麻と美琴の座るベンチの後ろに立つ妹達の一個体に、アレックスは苛立ちのこもった声で問いかける。オリジナルに接触しに来るとはどういうつもりだという思いが、アレックスの頭を満たしていた。それも、部外者である当麻のいるタイミングでだ。

「……つて、え？増えてる！？御坂二号！？」

美琴とそれを見比べていた当麻が、大げさなまでに驚く。同じ人間が二人いれば、誰だって驚くだろう。

「研修中に立ち寄っただけです、とミサカは答えます」

「芳川め……」

妹達の言葉から、街をうろつく許可を与えた人物が思い当たるアレックスは、後で問い詰めようと頭に刻む。その間にも、当麻が「あのー、どちらさまで？」と、よそよそしく聞いている。

「妹です、とミサカは続く質問に間髪入れず答えました」

答える妹達に、アレックスの中で何かが首をもたげた。一方通行の言葉に淡々と答えてきた妹達がまともな返答をしているのを見て、

彼女がどう答えるかが多少の興味と研究者魂とも言うべき何かの琴線に触れたのだ。アレックスは当麻と妹達のやり取りを静観することに決め、口をつくむ。

「けど、御坂ナントカで一人称はミサカなの？御坂ミサカじゃねーんだからさ、そこは普通名前の方を使うもんじゃねーのか。家の中でも呼び名がミサカじゃ混乱しない？」

「ミサカの名前はミサカですが、とミサカは即答します」

アレックスも初耳だ。とはいえ、気にしたこともなかったので、大した驚きも彼には無いが。

「……、そうなのかアレックス？」

アレックスがミサカと知り合いだと見たのか、当麻が聞く。

「初耳だ」

「……さいで」

即答するアレックスに、知らないのかよとでも言いそうな当麻だ。アレックスにはミサカは実験道具であり、発電能力のレベル2か3という存在でしか無いので名前なんて物はどうでもいい。なんせ、どうせすぐに死ぬのだから。

「そ、そっか妹か。けど似てんなー。身長体重もおんなじレベルじゃねーの?」

「遺伝子レベルで同質ですから、とミサカは答えます。次いで、女

性に向かって体重の話題を振るのは礼儀知らずだと心の中で呟きました」

それにはアレックスも同意である。そして、心の中で呟いていることが聞こえてくるのはご愛嬌なのだろうか。いつか機密事項までポロリとしゃべってしまいそうなミサカをアレックスは不安に思い、ミサカネットワークでこのミサカに接続。そして、「実験に関連することはしゃべるな」と一言伝えて接続を切る。

「分かってます、とミサカは答えます」

「はい？」

「気にしないでください、こつちの話です」

いぶかしむ当麻を一瞥したミサカは、アレックスへ向き直ると口を開く。

「少し時間をもらえますか？」

アレックスはミサカに従い、街並みを珍しい物を見る目で眺めるミサカの後ろを歩いていた。当麻と美琴を残してきた二人だが、おそらく美琴は尾行してくるだろうとアレックスは思う。

夕暮れの繁華街をふらふらと進むミサカの横にアレックスが並ぶと、ミサカは言う。

「何の用か知りたいですか、とミサカはもったいぶるように言いま

す

「……さっさと言え。次の実験が近い」

「そうですね、私の検体番号は10032なので、明日までは暇です」

さらりと死人が出る話と死ぬ話を言う二人である。自由な思考があるのか疑問に思うアレックスに、「用というのは相談なのですが」とミサカが続ける。

「夕飯をごちそうしてください」

突拍子もない一言に、アレックスは啞然とする。

「一応聞いておく、理由は？」

「私は無一文で、栄養補給のできる研究所が遠いところにきてしまいました。よって、生活リズムを崩して実験に影響を及ぼさないためにも、私に夕食をごちそうしてください、とミサカは自信をもって提案します」

当麻とどちらが礼儀知らずかと聞かれれば、アレックスは10032号だと即答するだろう。

本当に夕食が遅くなるだけで影響が出るかどうかは別にして、実験に影響が出た場合に研究者から責められ、同時にアレイスターからも責められる可能性があるアレックスは思わずため息を吐いた。どうせ、大した出費でもないと思いつながら。

「ああ、分かった……いいぞ。もう面倒だから、店もお前が選べ」

「計算通り、とミサカはガッツポーズをとります」

そう言いつつも、ミサカは歩き続けるだけである。感情はあつて、表現ができないだけだろうか、とアレックスは推測を立てる。

「ここはどうでしょう、とミサカは食欲を抑えながら言います」

そう言いながらミサカが立ち止まったのは、イタリアンレストラの前。繁華街に数多ある店の家からなぜこの店なのかは、美琴がイタリアンが好きなのかこの個体が好きなのかどちらだろうか。

「分かったからさつさと入れ」

アレックスはそう言うと、ミサカを追い越してオレンジ色の灯りで照らされた店内に入る。

「いらっしやいませ、何名様ですか？」

「二人だ。奥の席を頼めるか？」

アレックスはミサカを見る人物が一人でも少ないように、という考えからきた配慮なのだが、店員はどこか変に取ったようで「かしこまりました」と何か企んだような笑みを浮かべると二人を一番奥の席へと案内した。

「ほら、さつさと座れ」

席に着くと、アレックスは椅子を引いてミサカを座らせ、向かい側に座る。

「ありがとうございます、とミサカはあなたが意外に紳士的なことに驚きます」

「これぐらい当然だ」

ミサカの嫌味とも取れるセリフに、アレックスは何でも無いといった様子で返答する。

レディーファースト精神が染みついているわけではないが、彼にとっては、しいては職場内の地位の関係で食事に意外と呼ばれていた身としては当然だ。本人がその食事会に行くことを、快く思っていたかどうかは別にして。

「では、ミサカはこれとこれを

」

その後、適当な物を自分も食べたアレックスは、久々のまともな料理も悪くないと思った。仕事をするだけで大量のカロリーが手に入るのだから、これといった食事を取ったのはかなり前になるのだから。

店から出た二人は、ここから二分もかからないところで実験が始まるアレックスと、研究所に戻るのであるうミサカは逆の方向だ。

「今日はありがとうございました、とミサカは感謝の心を込めた賛辞を送ります」

「そう思うのなら、亜雄にでも代金を請求してくれ。それが、芳川にでも外食に連れて行ってもらうんだな」

アレックスはミサカ of 言葉を流すと、電波時計用の電波から現在の時刻を知る。そして、もう実験は始まり、終わっているのではないだろうかと少々不安になった。開始から五分以上が経っているのだ、終わっていてもおかしくはない。

「じゃあな。健闘しろよ」

そう一言言うと、アレックスは全力疾走をするために空間移動を使って建物の上に飛んだ。

八月二十日（後書き）

もう少しでぞげぶタイム

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041s/>

とある科学の生物兵器

2011年11月20日20時24分発行